２００６年度

「学生による授業評価アンケート」
報 告 書

2006年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

立 教 大 学

２００７年11月

はじめに

総長　大橋　英五

本学の「学生による授業評価アンケート」は2004年度に開始され、以後4年間にわたり毎年実施されてきている。この報告書は第3回にあたる2006年度調査の分析結果をまとめたものである。2007 年度前期実施分についてもすでに集計結果が出され、分析に入ったところである。学部･学科による個別の調査はこれまでも見られたが、全学一斉に同一の調査票で行うという経験は初めてであり、それが定着を見せてきているということは大変喜ばしいことである。調査に協力されたすべての学生、勤務員に感謝したい。

3年間の調査を通じ、すでにいくつかの効果や課題が明らかになってきている。まず、授業の進め方であるが、「教員は授業の準備を周到に行っていた」の評点が2004年度の3.98から2005年度の4.01に上昇し、2006年度の4.01とこの2年間は4.0を超えてきていることが注目される。授業は教員から学生への一方的な語りで終わるものではなく、学生と教員の心の通い合いのなかで創られていくものである。板書の技術のレベルアップ、映像視覚教材の活用力のアップといった個別の課題は残るにせよ、教員が授業の準備を周到に行っていると学生に評価されていることの意味は大きい。本学教員の授業準備に向けた努力に心から感謝したい。

一方、昨年も指摘されたことだが、個別の授業における教員の個人的努力だけでは解決できない問題があることもまた事実である。教室不足のため授業に適した教室が割り当てられないこと、映像視覚教材設備が十分に備わっていない教室があること、他大学に比べ遜色ないとはいえ、本学の教育活動の水準からすればPC教室が不足してきていることなどである。これらについての学生からの指摘もあり、その抜本改善に向けて大学として一層の努力を傾注したい。

このほか、自習時間が少なく、学習が講義場面だけで完結してしまい自発的・発展的な学習につながっていないという問題や、学生がノートの取り方に習熟しておらずスタディ・スキルが不足していること、私語に代表されるスチューデント・マナーに問題があることなどもまた浮き彫りになってきている。改善に向けて全学的組織的に取り組むことが必要になってきている。さらには、それぞれの授業のカリキュラム上の位置がどれだけ明確になり、それがしっかり学生に理解されているかどうかについても不断の点検が必要である。各学部･学科等における組織的な取り組みに期待したい。

科目担当教員によるアンケート結果に対する所見は、所見集としてまとめられ、図書館に備え付けられている。また、アンケートを通じて得られた教員の授業の工夫については「RIKKYO 授業ハンドブック」としてまとめられ、全教員に配布されている。今年度はその増補版の作成も予定されている。さらには、ワークショップが開催され、学生とともに「授業」を考える機会ももたれている。これらを通じて、学生が、授業評価アンケートに対する関心を高め、教員とともに授業を創っていくことにつながることを願っている。この報告書もまたその一助となることを望みたい。

2006年度「学生による授業評価アンケート」を終えて

2006年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会
委員長　栗田 和明

2004年度から本格実施された「学生による授業評価アンケート」が３年目を無事終了し、ここに報告書をまとめる事ができた。授業を改善するために協力していただいた学生諸氏、教員、職員にあつくお礼を申し上げたい。

アンケートの結果と、教員からの反応、それらの分析については毎回、あらたな発見があるが、詳細は本文をご参照されたい。

本学では授業評価アンケートの開始自体は、必ずしも早くはなかったが、その内容と成果の生かし方については種々の工夫を凝らしていると自負している。教員が自分の担当科目についてのアンケート結果に答えているだけでなく、学部単位でもアンケート結果の分析をおこなっている。また全学でも教員、学生をまじえてのワークショップを開催している。これらの成果はその都度、「ニューズレター」などで報告している。

さて、私たちは 3 年間の授業評価アンケートの成果をふまえて次の段階を模索し、一部は実施を始めた。講義形式の授業のみを対象とした従来のアンケートではなく、ゼミ、実習等についてもアンケートを始めた。個別の授業だけではなく、カリキュラム全体の構造や、学生に対する大学のハード面・ソフト面の学習支援体制を検証すべく、カリキュラム・学習環境アンケートを 2006 年度から実施している。さらに、大学の評価は、在学生だけでなく、卒業生、就職先、高校生からの視点も必要かもしれない。

大学はまさにユニヴァースとして多様な側面をもつ。数千年の歴史をもつ文書を相手に、数十年の研鑽を重ねる者が評価されることもあろう。変化に翻弄されやすい現代社会をリードする知力と感性をもった者を、澎湃と育成することが評価されることもある。いずれにせよ、授業評価アンケートが当初掲げた 7 つの目的（下記参照）を目指して遂行していくなかで、「授業」評価だけにとどまらないで、種々の関連の活動を起こし、「大学全体」を魅力あるものにしていくよすがとしたい。

「学生による授業評価アンケート」の目的

① 教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。
② 教員同士が授業に関して相互研修をおこなう機会を提供する。
③ 学生の学習姿勢を知るための資料とする。
④ 学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。
⑤ 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。
⑥ 学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。
⑦ 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

目　次

はじめに

2006 年度「学生による授業評価アンケート」を終えて

1．授業評価アンケートの実施目的
1－1　目的 …… 1
1－2　「報告書」作成の基本的な考え方 …… 3
1－3　「所見票」について …… 4

2．授業評価アンケートの実施概要
2－1　実施方式 …… 7
2－2　設問項目 …… 7
2－3　実施対象科目 …… 11
2－4　実施教員数・実施科目数 …… 11
2－5　実施期間 …… 12
2－6　回答者数 …… 12

3．集計・分析方法
3－1　概要 …… 13
3－2　データの提供 …… 13

4．全学総評
4－1　全学総評の要点 …… 15
4－2　集計データから見られる結果のまとめ …… 16
4－3　担当教員からの所見票に対するまとめ …… 25

5．学部等総評
5－1　文学部 …… 29
5－2　経済学部 …… 33
5－3　理学部 …… 37
5－4　社会学部 …… 41
5－5　法学部 …… 49
5－6　経営学部 …… 53
5－7　観光学部 …… 57
5－8　コミュニティ福祉学部 …… 61
5－9　現代心理学部 …… 65
5－10　全学共通カリキュラム …… 69
5－11　学校・社会教育講座 …… 75

6．「II5『十分な静粛性が保たれた』」に関する詳細分析　79

7．集計データ（資料編）
7－1　回答者に関する集計 …… 85
7－2　項目内容と項目別平均値（全学） …… 88
7－3　「IV．総合評価」の平均値の学部間の比較 …… 91
7－4　「IV．総合評価」の平均値の授業規模による比較 …… 92
7－5　「IV．総合評価」の平均値の学年間の比較 …… 93
7－6　項目間の相関 …… 94
7－7　「所見集」の設置場所 …… 96

１．授業評価アンケートの実施目的

本学における授業評価アンケートは 2004 年度から毎年実施しており、本報告書は 3 年目となる 2006 年度に実施されたアンケートの報告書である。実施目的は開始以来これまで変更しておらず、初年度である 2004 年度の報告書に詳しく書かれているので、次ページ以降にそれを転載する。

実施目的は変更していないが、実施対象科目の選定方針については、後述する理由から 2007 年度に変更した。その意味で、本報告書は過去 3 年間のまとめとなるものであり、実施目的を述べるに先立ち、科目の選定方針を変更する元となった、アンケートに現れた 3 年間の変化について最初に簡単にまとめておく。

実施初年度である 2004 年度から 2 年目の 2005 年度にかけては、5 段階による評価方式の 23 項目中 22 項目に関して平均値が有意に上昇した。このことは、学生の授業に対する評価および満足感がほぼ全面的に上昇したことを意味している。次に、2005 年度と 2006 年度を比較すると、平均値が有意に上昇した項目が 12 項目、有意に変化しなかった項目が 6 項目、有意に低下した項目が 5 項目となった。

このことは、1 年目から 2 年目には教員が授業改善に取り組みその結果かなりの効果が上がったが、2 年目から 3 年目にかけてはその上昇が続かなかったことを示している。それは、個々人が更なる改善に取り組まなかったというよりは、個人の取り組みによる改善の余地が少なくなったことを暗示しているのではないか。それは、同じ方式でアンケートを継続することを再検討して、教学改善により有効に活用できる方向性を探る必要性があることをも示唆していると受け止められるのである。

授業評価アンケートの実施と並行して、2006 年度には立教大学の教学運営のために必要な各種情報について検討し、その全体像と方向性を明らかにする場として「教育調査の検討グループ」が設置（2006 年 6 月 29 日部長会決定）された。

同グループでは、授業評価アンケートに関する上述の分析を受け止め、2007 年度の授業評価アンケートをどのように実施するかについての検討と改善案の提案を行った。その提案を受け大学は、スタート時に掲げた目的のうち、「学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る」「大学として教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る」により比重を移すことを決定した。具体的には、それまでの「1 教員 1 科目」の方針に限定せず、2007 年度は、各学部が必要性に応じて選定した科目に対してアンケートを実施することを可能とした。

１－１　目的

本学における全学規模の学生による授業評価アンケートは、2002 年 7 月 10 日に総長に提出された「全学 FD 検討委員会答申」に始まる。その中で、本学にとっての最重要 FD 課題として次の 3 点が挙げられている。第一に「教員における授業力の向上」、第二に「カリキュラム編成の合理化」、第三に「成績評価の厳正化」である。そして、その中でも緊急性がもっともあるとされたのが第一の課題であり、その中で「授業力向上に向けての具体策」のひとつとして挙げられていたのが「学生による授業評価の制度的実施」である。それを受けて、2002 年 12 月 18 日付け文書「FD について―学生による教育評価アンケートの 2003 年度実施に当たって―」の中で総長は、敢えて「教育評価」という言葉を用い、「個々の科目の授業やその担当教員への評価をこえて、広く本学の教育について、学生の評価を参照したい」と述べ、「学生による教育評価アンケート」をできる限り早期に実施したいとの方針を明らかにした。

それを受けて直後の 2002 年 12 月 21 日には早くも全学教務委員会 FD 専門部会の第 1 回部会が招集され、年度をまたいで検討が続けられた。その過程で、2003 年度実施は見送られ 2004 年度実施を目標とすること、施設その他の教育条件一般を問うアンケートの前に、授業そのものに目標を絞って問うことなどの合意が形成され、「学生による授業評価アンケート」を行うことが決まった。そして、具体的アンケート項目作成作業が開始され、他大学のものをも参照しつつも、三つの独自案にまとまってゆき、並行して行われていたアンケートの目的や実際の実施方法などの検討結果とも連動しながら、最終的にひとつの案に集約されていった。その結果は部長会に報告され、了承を得て、その後、各学部教授会とのやり取りがあり、2003 年の秋に 2004 年度前期から「学生による授業評価アンケート」を実施することが正式に決定した。そして、2004 年度 4 月から「学生による授業評価アンケート実施委員会」が立ち上げられ、前期と後期に実施された。

その実施の目的は、部会における議論の結果、以下の点にあると考えられるにいたった。

① 教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。
② 教員同士が授業に関して相互研修をおこなう機会を提供する。
③ 学生の学習姿勢を知るための資料とする。
④ 学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。
⑤ 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。
⑥ 学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。
⑦ 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

以上である。

要するに、本学の「学生による授業評価アンケート」は端的に言って、個々の教員による授業を、学生がより充実して学習を進め大学としての教育力が今より一層効果的に機能することを目指して改善し、その結果として学部・学科としての教育力をも増進することを唯一の目的とする、ということである。そうして、学生をも巻き込んで、本学が知的に活発で、創造性に富み、常に先進的に新しい知を発信し、それに基づく生き方を常に提案し続ける力を保持することができるようになることを最終目的とする。

それに対して、場合によっては教員の活力を削ぐことになりかねない教員管理の視点は厳しく排除される。大学は教職員と学生が相互に自己管理することを前提に、自由に精神活動をおこなう場である。特定の目的のために教職員ならびに学生を管理し、特定の方向へ向けるべく力を加えることは、大学本来の知的創造力を失わせ、ひいては大学が本来持っているはずの社会的役割を放棄し、その負託に答えられなくなることを意味する。その意味で、この「学生による授業評価アンケート」結果のデータは特定の意図を持って処理され、一律の基準の下に評価されることはない。それゆえに、集計データの統計的処理はアンケート対象になった個々の教員に任されることになった。それが所見票に表現されるのである。

このアンケートは大学としての教育力向上を目的としておこなわれるので、学生の自覚を促すことも期待されている。そのことは、一朝一夕に実現させることは難しいかもしれないが、学生たちの評価アンケート結果に対して、各教員がそれぞれの学問的見識を持って所見票で答え、実際の授業に反映する努力が積み重ねられることによって、徐々に現実化してゆくであろう。現在の大学では学生の自主的活動が必ずしも本来期待されているほど十分でなく、大学生の学校生徒化が進んでいると一般に言われている。その中で、学生の主体的参加が教員との関係を変えるきっかけになることを直接に経験することで、学生の姿勢が変化することを期待したい。

さらに、アンケート結果、所見票が公表されることにより、教職員相互間、あるいは教員と学生との間で切磋琢磨する風潮が広まれば、大学全体として、個々の学問研究と教育の活動に根ざした種々の改善が期待される。カリキュラムはもちろん、組織の運営体制や施設なども、このアンケートを手がかりにその評価の俎上に載せられることになってゆくであろう。

この「学生による授業評価アンケート」が、大学の知的エネルギーを構成している教職員相互の関係や教職員と学生との関係、あるいは学生相互の関係などを揺り動かし、多様な観点から相互に力を及ぼしあう結果になることを、我々は心から期待したい。そして、そのことがやや動脈硬化が進行してきた大学という組織にも再び熱い血を通わせ、教職員も学生も本学に集うことこそがその熱い血の拍動を生み、学問に触れることが楽しくて仕方がないという状況を生み出すことを心から願う。

１－２　「報告書」作成の基本的な考え方

「学生による授業評価アンケート」は調査である限りその結果がまとめられなければならない。我々はそれを報告書という形で世に問う。この報告書はアンケート対象になった個々の授業が 1−1 で述べられた目的に沿って学生によって評価された結果を総体として、学部・学科ごとに、そして大学全体として、その教育力を評価し、成果の上がっていることに関してはその成果の意味を明らかにし、さらにその成功を維持するための方策を考え、改善が必要なことに関しては、その原因を究明し、その克服のための方法を構築する。そして次回のアンケートにその改善努力の成果を問う。

この報告書の構成は以下のとおりになっている。

まず、（1）すでに述べたとおりこのアンケートの目的を明らかにする。その次に、（2）

その目的に沿ったアンケート実施の概要を報告する。その上で、（３）統計処理上の技術的方針について、我々の考え方を明示し、データの性格を規定し、将来の調査をも視野に入れた分析方針を提示する。そして、（４）全学的な総評をおこなう。最後に（５）学部やその他の教育組織ごとの総評をまとめる。以上である。

この報告書はあくまで1−1のアンケートの目的に謳われている⑥学部・学科としてのカリキュラムの有効性を測定するための資料、および⑦大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を提供するためにおこなわれる。したがって、この報告書には個々の授業やその担当者、あるいはある学科の科目として特定できるような記述は記載されない。

それと同時に、この作業は全体としての③学生の学習姿勢を知るための資料、および④学生の授業への期待のありかを知る資料を得ることにつながる。授業に参加する学生たち自身の勉強に対する姿勢もアンケート項目に入っているので、それらについてはこの報告書の中で、各所で触れられることになるだろう。

これらの目的達成を検証することを狙い、我々は報告書を作成する。ちなみに目的の①と②は次に述べられる所見票に示されるだろう。⑤学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起するという点については、この報告書や同時に作成される所見票(とその集成である所見集)に示されるのではなく、今後おこなわれる将来の「学生による授業評価アンケート」にその成果が示されることになるだろう。

１－３　「所見票」について

個々の科目のアンケート結果は、同じ科目の将来の開講の際に生かされるはずである。しかし、一方ではアンケートに答えた学生たちには、将来の授業では直接的にフィードバックすることはできない。そこで、個々の科目のアンケート結果についても、何らかの形で少なくとも当該学生たちには公開される必要がある、と我々委員会は考えた。その際には、単純にアンケート項目の集計結果だけを公開する方法と、それに対する教員の所見をも添えて公開する方法が考えられる。

我々は個々の科目担当者に、自分の科目についての自己点検・評価という意味でアンケート結果のデータを読んでもらい、「授業評価に対する担当教員の所見」、「自由記述欄に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」を書いてもらうこととした。この 3 つの教員記述にアンケートのすべての項目についてその結果を帯グラフに表したデータを付したものを「所見票」と称した（p.6 参照)。そして、この所見票を学生に公開することにした。

所見票を書くことはアンケート対象教員にとって負担にはなる。しかし、我々は敢えて対象となった教員全員に所見票作成を依頼した。なぜならば、自分の授業についての学生による評価が出たならば、それについての対処を明確に行い、アンケートに協力してくれた学生たちに直接回答することも、授業担当者である教員の義務だと、我々は考えたからである。所見票はそのすべてが 1 冊にまとめられて所見集とされ、学生に対して学内で公開されることになる。

所見票の狙いは以下の点にある。

① 教員がアンケート結果についてそれを直視し、自らの見解を発表する場を与える。
② 学内で公表されることによって、学生に直接回答する機会を与える。
③ アンケートに含まれる自由記述についてはデータ化できないので、教員の直接的コメントを通してその内容を明らかにすることを求める。
④ 改善に向けた明確な決意と工夫を書くことにより、次回のアンケートとの比較を行い易くし、具体的授業改善の実現を可能にする。

以上である。

①については、教員側にも、もし学生からいわれのない不評や批判があった場合には、弁明する機会が欲しいとの声もあった。また、所見票を書けば、アンケート結果をつぶさに直視し、それに向き合って、自分に取り入れる契機とすることができる。さらに、データの多様な集計を当該教員に任せ、教員の必要に応じた分析を行い、納得の行く分析結果を出してもらうことにも意を注いだ。所見票はその結果を発表する場でもある。

②については、学生に対する直接回答であることを重視し、教員が自らの見解を自由に率直に表明しやすくするという趣旨で、公開は学内に限り、学生の便宜を考えて図書館に配置することにした。

③については、自由記述が単純にデータ化できないため、結果すべてを所見票に載せることはできない。また、記述内容によっては書き手が特定される場合もある。そこで、それを読んだ教員の責任でまとめてもらうことにして、教員所見にそのための欄を設けた。

④については、これを書くことでこのアンケートの目的で指摘された教員の自己研修を促すことになる。また、所見集が学内で公開されることから、学生以外にも同僚教員の目に触れる機会もあり、相互研修にもなることが期待される。

以上、所見票はこのようなことを期待して作られたのである。

（pp.2-5 は 2004 年度報告書より転載）

2006年度後期立教大学授業評価アンケート　所見入力票

科目コード	開講曜日	火	担当者		履修者数	239
科目名	開講時限	3-3	教室	8303	回答数	114

単純集計結果 (5:大いにそう思う,4:そう思う,3:どちらともいえない,2:あまりそう思わない,1:そう思わない,無回答)

5	4	3	2	1	無回答	エラー

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1)授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70～89% 3:50～69% 2:30～49% 1:30%未満)

2)この授業に積極的に参加した

3)この授業の履修にあたって十分な準備ができていた

4)授業をきっかけにして発展的な勉強をした

5)シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った

6)授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3時間以上 4:2～3時間 3:1～2時間 2:1時間未満 1:0時間)

II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1)聞きやすい話し方だった

2)各回の授業内容の量が適切だった

3)各回の授業のねらいは明確だった

4)各回の授業内容は明確だった

5)十分な前歴性が保たれた

6)教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった

7)板書のしかたが適切だった

8)映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった

9)教員は授業の準備を周到に行っていた

III. この授業の内容は、以下のどの項目にどの程度当てはまりますか。

1)新しい考え方・発想に触れた

2)基本的知識が得られた

3)テーマが現代的な意味を持っていた

4)最新の学問成果に触れた

IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1)わかりやすい授業だった

2)授業全体の目標が明確だった

3)学問的興味をかきたてられた

4)この授業を受けて満足した

V. 学部等による質問（全学共通カリキュラム）

1)この授業の教室の大きさは適切だった

2)この授業の受講者数は適切だった

授業評価に対する担当教員の所見

2004年度、05年度のアンケートで、学生満足度の低い授業と評価されたので、本年度の授業準備の段階で、○○学科3年生の学生に、パワーポイント資料について意見を聞き、学生にとって分かりやすい内容に改善するように努力した。その効果と思われるが、本年度のアンケート結果は、昨年度に比較して全般的に平均値が向上した。特に、Ⅳに関しては0.43から0.76と大きく向上したので、授業全体として、わかりやすく学問的興味をかきたてるように改善され、その結果として満足度もあがったのであろう。授業内容に関して学生の率直な意見を聞き、学生の立場で準備することの大切さを実感した。「各回の授業内容の量が適切だった」は、0.28と顕著に低下したことから、授業内容を絞り込む必要性があると思われる。Ⅳに関して向上したが、その絶対値は十分高いとはいえないので、さらに高度な内容を分かりやすく授業する必要があると認識している。

自由記述欄に対する担当教員の所見

(1)授業内容に関して、この授業の内容は高校レベルであるので、もっと高度な内容にすべきだという少数の意見があったが、試験の出来具合を見るととてもこれ以上レベルをあげることは困難であると判断している。全カリ総合の授業を、学習すべきレベルで何種類かに分類できるような仕組みを作らない限り、レベルの違う学生の全ての要望にこたえるのは困難であろう。(2)おしゃべりに関しては、厳しく対応して、教室全体に対して複数回注意した後は、おしゃべりをした学生を退出させた。実際には、数回の授業で退出を求めた。これに関する自由記述は、静かでよかったと積極的に評価する学生がいる一方で、見せしめで退出させることに批判的な学生も居た。おしゃべりに関しては、周囲の学生の聞く権利を侵害しているので、今後も厳しく対応する。(3)パワーポイントの切り替えが早すぎるという指摘は、資料として配布することで解消するであろうが、パワーポイント資料を事前に配布すると授業を良く聞かなくなるという弊害もあるので、CHORUSにファイルをアップすることで対応したが、十分に理解してもらえなかったのであろう。

改善に向けた今後の方針

本年度に評価が向上したので、本年度の改善の方向が間違えていないことが確認できた。来年度に向けて、基本的には同じ方向で改善を図りたい。本年度のパワーポイント資料を、再度、○○学科の学生に見せて意見を聞き、学生の立場でより分かりやすい教材を作るように努力したい。その際、内容を整理してより厳選するつもりである。また、CHORUSは資料をアップするだけに利用したが、もう少し双方向性を使った積極的な利用できないかと考えている。私語に関しては、最初の授業で、「授業の約束」として十分浸透するようにして、私語をしたい人はこの授業を履修しないように徹底して対応したい。

２．授業評価アンケートの実施概要

２－１　実施方式

無記名式の質問紙によるアンケート方式にて実施した。また、アンケートの実施は授業時間内（授業開始から 30 分間、もしくは授業終了前の 30 分間）において行うこととした。

なお、実施委員会では、アンケートの実施にあたって、その方式として、質問紙による方式と Web による方式とが検討された。全体の業務量や集計データの加工の容易さからすると Web による方式が望ましいと考えられたが、検討の結果、授業評価アンケートが定着していない現状では、有意の回収率を得ることが難しいと判断し、質問紙による方式を採用した。

２－２　設問項目

アンケートの質問紙は、5 段階による評価方式の設問を 23 設問、自由記述欄を 2 箇所の構成とした（pp.8-9 参照）。設問は、2004、2005 年度と同一とした。設問の中には、必ずしも全科目には該当しないと思われるような設問もある。例えば、「板書のしかたが適切だった」との設問は、板書を使用しない授業を行う教員には必要がない、といったケースである。実施委員会としては、各設問項目の数値は、科目の特徴に照らして各科目担当者の裁量により解釈されるものとしている。

また、学部等によって独自の設問が設定できるよう、1 学部あたり最大で 7 設問を設定できるようにした。2006 年度は、2005 年度と同じ内容で、文学部（2 設問）、経済学部（1 設問）、理学部（1 設問）、観光学部（7 設問）、全学共通カリキュラム（2 設問）が学部設問項目を設定した（p.10 参照）。

393742

2006年度立教大学授業評価アンケート

このアンケートは、立教大学の授業を改善し、さらに充実させることを目的に行われます。回答の内容が、この授業についてのあなたの成績評価に影響することはまったくありません。また、この調査はすべての項目について５の評価が得られることを理想とはしていません。率直かつ責任をもった回答をお願いします。

立教大学

指示に従って「科目コード」、「学部」、「学科」、「学年」をマークしてください。

科目コード												
Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ	Ⓓ	Ⓔ	Ⓕ	Ⓖ	Ⓗ	Ⓘ	Ⓙ	Ⓚ	Ⓛ	Ⓜ
Ⓝ	Ⓞ	Ⓟ	Ⓠ	Ⓡ	Ⓢ	Ⓣ	Ⓤ	Ⓥ	Ⓦ	Ⓧ	Ⓨ	Ⓩ
Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ	Ⓓ	Ⓔ	Ⓕ	Ⓖ	Ⓗ	Ⓘ	Ⓙ	Ⓚ	Ⓛ	Ⓜ
Ⓝ	Ⓞ	Ⓟ	Ⓠ	Ⓡ	Ⓢ	Ⓣ	Ⓤ	Ⓥ	Ⓦ	Ⓧ	Ⓨ	Ⓩ
⓪	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨			
⓪	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨			
⓪	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨			

本学学部生									
学部	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ	Ⓓ	Ⓔ	Ⓕ	Ⓖ	Ⓗ	Ⓘ
学科	Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ	Ⓓ	Ⓔ	Ⓕ	Ⓖ	Ⓗ	Ⓘ
								Ⓜ	Ⓝ
学年	①	②	③	④					
本学学部生以外	その他								

（注意）
1．マークにはHBの鉛筆を使うこと。
2．太枠内に必要事項を記入の上マーク欄に正しくマークすること。
3．誤りは消しゴムで完全に消すこと。
4．指定以外のところには書きこまないこと。
5．科目コードにマークミスがあった場合にはこの調査票は無効となる。
6．折りまげたり汚したりしないこと。

以下の項目に対して、あなたにとって５段階のどの評価であるか、〔評価欄〕にマークしてください。

５：大いにそう思う　４：そう思う　３：どちらともいえない　２：あまりそう思わない　１：そう思わない

	〔評価欄〕
Ⅰ．この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1）授業全体を通じての出席率（次の中から選んでマークしてください） 5：90%以上　4：70%～89%　3：50%～69%　2：30%～49%　1：30%未満	⑤ ④ ③ ② ①
2）この授業に積極的に参加した	⑤ ④ ③ ② ①
3）この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	⑤ ④ ③ ② ①
4）授業をきっかけにして発展的な勉強をした	⑤ ④ ③ ② ①
5）シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	⑤ ④ ③ ② ①
6）授業の予習復習等に毎週当てた時間（次の中から選んでマークしてください） 5：3時間以上　4：2～3時間　3：1～2時間　2：1時間未満　1：0時間	⑤ ④ ③ ② ①
Ⅱ．この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1）聞きやすい話し方だった	⑤ ④ ③ ② ①
2）各回の授業内容の量が適切だった	⑤ ④ ③ ② ①
3）各回の授業のねらいは明確だった	⑤ ④ ③ ② ①
4）各回の授業内容は明確だった	⑤ ④ ③ ② ①
5）十分な静粛性が保たれた	⑤ ④ ③ ② ①
6）教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	⑤ ④ ③ ② ①
7）板書のしかたが適切だった	⑤ ④ ③ ② ①
8）映像視覚教材（ビデオ、ＯＨＰ、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	⑤ ④ ③ ② ①
9）教員は授業の準備を周到に行っていた	⑤ ④ ③ ② ①
Ⅲ．この授業の内容は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1）新しい考え方・発想に触れた	⑤ ④ ③ ② ①
2）基本的知識が得られた	⑤ ④ ③ ② ①
3）テーマが現代的な意味を持っていた	⑤ ④ ③ ② ①
4）最新の学問成果に触れた	⑤ ④ ③ ② ①
Ⅳ．総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1）わかりやすい授業だった	⑤ ④ ③ ② ①
2）授業全体の目標が明確だった	⑤ ④ ③ ② ①
3）学問的興味をかきたてられた	⑤ ④ ③ ② ①
4）この授業を受けて満足した	⑤ ④ ③ ② ①

※裏面にも設問がありますので、裏面も記入してください。

〔評価欄〕

Ⅴ．学部等による設問	
1）別途の指示に従ってマークしてください	⑤ ④ ③ ② ①
2）別途の指示に従ってマークしてください	⑤ ④ ③ ② ①
3）別途の指示に従ってマークしてください	⑤ ④ ③ ② ①
4）別途の指示に従ってマークしてください	⑤ ④ ③ ② ①
5）別途の指示に従ってマークしてください	⑤ ④ ③ ② ①
6）別途の指示に従ってマークしてください	⑤ ④ ③ ② ①
7）別途の指示に従ってマークしてください	⑤ ④ ③ ② ①

Ⅵ．自由記述（以下の質問について自由にお答えください）

1）この授業で良いと思った点があれば書いてください。

2）この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。

ご協力ありがとうございました

2006 年度立教大学授業評価アンケート

Ｖ．学部等による設問

以下の項目に対して、あなたにとって 5 段階のどの評価であるか、別紙『2006 年度立教大学授業評価アンケート』裏面の「Ｖ．学部等による設問」〔評価欄〕にマークしてください。

5：とてもそう思う　4：そう思う　3：どちらともいえない　2：あまりそう思わない
1：そう思わない

（文学部）

１）この授業の教室の大きさは適切だった。
２）この授業の受講者数は適切だった。

（経済学部）

１）この授業の教室の大きさは適切だった。

（理学部）

１）教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた。

（観光学部）

１）わたしの成績は、観光学部の中で良いほうだ。（観光学部以外の学生は答えないこと）
２）わたしは、授業中に、飲食や私語をすることを好ましくないと思う。
３）わたしは、新座キャンパスで学ぶことに満足している。
４）わたしは、旅行することが好きだ。
５）わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した。
６）わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた。
７）わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた。

（全学共通カリキュラム）

１）この授業の教室の大きさは適切だった。
２）この授業の受講者数は適切だった。

以　上

２－３　実施対象科目

実施科目は、学部講義科目（全学共通カリキュラムおよび学校・社会教育講座を含む）を対象とし、専任教員、兼任教員を問わず、2006 年度中に１教員１科目について実施することを原則とした。

実施科目の選定は、学部等の FD 委員会が、この原則に従いつつカリキュラムとの関連等を考慮し行った。なお、学部等の FD 委員会の判断で必要に応じて１教員複数科目の実施も可とした。また、全学共通カリキュラム運営センターの決定により、全学共通カリキュラム総合教育科目を担当する教員は、専門科目での実施にかかわらず、全学共通カリキュラム総合教育科目を対象として１教員１科目の実施が適用された。

上記のように「1 教員１科目」の原則で実施がなされたので、全科目調査ではないことを認識しておく必要がある。

２－４　実施教員数・実施科目数

学部別の対象科目数、実施科目数、所見票の提出数に関して、担当教員を専任と兼任に分けて下の表にまとめた。全学の実施率は 1,053/1,066（98.78%）、所見票提出率は 889/1,053（84.43%）であった。なお、通年科目の前期と後期で異なる科目担当者がそれぞれアンケートを実施した場合は、前期１科目および後期１科目としてカウントした。また、半期科目で複数の科目担当者がそれぞれアンケートを実施した場合、科目担当者毎に１科目としてカウントした。

	対　象	担当者内訳		実　施	担当者内訳		所見票	担当者内訳	
	科目数	専 任	兼 任	科目数	専 任	兼 任	提出数	専 任	兼 任
文　学　部	199	59	140	197	58	139	163	43	120
経　済　学　部	108	46	62	107	45	62	96	41	55
理　学　部	111	63	48	108	62	46	96	58	38
社　会　学　部	130	40	90	129	40	89	99	30	69
法　学　部	66	39	27	65	38	27	54	33	21
経　営　学　部	25	13	12	25	13	12	24	13	11
観　光　学　部	68	22	46	67	22	45	56	17	39
コミュニティ福祉学部	82	25	57	80	24	56	58	18	40
現代心理学部	8	5	3	8	5	3	6	3	3
全学共通カリキュラム	207	65	142	205	64	141	179	56	123
学校・社会教育講座	62	6	56	62	6	56	58	6	52
合　計	1066	383	683	1053	377	676	889	318	571

注）所見票提出数は、2007 年 6 月 30 日現在

２－５　実施期間

実施は、①授業が進行した後半の時期が好ましい ②試験の時期は避けることから下記の期間とした。

前期 ： 2006 年 6 月 22 日（木）から 6 月 28 日（水）
後期 ： 2006 年 12 月 4 日（月）から 12 月 9 日（土）

上記期間内に実施できない場合は翌週に実施することとした。

２－６　回答者数

科目の開設学部等別の回答者数を下の表にまとめた。

回答者の匿名性を守る必要性から個人を特定できる設問項目はないため、異なる科目に出席する同じ学生を一致させることができないので、回答者数（度数として表記する場合もある）は、延べ人数である。なお、参考のために、履修者数も表に載せた。

回答者は、アンケート実施時に出席し、アンケートに回答した学生のことである。したがって、授業に出席していない学生の意見を聞くことはできない。また、授業へは出席しているが、アンケートには回答しなかった学生も存在する可能性があることを指摘しておく。

科目開設学部等	前　期		後　期		合　計	
	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数
文　学　部	9,293	5,291	8,064	4,449	17,357	9,740
経　済　学　部	2,671	1,328	17,985	6,458	20,656	7,786
理　学　部	3,158	1,840	3,288	1,662	6,446	3,502
社　会　学　部	7,023	3,127	8,377	3,731	15,400	6,858
法　学　部	9,637	3,378	10,776	3,409	20,413	6,787
経　営　学　部	2,211	1,585	2,058	968	4,269	2,553
観　光　学　部	4,025	2,159	3,381	1,618	7,406	3,777
コミュニティ福祉学部	4,495	2,536	3,932	2,081	8,427	4,617
現代心理学部	582	433	945	663	1,527	1,096
全学共通カリキュラム	20,163	9,864	17,862	7,902	38,025	17,766
学校・社会教育講座	2,771	2,034	1,329	977	4,100	3,011
合　計	66,029	33,575	77,997	33,918	144,026	67,493

３．集計・分析方法

３－１　概要

１）基礎データの集計

①回答者に関して、学内者・学外者の度数および割合（%）、学年の度数および割合（%）、学部等別学年別の回答者数、学部別回答者数に占める自学部学生比率（%）、学部等別の回答者数、履修者数、および回答率（%）

②各設問の全学平均値、度数、標準偏差および 2004 年度、2005 年度との比較

③各設問の学部平均値、度数、標準偏差および 2005 年度との比較

２）総合評価に関する分析

アンケート（p.8 参照）の「Ⅳ．総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。」（以下「総合評価」と記す）の各設問について、下記の 3 項目の平均値の差の検定（一要因の分散分析および多重比較）を行った。

①学部間の違い

②授業規模による違い

（規模を、回答者 50 名以下、51～100 名、101～150 名、151 名以上の 4 群に分けて分析）

③学年間の違い

３）項目間の関連

設問項目間に関連があるか検討するため、各設問項目間でピアソンの相関係数を算出した。

３－２　データの提供

１）科目担当者

①科目コード、科目名、開講曜日・時限、担当者、教室、履修者数、回答数

②各設問の平均値と回答者数の積み上げ棒グラフ

③自由記述の一覧

２）学部等のＦＤ委員会

上記「３－１　概要」に掲げた１）から３）のすべてのデータおよび所見票を提供した。そのうち、「１」③各設問の学部平均値、度数、標準偏差」と所見票は、当該学部のもののみを提供した。

本報告書を読む上で必要な、統計に関する用語の解説を以下にまとめた。

平均値の比較：一要因の分散分析

あるグループ間（学部間など）に統計的に有意な差があるか検討するための分析方法のこと。グループ全体のどこかに差があるということがわかるので、どのグループ同志に差があるかを検討するためには、事後検定として多重比較（本分析では Tukey の HSD）を実施する。

有意差

あるグループ間の数値的な差（平均値や度数など）について統計的に検討した結果、ある程度の確率（例：偶然では 5%、すなわち 20 回に 1 回しか起こらないというほどの差がある）で、そのグループ間に差があると確かめられたもの（「統計の有意性」もあわせて参照のこと）。

統計の有意性

統計の結果（平均値の差など）が、確率論的に確かめられたもの。たとえば“ $p<.05$ ”と表記されている場合は、偶然で起こるとしたら、5%の確率、すなわち 20 回に 1 回しかその結果（平均値の違いなど）が起こらないので、その結果には統計的に意味があると考える。

相関分析

a および b という項目があった場合、a に 1（低い値）をつけた人の多くが b にも 1（低い値）をつければ、相関は強くなる。

二つの項目の数値が同じ傾向の動きをするほど相関は強くなる。まったく同じ動きであれば、相関係数は 1.0 となり、真逆の動き（一方に 1 をつけた人はもう一方に 5 をつける）をすれば、-1.0 となる。まったくばらばらであれば、相関係数は 0.0 となる。

４．全学総評

全学総評は、全学の集計データと、５章にまとめられている学部等総評を元に、実施委員会が執筆した。

４－１　全学総評の要点

ここでは、2006 年度の分析結果に現れた主な特徴について述べるが、2004 年度および 2005 年度との比較において特に重要と思われる点についても触れる。

以下の①から⑩については、2006 年度の特徴であり、それは 2005 年度と全く同じ傾向であることも特徴である。

① 学生からの授業評価は、全体的におおよそ良好な評価であった。

② 回答者数／履修登録者数の比率が低く、日常の授業の出席率の問題が認識された。

③ 講義時間以外で、学生の予習復習にかける時間が圧倒的に少ない。

④ 学部間で授業評価に有意な差はあるものの、評価の低い学部においても絶対的な水準では低くはない。

⑤ 授業技術に関しては、板書の仕方に関する否定的な意見が多い。

⑥ 学生の講義に対する「満足度」は「聞きやすい話し方」、「授業のねらいの明確さ」、「授業内容の明確さ」、「新しい考え方・発想」、「基本的知識」、「わかりやすさ」、「授業全体の目標の明確さ」、「学問的興味」に関連する。

⑦ 授業規模では 50 名以下の授業の評価が最も高く、大人数授業の評価は低い。

⑧ 1 年次生から 4 年次生と学年が進行するに従って、授業に対する評価は上る。

⑨ 多くの教員は、このアンケートから授業改善へのヒントを得たと認識しており、今後の授業改善に関する課題が明示された。

⑩ 同時に、授業改善に関して、教員個人レベルでは解決できない問題についての意識化も進みつつあり、大学全体としての FD への取り組みの必要性が指摘された。

また、次の 2 項目は、3 年間の経年比較を通じての特徴である。

⑪ 実施初年度である 2004 年度から 2 年目の 2005 年度にかけては、23 項目中 22 項目の平均値が有意に上昇した。しかし、2005 年度から 2006 年度にかけて、平均値の有意な上昇が示された項目と、平均値の有意な下降が示された項目とが混在した。平均値の上昇が止まった項目の絶対的な平均値水準を考えると、上げ止まりと考えうるような現象も発生している。

⑫ 2006 年度の平均値を 2004 年度と比較すると、II5「十分な静粛性が保たれた」のみが有意に低下し、他の 22 項目の設問については有意に上昇した。このことは、私語に対する対策を、全学的に検討する必要性を示しているのであろう。

４－２　集計データから見られる結果のまとめ

１）回答者に関する集計

最初に、回答者に関する集計をまとめておく。

学内者と学外者の度数を集計し、図表１にまとめた。学外者の構成比率は、0.75%と極端に少なかった。f-Campus などの単位互換制度があるが、十分に活用されていないのであろう。今後の単位互換制度などを考える上で参考になるデータになろう。過去の学外者の構成比率は、1.04%（2004 年度）、0.79%（2005 年度）であり、調査開始以来、学外者の比率が低くかつ低下している。

回答者の学年別の度数（人数）は、全学を図表 2 に、学部別を表 3（資料編 p.86）にまとめた。このデータからは、4 年次生の比率は少なく、3 年次生の比率はそれに続くが、それに対して 1、2 年次生がほぼ同じ比率で講義を受講していることがわかる。学部別に見る際に注意すべき点は、2006 年 4 月開設の新学部である経営学部と現代心理学部には 1 年次生しか在籍していないことである。現代心理学部の場合は、他学部の 2 年次以上の受講はほとんどなく、比率は 0.3%あった。一方、経営学部は他学部の 2 年次以上の学生がかなり受講しており、2 年次生以上の比率が 28.8%あった。この学年の偏りは、1 年次生の平均値が他の学年に比較して低くなることが分かっているので、新設 2 学部の平均値が低くなる可能性があることを意味している。特に、実質的に 1 年次生のみの現代心理学部の場合には、学年の偏りの影響は大きくなる。

科目開設学部ごとに学生の所属学部を集計し、科目開設学部の学生（自学部学生）と他学部学生に分けて集計した（表 4、資料編 p.86）。多くの学部の自学部学生の比率は 95%以上であったが、経営学部が 71.7%と最も低かった。

回答者数と履修者数の比率（表 5、資料編 p.87）は、出席率の目安になる数値であるが、出席しているが回答しなかった学生が居る可能性があるので、出席率よりも若干低い値である可能性はある。この比率に関して以下に分析を述べる。この比率は、資格課程である学校・社会教育講座の 73.44%、および、現代心理学科の 71.77%以外は、すべての学部で 50%台、もしくはそれ以下の数値であり、全学で 46.86%と昨年の数値 43.50%を上回ったものの出席の悪さが際立っている。この傾向は、2004 年度から続いている。この分析では、選択科目、必修科目の別は、考慮されていないので、さらに詳しい分析と考察が必要ではある。しかし、全学的傾向の原因として可能性のあることは以下の各点である。

① いわゆる保険登録の学生が多いこと。

② 講義期間中に履修をやめてしまう学生が多いこと。

③ 出席しなくても単位認定される講義が多いこと。

上述のいずれが原因であるにせよ、全学の学生への教育責任という観点からは、対策を講じる必要があろう。

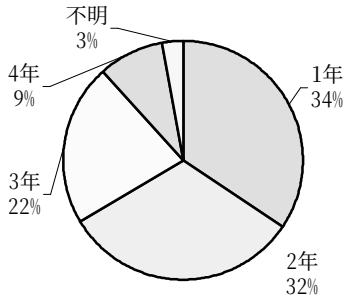
「①いわゆる保険登録の学生が多いこと」、「②講義期間中に履修をやめてしまう学生が多いこと」に対する対策として、履修上限の設定と GPA 制度の導入は、こうした問題へ一つの有効な対策となる可能性がある。今後の動向が注目される。また、「③出席しなくても単位認定される講義が多いこと」の有無については、学部による考え方の違いが存在することは事実である。

図表１　学内者・学外者の度数および割合（%）（資料編 p.85 の表１と同じ）

	度数	割合
学内	66,988	99.25
学外	505	0.75
合計	67,493	100.00

図表２　学年の度数および割合（%）（資料編 p.85 の表２、図１と同じ）

学年	度数	割合
１年	23,224	34.41
２年	21,581	31.98
３年	14,833	21.98
４年	5,922	8.77
不明	1,933	2.86
合計	67,493	100.00



２）2004 年度から 2006 年度の 3 年間のデータの比較

図表 3 に、2004 年度から 2006 年度の 3 年間の平均値とその変化をまとめた。2004 年度と 2005 年度の比較は 2005 年度報告書にまとめてあり、2005 年度と 2006 年度と比較はこれから詳しく述べるので、ここでは、2004 年度と 2006 年度の比較を行う。23 項目中 22 項目に関して、2006 年度の平均値が 2004 年度より有意に上昇した。唯一「Ⅱ5　十分な静粛性が保たれた」だけが、2004 年度の平均値（3.68）から 2006 年度の平均値（3.61）へと有意に低下したので、詳細分析を行い、6 章に記載した。このことは、授業中の静粛性を保つためには、個々の教員の努力では限界があり、組織的な取り組みが必要であることを意味しているのであろう。

図表３　2004～2006 年度の項目別平均値とその変化（全学）（資料編 p.89 の表６と同じ）

	項　　目	2004	変化 04→05	2005	変化 05→06	2006	変化 04→06
Ⅰ	この授業へのあなたの取り組み方について…						
Ⅰ1	授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	4.37	?	4.41	?	4.49	?
Ⅰ2	この授業に積極的に参加した	3.58	?	3.60	?	3.67	?
Ⅰ3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2.65	?	2.72	?	2.80	?
Ⅰ4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2.72	?	2.81	?	2.85	?
Ⅰ5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	3.18	?	3.22	?	3.24	?
Ⅰ6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5：3 時間以上、4：2-3 時間、3：1-2 時間、2：1 時間未満、1：0 時間）	1.56	?	1.61	?	1.67	?
Ⅱ	この授業の進め方は…						
Ⅱ1	聞きやすい話し方だった	3.68	?	3.70	?	3.72	?
Ⅱ2	各回の授業内容の量が適切だった	3.72	?	3.77	**?**	3.74	?
Ⅱ3	各回の授業のねらいは明確だった	3.71	?	3.76	**?**	3.73	?
Ⅱ4	各回の授業内容は明確だった	3.73	?	3.77	**?**	3.75	?
Ⅱ5	十分な静粛性が保たれた	3.68	＝	3.68	**?**	3.61	**?**
Ⅱ6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3.55	?	3.61	＝	3.60	?
Ⅱ7	板書のしかたが適切だった	3.04	?	3.10	?	3.12	?
Ⅱ8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	3.29	?	3.39	?	3.46	?
Ⅱ9	教員は授業の準備を周到に行っていた	3.98	?	4.01	＝	4.01	?
Ⅲ	この授業の内容は…						
Ⅲ1	新しい考え方・発想に触れた	3.74	?	3.81	?	3.82	?
Ⅲ2	基本的知識が得られた	3.80	?	3.83	＝	3.83	?
Ⅲ3	テーマが現代的な意味を持っていた	3.81	?	3.83	＝	3.83	?
Ⅲ4	最新の学問成果に触れた	3.35	?	3.40	?	3.43	?
Ⅳ	総合的にみて、この授業は…						
Ⅳ1	わかりやすい授業だった	3.61	?	3.65	＝	3.65	?
Ⅳ2	授業全体の目標が明確だった	3.65	?	3.71	**?**	3.69	?
Ⅳ3	学問的興味をかきたてられた	3.45	?	3.51	?	3.54	?
Ⅳ4	この授業を受けて満足した	3.56	?	3.62	＝	3.63	?

注）統計的有意に増加（?）、有意に減少（?）、有意差がない（⇔）。強調するために? および＝を太字とした。

３）2005 年度と 2006 年度のデータの比較

表 7（資料編 p.89）に、過去 3 年間の平均値、標準偏差、度数をまとめた。そこから、2005 年度と 2006 年度のデータを抜き出して、次ページの図表 4 として掲載した。平均値を比較すると全体の平均値の傾向は、2005 年度と 2006 年度のデータに大きな変化はない。しかし、「Ⅰ．この授業へのあなたの取り組みについて」の各項目の平均値は統計的に 1%の有意水準で上昇したが、「Ⅱ．この授業の進め方は」、「Ⅲ．この授業の内容は」、「Ⅳ．総合的に見て、この授業は」での項目群では、平均値が有意に上昇した項目、変化はなかった項目、平均値が有意に下降した項目が混在している。2004 年度と 2005 年度のデータの比較では、1 項目を除きすべての項目が統計的に有意に平均値が上昇したことから考えると、2005 年度から 2006 年度への変化では、平均値が上げ止まった印象が否めない。このことは、上述のⅡ、Ⅲ、Ⅳに含まれる多くの項目の平均値の絶対的水準が、3 点台後半であることもその根拠としてあげられる。

そのほか、授業評価の平均値に関する分析に現れた傾向は、2005 年度と全く同様であった。このことは、調査における測定の精度の妥当性と信頼性を示すものである。

しかしこのことは同時に、授業評価の傾向は、１年という短期間では、大きく変化しな

いことを示しており、頻繁に評価を繰り返すことは、教育改善の効果が見えにくくなり、徒労感、俗に言う「FD 疲れ」を助長する結果にもなりかねない。この点は今後、効果的な授業評価を長期間継続するためには、十分な注意が必要な点となろう。

図表４　2006 年度項目別平均値および 2005 年度との比較（全学）

項目		2006			2005			有意
		度数	平均値	SD	度数	平均値	SD	水準
Ⅰ	この授業へのあなたの取り組み方について…							
Ⅰ1	授業全体を通じての出席率（5:90％以上、4:70-89％、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	67,250	4.49	0.80	59,467	4.41	0.85	**
Ⅰ2	この授業に積極的に参加した	67,274	3.67	1.05	59,476	3.60	1.07	**
Ⅰ3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	67,205	2.80	1.06	59,407	2.72	1.06	**
Ⅰ4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	67,105	2.85	1.12	59,359	2.81	1.13	**
Ⅰ5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	66,898	3.24	1.09	59,152	3.22	1.08	*
Ⅰ6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5：3 時間以上、4：2-3 時間、3：1-2 時間、2：1 時間未満、1：0 時間）	67,106	1.67	0.95	59,361	1.61	0.89	**
Ⅱ	この授業の進め方は…							
Ⅱ1	聞きやすい話し方だった	67,257	3.72	1.14	59,460	3.70	1.15	**
Ⅱ2	各回の授業内容の量が適切だった	67,212	3.74	1.03	59,438	3.77	1.01	**
Ⅱ3	各回の授業のねらいは明確だった	67,157	3.73	1.04	59,403	3.76	1.03	**
Ⅱ4	各回の授業内容は明確だった	67,079	3.75	1.04	59,324	3.77	1.03	**
Ⅱ5	十分な静粛性が保たれた	67,017	3.61	1.21	59,327	3.68	1.18	**
Ⅱ6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	66,961	3.60	1.10	59,277	3.61	1.09	
Ⅱ7	板書のしかたが適切だった	66,659	3.12	1.12	59,094	3.10	1.13	**
Ⅱ8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	66,512	3.46	1.23	58,824	3.39	1.26	**
Ⅱ9	教員は授業の準備を周到に行っていた	66,967	4.01	0.95	59,243	4.01	0.93	
Ⅲ	この授業の内容は…							
Ⅲ1	新しい考え方・発想に触れた	67,174	3.82	1.00	59,389	3.81	1.01	**
Ⅲ2	基本的知識が得られた	67,162	3.83	0.97	59,387	3.83	0.97	
Ⅲ3	テーマが現代的な意味を持っていた	67,119	3.83	1.03	59,351	3.83	1.04	
Ⅲ4	最新の学問成果に触れた	67,029	3.43	1.03	59,258	3.40	1.04	**
Ⅳ	総合的にみて、この授業は…							
Ⅳ1	わかりやすい授業だった	67,152	3.65	1.14	59,370	3.65	1.13	
Ⅳ2	授業全体の目標が明確だった	67,140	3.69	1.05	59,353	3.71	1.04	**
Ⅳ3	学問的興味をかきたてられた	67,118	3.54	1.13	59,353	3.51	1.13	**
Ⅳ4	この授業を受けて満足した	67,113	3.63	1.13	59,349	3.62	1.13	

注）　平均値は、最小値＝1、最大値＝5 の 5 選択肢の平均。　SD＝標準偏差。
有意水準：*は p<.05、**は p<.01。無印の場合、二つの年度の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

４）各項目に関する全学の平均値から見たまとめ

全学の集計データの平均値から、以下の各点が明らかになった。（図表 4）

① 学生の授業への出席率は高く、おおむね積極的に参加している。しかし、このデータは、講義に出席している学生のみのものであることに注意が必要である。

② しかし、学生は講義時間以外で予習復習に充てる時間はほとんどなく、履修の準備、発展的な学習の不足については自覚している。この点に関しては、昨年度から改善される傾向が見られる。

③ 授業の進め方、教材教具の使用などに関しては、板書について改善の余地はある

ものの、その他の点についてはおおむね良好な評価が得られた。

④ 授業の内容については、新しい考え方・発想の提示、基礎的内容、応用的な内容いずれも高い評価を得た。それらに比較すると、最新の学問成果の提示については若干劣っている。この点に関しては、授業内容により、最新の学問成果を提示することが主な目的でない授業も多々あり、設問項目への改訂の要望も強い。

⑤ 総合評価については、「分かりやすさ」「目標の明確さ」「学問的興味」「満足度」のいずれに対してもおおむね良好な評価を得た。

⑥ しかし、これらのデータはいずれも講義に出席している学生からの評価であること、回答者数／履修登録者数の比率は、改善されているとはいえ、依然として低いことから、アンケート結果に表れてこない授業に参加していない学生の動向、評価の把握と、こうした学生たちへの大学としての対策の必要性がある。

５）各項目への学生の反応の分析とまとめ

アンケートは、４つの項目群から構成されている。Ⅰ「この授業へのあなたの取り組み方」、Ⅱ「この授業の進め方」、Ⅲ「この授業の内容」、Ⅳ「総合評価」である。

Ⅰ「この授業へのあなたの取り組み」について

Ⅰ1：「授業全体を通じての出席率」については平均値が 4.49 であり、おおむね出席率が 70%を上回る（5:90%以上、4:70-89%）高い学生の自己評価であった。この項目の平均値は昨年度よりも有意に上昇した。しかしこの点については、後に述べる回答者数／履修登録者数の低さを勘案する必要がある。また、半期の授業の後半にアンケートが行われたため、そこまで継続的に出席していた学生の回答であることを考慮する必要がある。

Ⅰ2：「この授業に積極的に参加した」については平均値が 3.67 であり、おおむね高い数値といえよう。この項目の平均値も昨年度よりも有意に上昇した。しかしこの結果も上述した学生の反応であることを考慮する必要がある。

Ⅰ3：「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」についての回答の平均値は 5 段階評価の 3（どちらともいえない）を下回る 2.80 であり、この項目の平均値も昨年度よりも有意に上昇したとはいえⅠ1、Ⅰ2 に示された講義への取り組みの姿勢に比較して、全体的に否定的な学生の自己評価が示された。

Ⅰ4：「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」についても平均値 2.85 であり、この項目の平均値も昨年度よりも有意に上昇したとはいえ、依然として講義の予習とともに復習、さらには発展的な学習へとはつながっていかない様子が示されている。

Ⅰ5：「シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った」については平均値 3.24 であり、若干肯定的な方向の回答である。この項目の平均値も昨年度よりも有意に上昇した。しかし、依然として、学生の評価からはシラバスの改善の余地はあると考えられる。

Ⅰ6：「授業の予習復習等に毎週あてた時間」については平均値 1.67、すなわち、1 時間

未満もしくはゼロ時間が相半ばしている反応である（2:1 時間未満、1:0 時間）。この項目の平均値も昨年度よりも有意に上昇してはいるが、この結果は、Ｉ3、Ｉ4 の結果をさらに鮮明な形で示した学生の反応であり、依然として学生たちは講義時間以外での学習がほとんど行われていない実態が示されている。

この項目群の平均値から読み取れる結果は、「過半数の学生は講義に継続的に出席していないが」（後述）、「講義に出席している学生は、出席率もよくある程度積極的に授業に参加している。しかし、その講義に出席している学生たちでさえ、授業時間以外にはほとんど学習の時間は取っておらず、授業の準備や発展的な学習の不足をある程度自覚している」ことを示している。

またシラバスの学生からの評価は、やや肯定的である。

Ⅱ「この授業の進め方」

Ⅱ1：「聞きやすい話し方だった」についての平均値は 3.72 であり、おおむね高い数値といえよう。この項目の平均値は昨年度よりも有意に上昇した。

Ⅱ2：「各回の授業内容の量が適切だった」についての平均値は 3.74 であり、おおむね高い数値といえよう。しかし、この項目の平均値は昨年度よりも有意に下降した。

Ⅱ3：「各回の授業のねらいは明確だった」についての平均値は 3.73 であり、おおむね高い数値といえよう。しかし、この項目の平均値も昨年度よりも有意に下降した。

Ⅱ4：「各回の授業内容は明確だった」についての平均値は 3.75 であり、おおむね高い数値といえよう。しかし、この項目の平均値も昨年度よりも有意に下降した。

Ⅱ5：「十分な静粛性が保たれた」についての平均値は 3.61 であり、おおむね高い数値といえよう。しかし、この項目の平均値も昨年度よりも有意に下降した。

Ⅱ6：「教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった」についての平均値は 3.60 であり、おおむね高い数値といえよう。この項目の平均値は昨年度と変化はない。

Ⅱ7：「板書の仕方が適切だった」についての平均値は 3.12 であり、評価は肯定的否定的相半ばである。この項目の平均値は昨年度よりも有意に上昇した。

Ⅱ8：「映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった」についての平均値は 3.46 であり、やや肯定的な反応だった。この項目の平均値は昨年度よりも有意に上昇した。

Ⅱ9：「教員は授業の準備を周到に行っていた」についての平均値は 4.01 であり、高い数値といえよう。この項目の平均値は昨年度と変化はない。

授業に出席している学生からの評価は、「話し方」「量」「ねらい」「内容」「静粛性」について、全学的な観点からはおおむね肯定的な評価である。「教科書・授業レジュメプリントや参考文献」、「映像視覚教材」などについてもおおむね肯定的な反応であった。しかし、「板書」についての評価は、肯定的否定的相半ばで改善の余地がある。最後に「教員の授業の準備」については高い評価が示されており、授業に出席している学生には教

員の熱意が伝わっているようである。この傾向は、昨年度と変わらない。

Ⅲ「この授業の内容」

Ⅲ1：「新しい考え方・発想に触れた」についての平均値は 3.82 であり、おおむね高い数値といえよう。この項目の平均値は昨年度よりも有意に上昇した。

Ⅲ2：「基本的知識が得られた」についての平均値は 3.83 であり、おおむね高い数値といえよう。この項目の平均値は昨年度と変化はない。

Ⅲ3：「テーマが現代的な意味を持っていた」についての平均値は 3.83 であり、おおむね高い数値といえよう。この項目の平均値は昨年度と変化はない。

Ⅲ4：「最新の学問成果に触れた」についての平均値は 3.43 であり、おおむね高い数値といえよう。この項目の平均値は昨年度よりも有意に上昇した。

講義内容の「新しい考え方・発想」の提示や、「基礎的知識」「テーマの現代的な意味」などの基礎的内容、応用的な内容の両方に関して、肯定的な反応が得られている。しかし、それらの項目に比較すると「最新の学問成果」の提示は、やや平均値が低い。この傾向は、昨年度と変わらない。Ⅲ4 に関しては、「～概説」のように「最新の学問成果」にふれることが困難な講義もあり、数値の読み取り時に考慮する必要がある。さらに、この項目については、設問の修正を求める意見も多い。今後の課題である。

Ⅳ「総合評価」について

Ⅳ1：「わかりやすい授業だった」についての平均値は 3.65 であり、おおむね高い数値といえよう。この項目の平均値は昨年度と変化はない。

Ⅳ2：「授業全体の目標が明確だった」についての平均値は 3.69 であり、おおむね高い数値といえよう。この項目の平均値は昨年度よりも有意に下降した。

Ⅳ3：「学問的興味をかきたてられた」についての平均値は 3.54 であり、おおむね高い数値といえよう。この項目の平均値は昨年度よりも有意に上昇した。

Ⅳ4：「この授業を受けて満足した」についての平均値は 3.63 であり、おおむね高い数値といえよう。この項目の平均値は昨年度と変化はない。

講義の「分かりやすさ」「目標の明確さ」「学問的興味」「満足度」のいずれに対しても 3.5 程度もしくはそれを上回る平均値を得ており、文字通り「おおむね良好」な結果といえるこの傾向は、昨年度と変わらない。

6）「Ⅳ．総合評価」の平均値の学部間の違い（資料編 p.91、表 8～11）

Ⅳ1：「わかりやすい授業だった」に関しては、学校・社会教育講座（4.06）、コミュニティ福祉学部（3.76）、文学部（3.75）、全カリ（3.69）が比較的平均値が高いグループを形成している。一方、現代心理学部（3.08）の平均値が際だって低い。

Ⅳ2：「授業全体の目標が明確だった」に関しては、学校・社会教育講座（4.00）、コミュニティ福祉学部（3.78）、文学部（3.77）が比較的平均値が高いグループを形成し

ている。一方、現代心理学部（3.20）の平均値が際だって低い。

Ⅳ3：「学問的興味をかき立てられた」に関しては、学校・社会教育講座（3.71）、文学部（3.66）、コミュニティ福祉学部（3.65）が比較的平均値が高いグループを形成している。一方、現代心理学部（3.28）の平均値が際だって低い。

Ⅳ4：「この授業を受けて満足した」に関しては、学校・社会教育講座（3.93）、コミュニティ福祉学部（3.74）、文学部（3.74）が比較的平均値が高いグループを形成している。一方、現代心理学部（3.26）の平均値が際だって低い。

学生の授業に対する総合評価を学部間で比較すると、相対的に学校・社会教育講座、コミュニティ福祉学部、文学部の評価が高く、現代心理学部の評価が低いことが示された。新学部である経営学部と現代心理学部の平均値についてみると、経営学部は、全学の平均水準の平均値であるが、現代心理学部の平均値は 3 点を上回る数値であるものの、全学的な比較では、平均値の低さが顕著である。

現代心理学部の平均値の低さの原因については、「１」回答者に関する集計」（p.16 参照）で述べたように、現代心理学部の回答者は、そのほとんどがその他の学年よりも全学的に平均値の低い 1 年次生であることが挙げられる。現代心理学部の平均値については、さらなる分析が必要であろう。

2005 年度との比較では、新学部が追加されたこと以外、学部の平均値の順序には、大きな変化はない。

また、総合評価の高低は、調査が実施された科目の特徴、その学問領域における講義科目の位置づけ、学問の性質による講義内容の違いなども考慮しなければならないであろう。

７）「Ⅳ．総合評価」の平均値の授業規模による比較（資料編 p.92、表 12～16）

授業規模を 50 名以下、51～100 名、101～150 名、151 名以上の 4 群に分けて、「Ⅳ．総合評価」の平均値を比較した。

Ⅳ1：「わかりやすい授業だった」に関しては、50 名以下（3.75）の平均値が最も高く、101～150 名（3.60）の平均値が低かった。

Ⅳ2：「授業全体の目標が明確だった」に関しては、50 名以下（3.81）の平均値が最も高く、151 名以上（3.61）の平均値が低かった。

Ⅳ3：「学問的興味をかき立てられた」に関しては、50 名以下（3.67）の平均値が最も高く、151 名以上（3.48）の平均値が低かった。

Ⅳ4：「この授業を受けて満足した」に関しては、50 名以下（3.77）の平均値が最も高く、151 名以上（3.54）の平均値が低かった。

本来、授業規模とは無関係であるはずの授業の「わかりやすさ」「目標の明確さ」「学問的興味」「満足度」にも、授業規模の影響が明確に示されていることが興味深い。

共通して示された結果は、いずれも 50 名以下の授業で評価が高かったことである。

授業の「わかりやすさ」「目標の明確さ」「学問的興味」「満足度」の高いものが 50 名

以下の授業に多いという可能性もあるが、その可能性よりも授業規模、すなわち、講義の環境がそのまま総合評価に反映されていると考えることが妥当であろう。

このことは、教室規模、授業規模を考える上で参考にすべき数値である。

この傾向は 2004 年度から全く同様である。

８）「Ⅳ．総合評価」の平均値の学年間の比較（資料編 p.93、表 17～20）

表 17～20 は「Ⅳ．総合評価」の平均値の学年間の比較を示したものである。

いずれの項目においても、4 年次生、3 年次生、2 年次生、1 年次生の順序に平均値が高い。またそれぞれの平均値の間には統計的な有意差もある。この傾向は 2004 年度から全く同様の傾向である。この原因に関して可能性のある解釈としては、以下の点が考えられる。

① 1,2 年次生においては、必修科目が多く、学生の動機づけが高くないこと。

② 学年が上昇するに従って選択科目も多くなり、学生の動機づけが高まることこと。

③ 選択必修の別にかかわりなく、学年が上昇するに従って、例えば大学における教育効果の現れとして、内発的動機づけ、講義への自己関与が高まり、授業評価が高くなっていること。

９）項目間の相関

設問項目間の相関を調べた。まず、すべての項目の組み合わせについて無相関の検定を、有意水準１％で行ったが、すべて無相関ではなく有意な相関があった。結果を表 21（資料編 p.94）にまとめた。各設問項目の最大の相関係数と、その設問項目を表 22（資料編 p.95）にまとめた。

相関係数が 0.6 以上の組み合わせを見ると、Ⅱ1～Ⅱ4 同志およびⅣ1～Ⅳ4 同志という、設問群内に高い相関があることが分かった。さらに、Ⅳ1～Ⅳ4 はⅡ1～Ⅱ4 およびⅢ1、2 という他群の項目にも高い相関が見られた。

Ⅳ1～Ⅳ4 の授業の総合評価が、他の項目と 0.6 以上の高い相関を示したものを取り上げると、以下のとおりである。

Ⅳ1「わかりやすい授業だった」と

Ⅱ1「聞きやすい話し方だった」.706

Ⅱ2「各回の授業内容の量が適切だった」.634

Ⅱ3「各回の授業のねらいは明確だった」.697

Ⅱ4「各回の授業内容は明確だった」.736

Ⅲ2「基本的知識が得られた」.648

Ⅳ2「授業全体の目標が明確だった」.784

Ⅳ3「学問的興味をかきたてられた」.703

Ⅳ4「この授業を受けて満足した」.790

Ⅳ2「授業全体の目標が明確だった」と

Ⅱ3「各回の授業のねらいは明確だった」.768

Ⅱ4「各回の授業内容は明確だった」.759

Ⅲ2「基本的知識が得られた」.655

Ⅳ1「わかりやすい授業だった」.784

Ⅳ3「学問的興味をかきたてられた」.697

Ⅳ4「この授業を受けて満足した」.753

Ⅳ3「学問的興味をかきたてられた」と

Ⅱ4「各回の授業内容は明確だった」.624

Ⅲ1「新しい考え方・発想に触れた」.646

Ⅲ2「基本的知識が得られた」.638

Ⅳ1「わかりやすい授業だった」.703

Ⅳ2「授業全体の目標が明確だった」.697

Ⅳ4「この授業を受けて満足した」.753

Ⅳ4「この授業を受けて満足した」と

Ⅱ1「聞きやすい話し方だった」.634

Ⅱ3「各回の授業のねらいは明確だった」.677

Ⅱ4「各回の授業内容は明確だった」.698

Ⅲ1「新しい考え方・発想に触れた」.642

Ⅲ2「基本的知識が得られた」.668

Ⅳ1「わかりやすい授業だった」.790

Ⅳ2「授業全体の目標が明確だった」.753

Ⅳ3「学問的興味をかきたてられた」.805

以上の結果から、学生の講義に対する「満足度」（Ⅳ4）は、「学問的興味」ともっとも高い相関（0.805）を示し、次いで「わかりやすさ」、「授業全体の目標の明確さ」とⅣ群内の設問項目と 0.75 以上の高い相関を示した。さらに、「授業内容の明確さ」、「授業のねらいの明確さ」、「基本的知識」、「新しい考え方・発想」、「聞きやすい話し方」が続いた。

この相関係数のパターンは 2004 年度から全く同じである。

今後の授業を考える上で、参考になる資料となろう。

４－３　担当教員からの所見票に対するまとめ

以下は、学部等総評にある担当教員からの所見票に関する記述に関して主要なものをまとめたものである。

１）「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

「授業評価に対する担当教員の所見」に関しては、昨年度と同様の傾向が示されている。

各学部の記述から共通して見いだされる点を列挙すると、以下の通りである。学生からの授業評価がおおむね高い平均値だったことをうけて、多くの教員が自身の講義に対する学生の評価が適切かつ好意的であったと受け取っている。また、「Ⅰ．この授業へのあなたの取り組みについて」の各項目の平均値の上昇についての肯定的な言及があった。さらに、学生の予習復習等の時間の少なさに言及する学部も複数あった。次に、板書、ホワイトボードの見にくさに関して、昨年度に変わらず言及も多かった。設問項目内容に関して、授業科目の内容、授業の進め方などにより、妥当でない項目の是正に関する要望も少なからずあった。この点に関しては、経年変化の分析の必要から大幅な変更は困難であるが、2007年度の調査項目は改善する予定である。最後に、毎年の結果に劇的な変化が見られず、徒労感、経費の節約の観点から、同様の調査方法を継続することへの見直しを求める言及もあった。

２）自由記述欄に対する担当教員の所見のまとめ

自由記述欄に対する担当教員の所見では、多くの教員が、学生からの指摘を真摯に受け止め、学生の自由記述に対して丁寧に所見を述べているという記述が多くあった。肯定的意見に関しては、今後の励みになるとして好意的に受け止められている。一方、否定的意見に対しては、今後の課題あるいは参考として受け止める教員が少なくない。

具体的問題としては、自由記述欄への記述でも、板書や話し方など授業技術に関する言及が多い。さらに、多くの教員が努力している一方、学生のマナーの悪さ、私語の多さに関する問題の指摘も多く、学生の意識の改善を求める言及も多かった。

３）「改善に向けた今後の方針」のまとめ

パワーポイント、映像教材の使用、小テストの実施、レポートの提出、リアクションペーパーの活用、CHORUS の活用、レジュメプリントの配布、私語に対する対策、学生の授業準備、予習・復習に関するなど、各教員レベルでの具体的な授業改善に関する言及が多くあった。

一方で、個人的な教員側の改善への努力だけでは解決できないオーディオ設備等、教育設備の改善、講義の少人数化への要望、学生の意識改善への必要性などへの言及もあった。

４）学生からの意見（自由記述）の集約

①肯定的評価として多い意見の集約

まず、わかりやすい授業、興味が持てる授業、静粛性の保たれた授業への評価が高いこと、ビデオ、パワーポイントなどの視聴覚教材を使用した授業への評価が高いこと、レジュメや資料を配付する授業、コメントペーパーの活用などの対話型の講義への肯定的評価が高いことがあげられる。また、ゲストスピーカーや TA の活用も肯定的に受け止められている。さらに、教員の人柄、熱心さに関する記述も多い。また、V-Campus や Chorus の利用など IT 技術の活用に関する言及もある。

②否定的評価として多い意見の集約

講義内容が難しすぎる、易しすぎるという難易度について、板書、授業の進め方、声の大きさ、パワーポイントの進め方の早さ、分量が多すぎる、配付資料がわかりにくいなど授業技術について、私語が放置されている点、教員の講義への遅刻などの問題点が多く指摘された。

また、昨年度同様、教員に対する学生からの誹謗中傷とも考えられる記述についての言及もあり、大学として、授業改善への真摯な取り組みを進めるため、学生の FD に関する意識改善の必要も考えていかねばならない問題である。

５）今後の授業改善に向けた課題の提示

今回の授業改善に向けた課題の提示をみると、板書、配付資料の工夫、効果的なパワーポイントの作成などの授業技術への改善への必要性と同時に、課題を出すことでの学生の授業の予習・復習の促進、講義のニーズに合わせた難易度の調整、大規模授業への対応、私語問題への対策等、実に広範囲にわたる授業改善への模索についての言及がある。個々の教員の授業改善は、確実に進化していると言えよう。

同時に、個人的努力の限界の指摘、施設に関する問題や、カリキュラム上の問題など、より大局的な大学教育における構造的問題に言及するものが少なからずあった。

また、授業評価に関する疑問点、評価の方法、より精密な検証の必要性、調査の繰り返しによるマイナスの効果などへの言及もある。

こうした点は、FD について各教員が真剣に解決策を模索し始めた証左ではあるが、また、一方で、今後、解決への糸口が見いだせない場合、教員側の徒労感、無力感を高め、FD 疲れの原因ともなりかねない状況のはじまりともいえる。こうした FD 疲れを起こさせないためにも、授業改善の責任を単に個々の教員に帰することなく、学科、学部、大学として、問題を解決していくための情報の共有と対策を進めていく必要が今後、大きくなって行くであろう。

５．学部等総評

学部等総評は、各科目の集計結果および各教員の執筆した所見票をもとに、各学部等のＦＤ委員会が執筆した。

各学部等総評の構成は、原則として以下のとおりである。

１．集計データからみられる結果のまとめ

２．担当教員からの所見票に対するまとめ（「授業評価に対する担当教員の所見」、「自由既述欄に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」のまとめ）

３．学生からの意見の集約（「肯定的評価として多い意見」、「否定的評価として多い意見」の集約）

４．今後の授業改善に向けた課題の提示

５－１　文学部

１．集計データからみられる結果のまとめ

全 22 のアンケート項目のなかで、昨年度と比較して、数値が大きく変化した項はない。主に「学生自身の授業への意識・姿勢」を示すアンケート群のなかで、学生が「授業の予習復習等に毎週あてた時間」がわずかに上昇しているが、このことが学生の学習状況の改善を示すものかどうかは判断が難しい。全質問項目のなかで、この項はめだって低い数値が示されており、数年にわたって数値の変化を追跡する必要があろう。

２．担当教員からの所見票のまとめ

２－１　授業評価に対する担当教員の所見まとめ

昨年度と大きな差はない。カリキュラム変更にともなう困難など、過渡的な課題についての記述が若干ある。たとえば配当年次が変更になった科目について、旧カリキュラムの学生と新カリキュラムの学生に対して別々の授業を提供するべきだったという学生の要望に対して、そのとおりだとこたえた教員のコメントもある。こうしたやりとりには、授業担当者個人の努力や工夫では解決できない問題もすけてみえる。

２－２　自由記述欄に対する担当教員の所見まとめ

昨年度と大きな差はない。

２－３　「改善に向けた今後の方針」のまとめ

板書・話し方などの授業進行のための技術的要望についての記述が認められる。改善に向けた工夫を提案するものがある一方で、大学教育に関する自らの信念にもとづいて、変更の必要を認めないという意見もみられる。

３．学生からの意見（自由記述）の集約

３－１　「肯定的評価として多い意見の集約」

１）ビデオ・テープ、OHP、CD、DVD など視聴覚教材を使用した授業への評価が高い。

２）リアクション・ペーパーなど、対話型の講義への評価が高い。

３－２　「否定的評価として多い意見の集約」

１）板書方法への不満がみられる。

２）「難しすぎる」、「優しすぎる」といった、講義の難易度に対する不満ないし疑問が認められる。

３）一部の講義に、受講生の私語の多さが指摘されている。

４．今後の授業改善に向けた課題の提示

「学生にとって受け入れやすい具体例」や視聴覚教材を意識的にとりいれるといった工夫をしていると答えた教員が多くいる一方で、学生の指摘を理解しかねるという教員の所見も認められる。授業の難易度に対する評価をめぐっても、学習意欲が高く、発展的な内容を求める学生と、より基礎的な事項についてていねいな説明を求める学生とを同時に教えることを求められている状況の深刻さをかいまみることができる。

それぞれの教員には、それぞれの信念、教育効果や技術に関する考え方がある。また、たとえ同じ担当者の授業であっても、カリキュラム全体のなかでの役割に応じて、それぞれにねらい、内容、方法が設定される。レジュメや補助プリントの使用、出席確認の有無、課題の有無、学生から要望が多い視聴覚教材の使用についても、効果的であるかどうかは一律に論じられる性格のものではない。多くの教員が、それぞれの授業のねらい、内容、方法を学生に対して説明する努力をしていることもみてとれるが、そのことが、学生の「満足度」といった、主観的な評価の数値にどう反映しているのかを検証することが困難である。

アンケート結果全体をみると、学生が「授業の予習復習等に毎週あてた時間」がめだって少ないにもかかわらず、出席率や「授業に積極的に参加した」といった自己自身への評価が高いことをどのように解釈するのが妥当であるのか、判断が難しい。また、授業への否定的ないし消極的評価にかかわる意見として、授業の要求水準が高いことがあげられている。安易な一般化はできないものの、一部の学生が大学に求めているものがかいまみられる例である。学生の要望の何にこたえ、何にこたえないかという判断は、個々の授業担当者に委ねられるものというよりも、大学の見識が問われるという性格のものであろう。教員の所見にも示されているが、大学の授業の「改善」をすなわち「数値の引き上げ」と同一視していいのかどうかは、異論の余地があるであろう。

2006 年度項目別平均値および 2005 年度との比較（文学部）

項　目		2006			2005			有意水準
		度数	平均値	SD	度数	平均値	SD	
Ⅰ	この授業へのあなたの取り組み方について…							
Ⅰ1	授業全体を通じての出席率（5:90％以上、4:70-89％、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	9,710	4.47	0.77	9,139	4.42	0.82	**
Ⅰ2	この授業に積極的に参加した	9,713	3.66	1.03	9,136	3.58	1.05	**
Ⅰ3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	9,705	2.84	1.06	9,125	2.78	1.05	**
Ⅰ4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	9,692	2.93	1.13	9,118	2.91	1.12	
Ⅰ5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	9,657	3.41	1.08	9,081	3.37	1.06	**
Ⅰ6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5：3 時間以上、4：2-3 時間、3：1-2 時間、2：1 時間未満、1：0 時間）	9,682	1.65	0.93	9,117	1.61	0.89	**
Ⅱ	この授業の進め方は…							
Ⅱ1	聞きやすい話し方だった	9,714	3.86	1.11	9,139	3.71	1.15	*
Ⅱ2	各回の授業内容の量が適切だった	9,711	3.84	1.01	9,137	3.83	0.97	
Ⅱ3	各回の授業のねらいは明確だった	9,705	3.79	1.06	9,126	3.75	1.03	*
Ⅱ4	各回の授業内容は明確だった	9,697	3.82	1.05	9,111	3.78	1.02	*
Ⅱ5	十分な静粛性が保たれた	9,690	3.88	1.15	9,120	3.92	1.12	*
Ⅱ6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	9,679	3.68	1.09	9,105	3.72	1.06	*
Ⅱ7	板書のしかたが適切だった	9,670	3.18	1.12	9,094	3.14	1.12	*
Ⅱ8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	9,534	3.42	1.26	9,007	3.47	1.27	*
Ⅱ9	教員は授業の準備を周到に行っていた	9,676	4.10	0.92	9,096	4.07	0.90	
Ⅲ	この授業の内容は…							
Ⅲ1	新しい考え方・発想に触れた	9,708	3.92	1.00	9,130	3.86	0.99	**
Ⅲ2	基本的知識が得られた	9,704	3.90	0.97	9,131	3.84	0.96	**
Ⅲ3	テーマが現代的な意味を持っていた	9,698	3.70	1.08	9,124	3.56	1.09	**
Ⅲ4	最新の学問成果に触れた	9,675	3.39	1.05	9,110	3.28	1.04	**
Ⅳ	総合的にみて、この授業は…							
Ⅳ1	わかりやすい授業だった	9,703	3.75	1.14	9,126	3.66	1.12	**
Ⅳ2	授業全体の目標が明確だった	9,706	3.77	1.06	9,125	3.73	1.03	**
Ⅳ3	学問的興味をかきたてられた	9,699	3.66	1.14	9,124	3.59	1.12	**
Ⅳ4	この授業を受けて満足した	9,700	3.74	1.13	9,121	3.68	1.12	**
Ⅴ	学部等による設問							
Ⅴ1	この授業の教室の大きさは適切だった	9,168	4.05	1.10	8,707	4.05	1.06	
Ⅴ2	この授業の受講者数は適切だった	9,160	3.98	1.08	8,698	3.99	1.01	

注）　平均値は、最小値＝1、最大値＝5 の 5 選択肢の平均。　SD＝標準偏差。
有意水準：*は p<.05、**は p<.01。無印の場合、二つの年度の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

５－２　経済学部

１．　集計データからみられる結果のまとめ

全体としてみると、昨年度よりも数値が改善した項目と悪化した項目がほぼ拮抗する結果となった。

改善項目が多かったのは、学生の受講態度に関する項目であった。なかでも出席率（設問Ⅰ1）は平均値 4.25 から 4.40 へ 0.15 ポイントとかなり大幅な上昇を示した。また、積極的参加（設問Ⅰ2）も 3.60 から 3.71 へと 0.11 ポイント、履修準備(設問Ⅰ3)も 2.80 から 2.91 へ 0.11 ポイント上昇している。予復習の時間(設問Ⅰ6)も 1.72 から 1.81 へ 0.09 ポイント上昇している。本年度も昨年度に引き続き学生の講義態度が改善したことを示している。

ただし、こうした改善傾向を教員の講義改善努力の成果とみなすことが出来るかといえば、必ずしもそのようには言えない。というのは、授業の進め方や授業内容に関する設問では有意な改善を示した項目はなく、反対に悪化した項目が、その数値の差はきわめて小さいものの、散見される結果となったからである。

まず、総合的な満足度（Ⅳ4）から見ておくと、平均値は 3.54 から 3.52 へと若干低下している。標準偏差は 1.14 と変化はない。同様に、分かりやすさ(Ⅳ1)は 3.57 から 3.54 へ、目標の明確さ(Ⅳ2)は 3.63 から 3.60 へと低下している。学問的興味(Ⅳ3)についても 3.40 から 3.38 へと低下している。ただし、これらはいずれも統計的に有意な変化といえるものではなく、総じて昨年度とほとんど変わらなかったとみなすことのできるものである。

授業の進め方については、ねらいの明確さ(Ⅱ3)が 3.71 から 3.66 へ 0.05 ポイント、内容の明確さ(Ⅱ3)が 3.71 から 3.68 へ 0.03 ポイント、映像視覚教材(Ⅱ8)が 3.24 から 3.18 へ 0.06 ポイント低下した。

授業内容については、新しい考え方・発想(Ⅲ1)が 3.59 から 3.55 へ 0.04 ポイント、テーマの現代性(Ⅲ3)が 3.79 から 3.73 へ 0.06 ポイント低下した。

他方、教室の大きさ(Ⅴ1)は 3.98 から 4.05 へ 0.07 ポイント上昇した。

比較的数値が高い項目は、「教室の大きさ」（Ⅴ1、4.05)、「出席率」(Ⅰ1、4.40)、「教員の講義準備」(Ⅱ9、3.88)、「テーマの現代性」(Ⅲ3、3.73) 、「積極的参加」(Ⅰ2、3.71) など、他方、比較的数値が低い項目は「予習復習」(Ⅰ6, 1.81)、「学生の準備」(Ⅰ3, 2.91)、「発展的勉強のきっかけ」（Ⅰ4、2.92）などである。こうした傾向は昨年度とほとんど変化がない。しかし、比較的数値の低い項目で、今年度改善が見られていることは大変喜ばしいことである。

総じて言えば、教員の講義改善に役立てるための資料という点では、昨年度と比較して有意な変化が確認できるものが乏しい結果であった。アンケート調査をはたして毎年度実施すべきかどうか、再検討の余地があるかもしれない。

２．　所見票に対するまとめ

２－１　講義評価に対する担当教員の所見

講義評価に対する担当教員の所見を見ると、「比較的高い評価を得られた」「意図した成果が出ていると思う」など満足度が高い結果に安堵しているものが多かった。この点

も昨年度の調査結果とほとんど変化がない。満足度が高かった要因として「わかりやすい授業を心がけた」「準備を入念にした」などの自己分析がなされており、これも昨年度とほぼ同じである。「コメントは 2005 年とまったくかわるところがない」と明記してあるものもあった。

また、ある項目の評価を「4 の水準まで上げたい」など、具体的な目標としてアンケート結果を活用していることを示すコメントも見られた。

「出席率が上がっている」ことを指摘するコメントがいくつか見られたが、これは上述した数値の改善とも符合する。他方、学生の「予復習が少ない」ことへの不満や改善への意欲を示すものも見られた。

「相対的に板書の仕方に不満が多いようであるが、レジュメの配布でそれに代替し、時間の節約を図っている。それが学生に了解されていないようだ」、「『板書が少ない』旨を掲げたつもりだが、やはり受講者の満足するレベルには達していなかったようだ」など、板書に関して、学生とのコミュニケーションがうまく取れていないことを指摘する記述が目に付いた。

調査のあり方そのものに対して疑問を呈する意見もあったことも記しておく。「映像視覚教材の効果的使用(利用していない)や最新の学問成果(受講生が講義内容に内在した学問成果が最新かどうかを判断できるのだろうか?)など、質問項目には相変わらず疑問が残る」、「授業時間の 30 分をアンケートにあてるのは、半期 13 コマのなかで『授業妨害』にもなります」などである。

２－２　自由記述欄に対する所見

自由記述欄に対する所見では学生の意見について「工夫の必要を感ずる」「改善に努力したい」など、講義の改善に役立てようとするものが多かった。

「一生懸命書いたリアクションペーパーが全く評価されていないことがあるのは納得いかない」とする学生の記述に対し、「論理的・説得的に文章化できているかどうかを見ている」として、学生評価に反論するコメントもあった。

「『授業が騒がしい』という学生諸君の意見は全くその通りで、私も困っている」など、静かな授業を求める学生の記述に対して、問題を認識しながらも十分に対応できないでいる教員の苦悩を示すコメントが少なくなかった。

２－３　改善に向けた今後の方針

改善に向けた今後の方針では、重要点を繰り返す、レジュメ・資料の充実、適正な量のパワーポイントの準備、教科書の利用など、昨年とほとんどかわならい。「宿題を出す」ことで、予復習を促すことを考えているというコメントもあった。

３.まとめ

多くの学生は講義や教員の姿勢を好意的に評価し、教員も工夫をこらそうとしている。ただ、執筆者の個人的な感想を述べれば、毎年こうしたアンケートを実施して前年度と比較することについては、上述したようにその効果に疑問を感じる。アンケートの回数をた

とえば 3 年に一度にして、それで浮いた費用を教室の機材の改善など、具体的な対策費に回すことなどを検討してみてもいいのではないかと思われる。

2006 年度項目別平均値および 2005 年度との比較（経済学部）

項　目		2006			2005			有意水準
		度数	平均値	SD	度数	平均値	SD	
Ⅰ	この授業へのあなたの取り組み方について…							
Ⅰ1	授業全体を通じての出席率（5:90％以上、4:70-89％、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	7,748	4.40	0.85	7,631	4.25	0.89	**
Ⅰ2	この授業に積極的に参加した	7,751	3.71	1.06	7,642	3.60	1.07	**
Ⅰ3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,752	2.91	1.08	7,633	2.80	1.06	**
Ⅰ4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,736	2.92	1.12	7,620	2.88	1.12	*
Ⅰ5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	7,716	3.18	1.08	7,601	3.14	1.06	**
Ⅰ6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5：3 時間以上、4：2-3 時間、3：1-2 時間、2：1 時間未満、1：0 時間）	7,737	1.81	1.03	7,630	1.72	0.93	**
Ⅱ	この授業の進め方は…							
Ⅱ1	聞きやすい話し方だった	7,757	3.59	1.20	7,640	3.57	1.21	
Ⅱ2	各回の授業内容の量が適切だった	7,756	3.63	1.09	7,634	3.66	1.07	
Ⅱ3	各回の授業のねらいは明確だった	7,741	3.66	1.07	7,632	3.71	1.05	**
Ⅱ4	各回の授業内容は明確だった	7,712	3.68	1.07	7,622	3.71	1.05	*
Ⅱ5	十分な静粛性が保たれた	7,725	3.53	1.24	7,614	3.52	1.25	
Ⅱ6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,730	3.52	1.15	7,606	3.53	1.10	
Ⅱ7	板書のしかたが適切だった	7,685	3.12	1.18	7,572	3.13	1.17	
Ⅱ8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	7,647	3.18	1.24	7,545	3.24	1.24	**
Ⅱ9	教員は授業の準備を周到に行っていた	7,713	3.88	0.99	7,610	3.91	0.97	
Ⅲ	この授業の内容は…							
Ⅲ1	新しい考え方・発想に触れた	7,741	3.55	1.03	7,620	3.59	1.05	*
Ⅲ2	基本的知識が得られた	7,742	3.77	1.00	7,618	3.79	0.99	
Ⅲ3	テーマが現代的な意味を持っていた	7,734	3.73	1.04	7,615	3.79	1.06	**
Ⅲ4	最新の学問成果に触れた	7,723	3.36	1.04	7,595	3.36	1.05	
Ⅳ	総合的にみて、この授業は…							
Ⅳ1	わかりやすい授業だった	7,737	3.54	1.19	7,616	3.57	1.16	
Ⅳ2	授業全体の目標が明確だった	7,735	3.60	1.08	7,610	3.63	1.05	
Ⅳ3	学問的興味をかきたてられた	7,731	3.38	1.14	7,613	3.40	1.14	
Ⅳ4	この授業を受けて満足した	7,730	3.52	1.14	7,611	3.54	1.14	
Ⅴ	学部等による設問							
Ⅴ1	この授業の教室の大きさは適切だった	7,151	4.05	1.10	7,017	3.98	1.13	**

注）平均値は、最小値＝1、最大値＝5 の 5 選択肢の平均。　SD＝標準偏差。
有意水準：*は p<.05、**は p<.01。無印の場合、二つの年度の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

５－３ 理学部

１．集計データからみられる結果のまとめ

ほとんどの調査項目において平均値は 3.0 以上であった。3.0 を下回る項目もあるが、その数はわずか 2 例であった。比較可能な全 23 項目の内、平均値が昨年度を上回ったのは 18 項目、下回ったのは 4 項目、そして同値が 1 項目であった。理学部平均が全学の平均値を上回っているのは 7 項目で、残りの 16 項目は全学平均値以下であった。

１－１　学生の授業への姿勢（Ⅰ1～Ⅰ6）

項目Ⅰ1（授業への出席率）は昨年度よりすこし減少したが、それ以外の項目（I2? I6）はわずかではあるが上昇している。特に、I5（シラバス）は昨年度の 2.83 から 3.01 に増大している。しかし、I3（授業履修のための準備）、 I6（予習復習）の２項目は相変わらず 3.0 を割り、それぞれ 2.91，2.06 であった。

１－２　教員の授業方法（Ⅱ1～Ⅱ9）

講義の技倆に関する項目である。9 項目の内 6 項目（話し方、授業内容の量、授業のねらい、授業内容の明確性、静粛性、授業の準備）は 3.5 を超えている。残りの 3 項目（教科書・レジュメ・参考書、板書、映像視覚教材）も 3.0 を超えていた。昨年度と比べると 6 項目（話し方、授業内容の量、授業のねらい、授業内容の明確性、板書、映像視覚教材）が、わずかではあるが上昇している。

１－３　授業内容（Ⅲ1～Ⅲ4）

授業内容の質を問う項目である。4 項目の内 3 項目（新しい考え方、基本的知識、現代的意味）が 3.5 を超えている。項目Ⅲ4（最新の学問成果）は 3.31 であった。

１－４　総合的評価

4 つの項目（わかりやすい授業、授業目標の明確性、学問的興味の喚起、満足度）すべてでその平均値は 3.4 を超えている。評価は概ね良好と判断される。

１－５　まとめ

多くの調査項目で、平均値は 2004 年度、2005 年度、2006 年度と年度を重ねるにつれ、わずかではあるが増大する方向に変化している。しかし、この変化は真の変化ではなく、極大値付近でのゆらぎである可能性も棄却できない。平均値の更なる増大を得るには、新たな取り組みが必要と思われる。

23 の調査項目の内、2004 年度は 18 項目、2005 年度は 17 項目、そして 2006 年度は 16 項目において、理学部の平均値が全学の平均値を下回っている。授業への姿勢では理学部が全学より勝っているが、教員の授業方法、授業内容、総合的評価になると、全学に比べ、理学部の評価は低いものとなっている。分析を更におしすすめ、この原因を明らかにすることは今後の重要な課題である。

２．担当教員からの所見票に対するまとめ

２－１　「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

多くの教員は学生からの授業評価は概ね良好であったと判断している。授業評価の結果を真摯に受け止め、来年度の授業に活かしていこうという意見が多かった。授業評価をみて、今年度行った取り組みを見直し、今後の改善の方策を具体的に示している例も多くみられた。学生が授業の予習復習に当てる時間の少なさを指摘し、いくら授業改善の努力をしても効果の薄いものになることを危惧する教員もみられた。また、授業内容と調査項目との不具合を指摘する声もあった。たとえば、「テーマが現代的であった」、「最新の学問成果にふれた」などの評価点は、基本的で重要な古典論の授業に対しては、逆転するからである。

２－２　「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

多くの教員は学生の指摘に真摯に耳を傾け、その意見を分析している。そして努力の足りかったところはすなおに反省し、来年度の授業改善に活かしていこうとしている。また、正しいと信じるところでは、安易さを求める学生の批判に屈することなく、学生にも教員にも厳しさが求められる授業を考えている教員もいる。

２－３　「改善に向けた今後のまとめ」

パワーポイント、映像教材の使用は大変好評であった。その他、授業改善の方策としては、小テストの実施、レポートの提出、リアクションペーパーの活用、CHORUS の活用、レジュメプリントの配布、講義とゼミの併用などが挙げられる。

３．学生からの意見（自由記述）の集約

３－１　「肯定的評価として多い意見の集約」

（1）スピードも適切で分かり易い授業であった。（2）論理的思考の訓練になった。（3）授業の最初で行った前回の復習は大変に良かった。（4）TA は親切で、説明が分かりやすかった。（5）基本・入門的なところから説明がなされたので理解できた。（7）演習があったので、自主的に取り組むことが出来た。（8）小テストは理解を助けた。（9）プリント、レジュメ、CHORUS での説明が分かりやすかった。（10）パワーポイントにより図がみやすかった。（11）発表の訓練になった。

３－２　「否定的評価として多い意見の集約」

（1）板書が速い、汚い、小さい。（2）声が小さい。（3）内容が難しすぎて理解できない。（4）私語が多い。（5）授業のスピードが速過ぎる。（6）宿題、課題が多過ぎる。（7）質問に答えて欲しい。（8）宿題の解答を示して欲しい。（9）学生が今分かっている範囲を知って、授業を進めて欲しい。（10）授業の量が多過ぎる。（11）教科書を使用して欲しい。

４．今後の授業改善に向けた課題の提示

授業の準備をするとき問題となるのは、授業の焦点をどのレベルに合わせ、難易度をどれくらいにするかである。この判断により、授業内容、教科書の選択、授業のスピード、そして授業改善の具体的な方策が変わってくるのである。今まで授業内容は主に当該年度の担当教員にまかされてきた。しかし、ある１つの科目はそれだけで独立しているのではなく、他の科目と互いに関連し合っている。また、学生のレベルは一定ではなく、年度ごとに変わる。したがって授業内容の決定や授業改善のためには、学科全体あるいは関係した複数の教員が集まり、討論することが必要になる。このような討論を通し、学生のレベルの把握、授業目標の明確化、適切な授業内容の決定、授業改善具体策の提示、そして一貫したカリキュラムの達成が可能となるのである。カリキュラムの全体会議とでもいうべき、討論の機会をどのようにつくっていくかが今後の課題である。

2006 年度項目別平均値および 2005 年度との比較（理学部）

項　目		2006			2005			有意水準
		度数	平均値	SD	度数	平均値	SD	
Ⅰ	この授業へのあなたの取り組み方について…							
Ⅰ1	授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	3,490	4.60	0.74	2,875	4.62	0.74	
Ⅰ2	この授業に積極的に参加した	3,489	3.81	1.06	2,877	3.76	1.11	
Ⅰ3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3,486	2.91	1.04	2,871	2.84	1.09	*
Ⅰ4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3,477	3.00	1.12	2,872	2.95	1.13	
Ⅰ5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	3,471	3.01	1.10	2,865	2.83	1.10	**
Ⅰ6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5：3 時間以上、4：2-3 時間、3：1-2 時間、2：1 時間未満、1：0 時間）	3,481	2.06	1.06	2,869	1.98	1.00	**
Ⅱ	この授業の進め方は…							
Ⅱ1	聞きやすい話し方だった	3,486	3.58	1.18	2,874	3.47	1.22	**
Ⅱ2	各回の授業内容の量が適切だった	3,479	3.53	1.14	2,875	3.50	1.14	
Ⅱ3	各回の授業のねらいは明確だった	3,483	3.64	1.08	2,872	3.62	1.07	
Ⅱ4	各回の授業内容は明確だった	3,479	3.63	1.09	2,869	3.62	1.09	
Ⅱ5	十分な静粛性が保たれた	3,478	3.79	1.11	2,870	3.86	1.10	*
Ⅱ6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3,474	3.43	1.18	2,865	3.48	1.15	
Ⅱ7	板書のしかたが適切だった	3,467	3.21	1.18	2,865	3.18	1.20	
Ⅱ8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	3,452	3.14	1.22	2,836	3.00	1.19	**
Ⅱ9	教員は授業の準備を周到に行っていた	3,470	3.88	1.00	2,862	3.90	0.98	
Ⅲ	この授業の内容は…							
Ⅲ1	新しい考え方・発想に触れた	3,476	3.77	1.03	2,872	3.69	1.06	**
Ⅲ2	基本的知識が得られた	3,478	3.76	1.02	2,873	3.74	1.04	
Ⅲ3	テーマが現代的な意味を持っていた	3,476	3.55	1.09	2,869	3.52	1.07	
Ⅲ4	最新の学問成果に触れた	3,471	3.31	1.07	2,866	3.31	1.09	
Ⅳ	総合的にみて、この授業は…							
Ⅳ1	わかりやすい授業だった	3,477	3.47	1.21	2,873	3.39	1.24	*
Ⅳ2	授業全体の目標が明確だった	3,477	3.58	1.08	2,871	3.57	1.08	
Ⅳ3	学問的興味をかきたてられた	3,474	3.40	1.15	2,871	3.34	1.18	*
Ⅳ4	この授業を受けて満足した	3,475	3.49	1.15	2,870	3.45	1.19	
Ⅴ	学部等による設問							
Ⅴ1	この授業の教室の大きさは適切だった	3,225	3.93	1.00	2,597	3.88	0.98	

注）　平均値は、最小値＝1、最大値＝5 の 5 選択肢の平均。　SD＝標準偏差。
有意水準：*は p<.05、**は p<.01。無印の場合、二つの年度の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

５－４　社会学部

社会学部では昨年同様、総評を以下の通り学科ごとに記述するが、その前に、06 年度集計結果から社会学部の特徴を簡略に述べておく。

よく言われることだが、履修者数に対する回答者数が少ない場合、出席が少ない科目であり、「その科目のファン」の学生のみが回答した傾向が強い。そのため評価は高くなる傾向がある。評価が高い科目でも、回答率が低い場合、安易な判断はできない。結果の解釈には注意が必要である。一般に必修科目では、内容に興味がない学生も出席しなくてはならず、満足度等は低くなりがちである。また、少人数教育の科目は、評価が高いとも言える。少人数教育で、必修が少ない学科は、学生の満足度が高いことが予想される。

社会学部の結果は、いくつか授業満足度等が低い科目もあるものの、全般的にはあまり問題がない結果だと考える。ただ、授業満足度が高い科目は、やはり出席が少ない傾向があるようだ。今後は、回答数や出席率を考慮した分析が必要だろう。回答数が少ない科目も多い。また、全科目を偏りなく調査対象としてはおらず、単純な比較はできない。

社会学部は 06 年度にメディア社会学科が発足し１年生しかいない。その一方、産業関係学科は募集を停止し 2～4 年生が在籍する。産業関係学科は、もともと必修科目の設定が少なめで、選択必修や選択科目が多い。メディア社会学科は、１年生の必修科目を中心に授業評価を行ったため、昨年度と比べ、社会学部全体では、調査対象科目の中に必修科目が増えた可能性がある。実際、回答率は 4%近く上がっている。

学部全体の項目別平均値を見ると、統計的に見て昨年より評価が上昇したのはⅠ1、Ⅰ3、Ⅱ6、Ⅱ8 である。とくにⅡ8「映像視覚教材の効果」は評価が上がり、学部として改善の効果が見られたのかもしれない。しかしⅡ5 の静粛性は下がっており、学生がうるさいと感じた割合が多かったようだ。ただこれは、上述のように調査対象科目に必修科目が増えた事情もある。興味がなくても出席しなくてはならず、予想できる結果でもある。あるいは、最近の学生が私語が多いという可能性もあるが、昨年との単純な比較はできないし、これだけで原因は分からない。ただ注意すべき結果ではある。その他についても、学科新設のためもあり、昨年とは調査対象科目が異なるし解釈は難しい。

学年別の分析結果を見ると、やはり出席率は 1 年生がもっとも良いが、その他ほとんどの項目で４年生の評価が高かった。出席がよければ上述のように、評価が低い傾向は存在すると言ってよいだろう。

Ⅰ．社会学科

１．集計データからみられる結果のまとめ

他学科との比較で 4 学科中もっとも低いのは、Ⅰ4「授業をきっかけに発展的な勉強をした」、Ⅳ3「学問的興味をかきたてられた」である。もっとも評価が高いのはⅠ1「出席率」である。ただ、いずれもあまり大きな差はない。1 年生のみのメディア社会学科と、産業関係学科を除くと 2 学科しかないが、社会学科はほとんどの項目で、現代文化学科より評価が低く、反省が必要かもしれない。ただ上述のように、学科間比較は難しい部分はある。回答率は社会学科はやや高めなようだ。

２．担当教員からの所見票に対するまとめ

２－１　「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

昨年と同様、社会学科では必修科目、選択必修科目をすべて調査対象とし、その他は各教員が対象科目を選んだ。200 人近い登録者の科目では、授業運営の困難さや私語に関する記述が多い。「分かりやすさ」や「目標が明確だった」という項目で評価が高いのに、満足度が低いことを記述する教員が必修科目でいくつかある。やはり必修科目の満足度の低さが表れている。学生の予習復習時間の少なさへの言及も多い。

２－２　「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

回答数がすくない科目では、学生のよい反応が多い、ほめてもらい嬉しい、といった所見が多い。板書や話し方に関して否定的な内容への言及がいくつかある。多くの教員はそれを受けとめ改善策を提示しているが、教員が反発している意見も一部ある。しかし教員の方が、教育者として寛容さを持ち、謙虚に反省すべき部分もあるだろう。全般的に、自由回答はあまり多くはないようだ。

２－３　「改善に向けた今後の方針」のまとめ

板書、私語や静粛性、話し方についての、今後の改善意見が多い。資料作成、パワーポイント活用などの意見がある。その他、講義内容については、抽象的内容について学生の反応が悪いため、今後内容の整理をしたいという記述がある。ビデオ教材使用、小グループ討論実施、パソコン教室使用、V コーラスシステムのディスカッション機能使用なども記述がある。大人数教室なのに音響が悪い教室があるという意見は重要であり、大学側で改善の必要がある。また、非常勤の兼任講師に依存した教育も多いため、教育目的や教室の実態について、大学側と学生とで問題意識を共有すべきという意見があった。

３．学生からの意見（自由記述）の集約

３－１　肯定的評価として多い意見の集約

TA がついていること、パワーポイントや視聴覚教材、配付資料などを評価するものある。とくに回答者数 50 人以下の科目では、講義内容を肯定的に評価するものが多い。

３－２　否定的評価として多い意見の集約

字が汚い、板書が分かりにくい、話し方がききにくい、私語などが多い。とくに板書については意見が多い。時間配分や、内容の多さへの意見も多い。

４．今後の授業改善に向けた課題の提示

昨年までと同様、板書について意見が多く、これについては資料配付やＯＨＰやパワーポイントの活用で改善できるだろう。話し方についても一部で意見があった。個人的努力で話し方を改善するなどはやや難しいようだ。マイクの使い方や、教室の設備で対応できる部分もあるかもしれない。その他の内容については、さほど問題はない。

学生の自由回答が暴言に近いものもごく一部ある。しかし、内容を確認したところ、多くの学生の意見は適切である。板書が分かりにくいと自由回答に書かれただけで反発する教員の方が、寛容さにかけ問題だという部分もある。ただ兼任講師の方で、予想以上の大人数教室で、資料配付も大変で、気分を害した人がいるようだ。これについては、大人数教室の科目は複数クラスを作るか、TA を増やし資料配付や印刷を補助するなどの対応も必要であろう。教材印刷制度を知らない教員もいるらしく、教務の案内が要改善である。

授業満足度については、必修科目は低めになる傾向がある。上述の回答率の問題もあるが、やさしい内容にすると優秀な学生にとっては退屈になってしまう。産業関係学科のように、必修はなるべく設定せず、複数の選択必修科目の中からいくつか選ぶ制度にした方がよいのかもしれない。

Ⅱ．産業関係学科

１．集計データから見られる結果のまとめ

授業の総合的評価を示す「わかりやすい授業だった」、「授業全体の目標が明確だった」、「学問的興味をかきたてられた」、「この授業を受けて満足した」の 4 項目については、いずれも 3.5 以上となっており、学生から一定の評価を得ているといえよう。なお、これらの項目は、昨年度と比較してみると、いずれもほぼ横ばいであった。学生から一定の評価を得ており、その評価が低下していないことについては、まずは一安心である。ただし、学科として、現状に満足せず、今後、学生からより高い評価を得られるように努力していく必要はある。

授業の内容では、「テーマが現代的な意味を持っていた」が最も高く、「最新の学問的成果に触れた」が最も低かった。ただし、これらの項目についても、いずれも 3.5 以上の評価を得ており、学生から一定の評価を得ているといえよう。また、授業の進め方の中では、「教員は授業の準備を周到に行っていた」が最も高く、「板書の仕方が適切だった」が際だって低かった。授業の進め方についても、「板書の仕方が適切だった」を除いていずれも 3.5 以上であり、一定の評価を得ているといえよう。その一方で、板書の仕方については、例年低い評価を得ている。なぜこの項目についての評価が低いのか、原因の探索も含めて、今後学科として取り組んでいく必要があろう。

学生側の授業に対する取り組みを示す 5 項目（「シラバスは受講に役立った」は除く）については、「授業全体を通じての出席率」および「この授業に積極的に参加した」はそれぞれある程度高い数字を示したが、それ以外の項目については、いずれも極端に低かった。これも例年と同じ傾向にある。各教員が連携して、授業時間外の学習を促進するような対策を打っていく必要があろう。

２．担当教員からの所見票に対するまとめ

２－１　「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

先述したとおり、学生の満足度が全体的に高かったため、多くの教員が、結果に満足しているようであった。その一方で、多くの教員が、ただ現状に満足するだけでなく、より満足度が高い授業を提供していこうと考えているようであった。

２－２　「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

多くの教員が、学生からの指摘を真摯に受け止め、学生の自由記述に対して丁寧に所見を述べていた。

２－３　「改善に向けた今後の方針」のまとめ

多くの教員が、評価の点数が低い点について言及し、具体的な改善策を示していた。

３．学生からの意見（自由記述）の集約

３－１　「肯定的評価として多い意見の集約」

肯定的な意見として、教員が熱心であるとか、わからない点について授業終了後に個別に相談に乗ってくれるなどといった細かいケアをしてくれる点を上げた学生が多かった。また、視覚教材を用いたり、練習問題やミニテストなどによって理解を促進したりするなど、難しい理論をわかりやすく教えるために工夫している点を評価する声も多かった。

３－２　「否定的評価として多い意見の集約」

否定的な意見として、進行の進行が速すぎる、内容が難しすぎて理解が出来ない、教室が騒がしい、教員の声が聞き取りづらい、板書の仕方を工夫して欲しい、などという意見が目立った。

４．今後の授業改善に向けた課題の提示

板書の仕方については、評価点も低く、自由記述欄においても否定的な評価が多かった。この点については、改善していく必要があろう。また、自由記述欄の否定的な意見として、内容が難しく理解が不足している点が上げられた。この点については、説明の仕方、教材の用い方、進行速度などの工夫により、理解を促進する努力をしていく必要がある。
その一方で、学生側の授業に望む態度についても改善が求められる。この点についても、教員としていかに改善を促すかについて検討していく必要があろう。

Ⅲ．現代文化学科

１．集計データからみられる結果のまとめ

一昨年度、昨年度同様に、現代文化学科は他学科よりも相対的に高い評価を受けている。特に、「テーマが現代的な意味を持っていた」「教員は授業の準備を周到に行っていた」に対する評価は平均で 4 を超えている。他方、学生が「授業の予習復習等に当てた時間」は 1.55 と社会学部のうちで最も小さいポイントを示しており、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」に対する回答も 2.8 と学部内で低めのポイントである。教員の授業に対する熱意が学生の授業への積極的な取り組みに反映するためにはどのような方策が必要であるのか等、今後の検討が必要とされよう。

また、一昨年度、昨年度同様、本年度も履修者数に対する回答者数の割合が低い科目も

散見され、受講者全体の評価として受け止めるには課題も残されている。

２．担当教員からの所見票に対するまとめ

２－１　「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

授業評価に対し真剣に向き合う教員の姿が読み取れる。一昨年度あるいは昨年度から継続されている授業については、これまでの授業評価を本年度の授業に反映させたとする声が少なくない。一方、そのような教員側の努力に対して、学生側の予習不足等、授業に臨む姿勢の問題点を複数の教員が指摘している。

学生からの意見としてもしばしば取り上げられている板書や映像視覚教材については、使用しない方針であると述べている教員もおり、授業スタイルによっては現在の評価項目が馴染まないケースもあるといえよう。

２－２　「自由記述覧に対する担当教員の所見」のまとめ

学生からの意見が肯定的なものであれ、否定的なものであれ、担当教員には十分に受け止められていることが分かる。

肯定的意見に関しては、今後の励みになるとして好意的に受け止められている声もある。一方、否定的意見に対しては、今後の課題あるいは参考として受け止める教員が少なくないが、学生の消極的な受講態度に起因する意見であることを指摘する声もある。また、配布資料についてや静粛性に対してなど、一部の学生から肯定的に評価されていたことが、他の一部の学生からは否定的に評価されるといった難しさも挙げられている。

２－３　「改善に向けた今後の方針」のまとめ

授業評価及び自由記述を受け、真摯に取り組む様子が読み取れる。特に、「1. 集計データからみられる結果のまとめ」でもふれたように、学生の予習・復習等積極的な授業への関わりが低い点を改善するように促すことを検討する声が複数挙がっている。

３．学生からの意見（自由記述）の集約

３－１　「肯定的評価として多い意見の集約」

配布資料が分かりやすい、見やすい、たくさん配られるなど、配布資料に関する意見が多数見られる。その他には、パワーポイントの使用の仕方に工夫が凝らされている点も評価されている。

３－２　「否定的評価として多い意見の集約」

自由記述として挙げられた中では、板書や配布資料が見づらい、少ないといった意見が多い。その他、教室の狭さや静粛性など授業環境に関わる意見も複数見られる。

４．今後の授業改善に向けた課題の提示

本年度の担当教員の所見からも一昨年度、昨年度の授業評価を受けて、授業改善に努力している姿が浮かび上がっている。さらに、教員の授業準備に対しては高い評価が与えら

れていることも、ここで再確認しておきたい。
今後のさらなる授業改善に向けては、多くの担当教員からのコメントにもある通り、学生の予習・復習や授業をきっかけとした発展的な勉強を促すことがまず第一に挙げられよう。どのような動機付けが有効であるかについて、今後一層学科として取り組んでいく必要性があるだろう。
　その他には、学生からの否定的評価として複数挙げられた板書や配布資料のさらなる工夫、静粛性のより一層の確保が課題として挙げられる。

Ⅳ．メディア社会学科

１．集計データからみられる結果のまとめ

　メディア社会学科については、2006 年度が開講年次であり、1 年生のみであり、他学科との比較が難しい点がある。これを踏まえると「Ⅳ．総合評価」の平均値の学科間比較においてメディア社会学科が低い一方、「学問的興味の促進」は真ん中の順位である点は来年度以降の結果をみながら対応すべきものと考える。なお、学科会議において、特に大教室での全カリ科目での私語の多さ、全般的な兼任講師へのフォローが課題として示されているので、記載しておきたい。

２．担当教員からの所見票に対するまとめ

２－１　「授業評価に対する担当教員の所見」

　担当教員の狙いどおりの授業が概ね達成されたとの記述も多い、半面、学生の予習復習時間の少なさへの言及が多い。また、「小・中学生レベル以下のマナーを注意・指摘しても無駄である」との厳しい意見もあった。

２－２　「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

　視聴覚教材の活用、板書の改善、参加型授業への転換、レジュメの配付・方法など、教員側からの改善点が多く示されている。また、私語に関して 150 人以上の実習科目の担当者からは「教室内がうるさい。話が聞こえない、との自由記述が圧倒的。当方も一番気になった点。『静かに！』では効き目ゼロ。マナーについては相当レベルが低い」との意見もあり、学科としての対応は行うが、学部および全学的な対応が必要であると思う。

２－３　「改善に向けた今後の方針」のまとめ

　私語や静粛性、授業のメリハリ、課題図書等の活用による予習復習の促進、板書についての、今後の改善意見が多い。また、「学生の数やプレゼンテーションのやりやすいような教室で授業を行いたい」との希望もあり、大学としてのさらなる設備改善を進めてほしい。レポート課題について、記述方法のルール化（例、ネット上のコピー＆ペーストの禁止）を求める意見もあり、この点については大学全体でのルール化（学科会議では試験時のカンニングと同様の不正行為として位置づけるとの意見が多かった）が必要であろう。

３．学生からの意見（自由記述）の集約

３－１　「肯定的評価として多い意見の集約」

資料配付、板書方法、視聴覚教材の使用などについて、肯定的な意見が多かった。

３－２　「否定的評価として多い意見の集約」

社会学科同様、板書、話し方、私語などについての意見が多い。また、教員の遅刻、時間配分や、内容の多さへの意見も多い。

４．今後の授業改善に向けた課題の提示

教員からの「改善に向けた今後の方針」でも示されているように、個々の教員レベルで対応できる問題については取り組んでいくとの回答が多かったが、大学として設備面でのさらなる充実は必要であろう。私語の問題については本年度から大学全体での取り組みがはじまったところであり、今後の改善が期待される。なお、授業評価アンケートの実施にあたっては、特に自由記述欄の記載について、建設的な記載を求めることを明記し、実施マニュアルにもその旨を口頭で伝えることを記述するなどの対応が必要と考える。

2006 年度項目別平均値および 2005 年度との比較（社会学部）

項　目		2006			2005			有意
		度数	平均値	SD	度数	平均値	SD	水準
Ⅰ	この授業へのあなたの取り組み方について…							
Ⅰ1	授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	6,838	4.38	0.87	6,371	4.31	0.90	**
Ⅰ2	この授業に積極的に参加した	6,840	3.57	1.04	6,373	3.55	1.09	
Ⅰ3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,832	2.73	1.02	6,364	2.68	1.04	**
Ⅰ4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,827	2.77	1.09	6,354	2.75	1.10	
Ⅰ5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	6,809	3.21	1.04	6,334	3.20	1.05	
Ⅰ6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5：3 時間以上、4：2-3 時間、3：1-2 時間、2：1 時間未満、1：0 時間）	6,830	1.60	0.91	6,353	1.58	0.87	
Ⅱ	この授業の進め方は…							
Ⅱ1	聞きやすい話し方だった	6,838	3.70	1.13	6,367	3.71	1.13	
Ⅱ2	各回の授業内容の量が適切だった	6,834	3.79	0.97	6,367	3.80	0.99	
Ⅱ3	各回の授業のねらいは明確だった	6,824	3.76	1.00	6,366	3.76	1.03	
Ⅱ4	各回の授業内容は明確だった	6,816	3.76	1.00	6,354	3.76	1.04	
Ⅱ5	十分な静粛性が保たれた	6,801	3.57	1.21	6,360	3.73	1.17	**
Ⅱ6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,799	3.65	1.06	6,359	3.61	1.10	*
Ⅱ7	板書のしかたが適切だった	6,783	3.07	1.13	6,333	3.07	1.13	
Ⅱ8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	6,772	3.44	1.22	6,325	3.35	1.26	**
Ⅱ9	教員は授業の準備を周到に行っていた	6,805	4.00	0.92	6,352	4.00	0.92	
Ⅲ	この授業の内容は…							
Ⅲ1	新しい考え方・発想に触れた	6,830	3.78	0.97	6,367	3.77	1.00	
Ⅲ2	基本的知識が得られた	6,825	3.83	0.95	6,368	3.81	0.98	
Ⅲ3	テーマが現代的な意味を持っていた	6,826	3.95	0.97	6,364	3.97	0.98	
Ⅲ4	最新の学問成果に触れた	6,823	3.44	1.00	6,360	3.43	1.00	
Ⅳ	総合的にみて、この授業は…							
Ⅳ1	わかりやすい授業だった	6,823	3.62	1.11	6,365	3.62	1.15	
Ⅳ2	授業全体の目標が明確だった	6,826	3.69	1.02	6,364	3.72	1.03	
Ⅳ3	学問的興味をかきたてられた	6,823	3.50	1.10	6,365	3.49	1.13	
Ⅳ4	この授業を受けて満足した	6,822	3.60	1.09	6,365	3.59	1.14	

注）平均値は、最小値＝1、最大値＝5 の 5 選択肢の平均。　SD＝標準偏差。
有意水準：*は p<.05、**は p<.01。無印の場合、二つの年度の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

５－５　法学部

１．集計データからみられる結果のまとめ

2004 年、05 年に比べ、06 年はほとんどの項目において平均値はあがっており、教員の努力のあとがうかがえる。法学部として喜ばしい進展と受け止めている。とくにシラバスは受講に役だった、教科書・授業レジュメプリント・参考文献が効果的だった、映像視覚教材の使用が効果的だったという三つの項目で、過去２年間より明らかに評価が高くなっている。

ただ昨年度と同様、他学部に比べ回答率の低さが気になった。必修科目がない、出席をとらず、ミニテストなども実施しない科目が多いという法学部特有の事情に起因するのであろうが、今年度も回答率が 30%台前半という数字をどのように受け止めるべきなのか、にわかに判断できない。

具体的な質問項目に対する回答結果は他の学部とだいたい同じであるが、法学部がいわゆる大人数クラスが多いにもかかわらず、教室の静粛性に対する評価が高いこと、授業の予復習に充てた時間が多いことが目立つ。ただし前者については、上記の理由で毎回の講義への出席者が少ないことと無関係ではないだろうし、後者についても、実際の時間数に換算すると僅かである。一方、授業を受けるにあたって学生は十分な準備をしていたか、教員の板書の仕方は適切か、映像視覚教材の使用は効果的かとの項目では、学部としては過去 3 年間で確実に改善されているが、それでもなお他学部に比べ低い数値であった。後者二つの項目については、下記でも述べるように、教員側が対処するべき課題であるが、前者については学生の自己努力を求めたい。

昨年度と同様、学年が上がると全体的な評価が上がる傾向にある。高校までの懇切丁寧な授業ではなく、学生の自主性に委ねる大学の授業への単なる慣れによるのか、現在のアンケートからだけでは見極めは難しい。

２．担当教員からの所見票に対するまとめ

２－１　「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

例年のことではあるが、所見からは、学生の出席率が決して高くなく、しかも予習復習に多くの時間を費やさないなかで、しかしその一方で真面目に出席し、相応の学習をしている学生もいるなかで、教員が一定の学問的水準を維持しつつ、出席者の関心と興味を引きつける講義をおこなう難しさを痛感していることがうかがえる。話し方の改善、板書やレジュメの工夫、コメントカードの活用など教員の努力の必要を認めながらも、講義以外での学生の自主的勉学を求める声が多い。その意味で、昨年度と同じく学生が予復習に充てた時間が圧倒的に少ないとの結果―理学部を除く他学部に比べると多いとはいえ―は、大変残念である。

なお映像視覚教材の使用、講義の現代性、最新の学問成果を評価するかのごとくのアンケート項目に違和感をもつ教員は依然多い。また、学生に問う質問が重複しているのではないか、たとえば、Ⅰ3 とⅠ6、Ⅳ1 とⅣ4 はほぼ同じ結果が予想されるのでないかとの指摘、より有用な結果を得るためにはアンケート項目全体の見なおしが必要ではないかとの声があった。

２－２　「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

教室の静粛性の維持について多くの教員が努力しており、教室のハード面での良好な環境－とくにマイク、椅子の座り心地さ、黒板の質、冷暖房の程度－については大学側に改善を要望する声が多い。最近増えているパワーポイントの利用については、学生の評価が分かれており、教員も試行錯誤のようである。なお教員の声が聞き取りにくい、板書が見にくいとの指摘に対しては、教員は真剣に対処していると判断しているが、同時に学生が教室の後ろでなく前に座って欲しいとの所見も多い。最後に、大人数クラス特有の問題については例年通りの指摘があった。

２－３　「改善に向けた今後の方針」のまとめ

2－1 で記述したように教員側の努力が今後の授業改善につながると期待しているが、同時に学生の自覚を促す指摘は多い。とくに詳細なレジュメ、ポイントを押さえたノートの取りやすい講義を求める学生の希望に対しては、学生が自分で考え、教員の話を取捨選択しながらノートをとる能力をぜひ身につけて欲しいとの切実な指摘が例年通りあった。質の高い講義の第一義的責任は教員が担うべきであるが、学生の姿勢も大事である。学生の自覚をいかに促すかが、今後の大きな課題ではないか。

３．学生からの意見（自由記述）の集約

３－１　「肯定的評価として多い意見の集約」

所見を概観したところ、学生の肯定的評価として、分かりやすい講義、詳細なレジュメを歓迎し、さらにレスポンス・コメントカードの提出など、学生が講義内容に関する疑問、要望などを教員に伝える手段、場をもつ場合、満足感が高いことがうかがえる。

３－２　「否定的意見として多い意見の集約」

所見を概観したところ、学生の否定的評価として、教員のしゃべり方、板書、マイクの音量への苦情が多い。なお自由記述欄については、教員間に賛否両論があることは承知しているが、今回の所見を見た限りでは、その意義を評価している教員が多かったことは興味深い。ただし少数の学生ながら、不真面目で教員を誹謗するコメントがあったとの指摘が幾つかあり、また授業に関係のない見当違いの記述を書く学生もいるとの所見もあった。とくに前者の問題に対処するためには、アンケートを記入する際に学生に何らの形で注意をするなど、対応策が必要ではないだろうか。なお教員の人格否定など問題ある自由記述が多い科目は、ほぼ例学なく低学年の学生向けであることは注目される。

４．今後の授業改善に向けた課題の提示

学生の要望のなかに、わかりやすい詳細なレジュメ、教員のポイントを押さえた話し方、コメントカードなどを通じ質問を教員に伝える機会の設定などが多い。もっともな要望であると思われる反面、授業をきっかけに学生をいかに予習、復習、さらには発展的学習へ

と促すかが、より良い講義につながることは明らかである。教員がこの種のアンケートをおこない、授業改善に向け努力することは不可欠であるが、同時に教員の対応だけでは限界があることも、過去3年間で明瞭になったのではないだろうか。

なお非常勤講師の専門科目もアンケートの対象であるが、多くの場合大変良心的に回答しコメントも寄せて頂いている。それだけに彼らの希望、少なくとも教室の設備面での改善の要望に対して、大学は真摯に対応する責務があるだろう。

2006 年度項目別平均値および 2005 年度との比較（法学部）

項　目		2006			2005			有意
		度数	平均値	SD	度数	平均値	SD	水準
Ⅰ	この授業へのあなたの取り組み方について…							
Ⅰ1	授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	6,752	4.40	0.91	6,965	4.36	0.93	*
Ⅰ2	この授業に積極的に参加した	6,765	3.52	1.09	6,963	3.49	1.09	
Ⅰ3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,754	2.71	1.04	6,957	2.62	1.03	**
Ⅰ4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,745	2.78	1.10	6,949	2.74	1.11	*
Ⅰ5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	6,727	3.17	1.08	6,931	3.08	1.07	**
Ⅰ6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5：3 時間以上、4：2-3 時間、3：1-2 時間、2：1 時間未満、1：0 時間）	6,748	1.83	0.98	6,952	1.75	0.93	**
Ⅱ	この授業の進め方は…							
Ⅱ1	聞きやすい話し方だった	6,754	3.62	1.14	6,958	3.62	1.20	
Ⅱ2	各回の授業内容の量が適切だった	6,741	3.59	1.06	6,952	3.60	1.06	
Ⅱ3	各回の授業のねらいは明確だった	6,731	3.68	0.99	6,951	3.66	1.03	
Ⅱ4	各回の授業内容は明確だった	6,740	3.70	1.00	6,944	3.67	1.05	
Ⅱ5	十分な静粛性が保たれた	6,722	3.81	1.08	6,937	3.76	1.16	*
Ⅱ6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,723	3.64	1.08	6,935	3.53	1.15	**
Ⅱ7	板書のしかたが適切だった	6,696	3.04	1.09	6,913	2.96	1.15	**
Ⅱ8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	6,642	3.12	1.20	6,831	2.97	1.24	**
Ⅱ9	教員は授業の準備を周到に行っていた	6,727	3.94	0.94	6,924	3.92	0.96	
Ⅲ	この授業の内容は…							
Ⅲ1	新しい考え方・発想に触れた	6,742	3.76	0.98	6,945	3.73	1.02	
Ⅲ2	基本的知識が得られた	6,744	3.86	0.92	6,941	3.82	0.97	*
Ⅲ3	テーマが現代的な意味を持っていた	6,738	3.81	0.97	6,940	3.85	1.00	*
Ⅲ4	最新の学問成果に触れた	6,728	3.45	0.98	6,931	3.45	1.03	
Ⅳ	総合的にみて、この授業は…							
Ⅳ1	わかりやすい授業だった	6,743	3.58	1.11	6,938	3.55	1.15	
Ⅳ2	授業全体の目標が明確だった	6,735	3.67	1.00	6,944	3.62	1.04	*
Ⅳ3	学問的興味をかきたてられた	6,740	3.51	1.07	6,943	3.47	1.12	*
Ⅳ4	この授業を受けて満足した	6,741	3.58	1.08	6,943	3.54	1.14	*

注）平均値は、最小値＝1、最大値＝5 の 5 選択肢の平均。　SD＝標準偏差。
有意水準：*は p<.05、**は p<.01。無印の場合、二つの年度の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

５－６　経営学部

１．集計データからみられる結果のまとめ

経営学部は、2006 年度に開設されたため、今回はじめての授業評価アンケートの実施であった。そのため、1 年次生向けの基礎的な授業に対する評価である点、教員にとっても本年度の講義が初めてであることが少なくない点、過年度との比較ができない点などに注意してデータをみる必要がある。なお、全回答者(2,473 人)の内訳は 1 年生が 1,785 人、2 年生 398 人、3 年生 202 人、4 年生 88 人となっていて、2 年生以上の回答者が 28%程度いるが、これは他学部の学生である。

１－１　各項目の平均値

Ⅰ学生自身の授業への取り組みについての自己評価については、各項目ともそれほど悪くない。「出席率」（Ⅰ1）は高く「積極的に参加している」（Ⅰ2）が、「授業の準備」（Ⅰ3）や「発展的勉強」（Ⅰ4）など、講義時間以外の主体的な勉強はしていない傾向が把握できた。

Ⅱ教員の授業の進め方、Ⅲ授業内容、Ⅳ総合評価の各項目についても、すべて平均点は 3.0 以上で全般に評価は低くない。とりわけ「教員は授業の準備を周到に行なっていた」が 4.0 以上で、他も 3.5 以上の項目が多く、全体的に良い評価を得ている。

経営学部では、2005 年度のデータが存在せず過年度との比較できないため、他学部との平均値の比較をしてみたい。特に良かったところと悪かったところのみピックアップする。まず、他学部に比べて平均値が高かったものに、出席率（Ⅰ1）と「授業に積極的に参加した」（Ⅰ2）の２つがあり、全学部中２番目に高い平均値を得ている。他方、「十分な静粛性が保たれた」（Ⅱ5）は全学で最も悪く、「シラバスは受講に役立った」（Ⅰ5）、「毎回の授業内容の量は適切だった」（Ⅱ2）、「新しい考え方・発想に触れた」（Ⅲ1）は全学で２番目に低いという結果であった。なお、経営学部は 1 年生向けの基礎科目ばかりであるので、Ⅲ1 の評価が低いことは、やむをえない。

１－２　クロス分析結果

Ⅵの総合評価とクラス規模との関係では、全学的にクラス規模が小さいほど評価が高い傾向があるが、経営学部の場合に限ればそのような傾向はみられなかった。また、学年別の比較では、学年があがるほど評価が高い傾向もみられた。単純に考えれば経営学部生(１年生)の評価より他学部受講生(2 年生以上)の評価が良かったということになるが、全学的にも同様の傾向があるので、受講生の学部の違いで評価が異なるのかどうかは一概に判断できない。

総合評価との相関関係の高い項目は、Ⅱ教員の授業の進め方（特にⅡ1～4：「聞きやすい話し方だった」、「各回の授業内容の量は適切だった」、「各回の授業内容のねらいは明確だった」、「各回の授業内容は明確だった」）とⅢ授業内容（特にⅢ1「新しい考え方・発想に触れた」、Ⅲ2「基本的知識が得られた」）であった。

他方、「テーマが現代的な意味を持っていた」（Ⅲ3）と「最新の学問成果に触れた」（Ⅲ4）と総合評価との関係に相関がみられなかった。これも、今回のアンケートが基礎的科目

ばかりであることと無関係ではない。

２．担当教員からの所見票に対するまとめ

２－１　授業評価に対する担当教員の所見

今回、教員にとっても初めての開講科目であることが多く、試行錯誤しながらよい授業を行なおうと懸命に努力している様子が所見にも現れていた。静粛性の確保については多くの教員が悩んでおり、人数の割に教室が狭すぎるなどハード面の問題や、授業にただ出席している、小テストの時間帯のみ現れるなど、授業を阻害する学生についての指摘もみられた。

２－２　自由記述欄に対する担当教員の所見

学生からの意見を真摯に受け止めて、改善しようとしている所見が多くみられた。視聴覚教材や板書や説明のしかた、授業のスピード（早すぎる）などについてのコメントが多かった。また、自由意見欄を廃止してほしいという要望もあった。

２－３　改善に向けた今後の方針

アンケート結果を受けて、資料配布のしかた、静粛性への対処、学生の理解度の把握、出席のとり方、授業のスピードの調整など、具体的な改善案が出されている。

３．学生からの意見の集約

３－１　肯定的評価として多い意見の集約

出現した単語の頻度を調査し、上位 10 件を抽出したところ、授業（109 件）、わかる+しやすい（105 件）、良い（いい、よい：104 件）、先生（74 件）、パワーポイント（37 件）、説明（37 件）、話（36 件）、おもしろい（26 件）、内容（21 件）、静か（20 件）などとなっていた。授業・説明がわかりやすい・おもしろい、教員の話しかた・熱意、パワーポイントが見やすい・わかりやすい、教室が静かなど、これらの単語の組み合わせが多かった。

３－２　否定的評価として多い意見の集約

同じく、出現した単語上位 10 件を抽出したところ、授業（111 件）、早い・速い・スピード（73 件）、板書・字（59 件）、人（53 件）、パワーポイント（52 件）、多い（50 件）、うるさい（48 件）、内容（46 件）、教室（43 件）、わかる+ない（33 件）などとなっていた。授業の進めるスピード、板書やプレゼンのしかた、レポートなどの量、人数が多い、授業環境（教室が狭い、うるさい）などの意見が多くみられた。なお、第１位の「授業」は、早い・わからないなどの単語との組み合わせが目立ち、「人」については他の受講生に対する指摘（たとえばうるさい人、寝ている人など）が多かった。

４．今後の授業改善に向けた課題の提示

４－１　１年生向け授業の特徴

アンケート結果には、１年生向けの授業を対象にしていることの影響がみられる。たとえば、「出席率」が高い、「新しい考え方・発想に触れた」機会が少ないなどがそれである。このことに関連して、アンケート自体が必ずしも基礎科目を想定して設計されていない点も指摘したい。そもそも基礎科目の講義目的は必ずしも現代的な意味を取り上げることでもなければ、最新の学問成果を紹介するものでもない。したがって、他学部に比べて「新しい考え方・発想に触れた」（Ⅲ1）の評価が低いこと、総合評価と「テーマが現代的な意味を持っていた」（Ⅲ3）と「最新の学問成果に触れた」（Ⅲ4）などの項目間に相関がみられないなどの結果は、それほど不思議なことではない。アンケート結果に対して、すべての項目の平均値が５に近づくほど当該授業は良好だと考えることは早急であり、授業科目の目的に照らして判断する必要がある。

４－２　授業環境

経営学部は「十分な静粛性が保たれた」（Ⅱ5）の平均値は全学で最も悪いという結果であった。多くの教員がこのことに悩んでいることが、所見からも明らかになった。静粛性は、退屈な授業、うるさくても注意しないなど教員側の問題、学生のモチベーションの低さなどが絡む問題であるが、それに加え、経営学部は移行期で、経営学部の１年生、社会学部産業関係学科の学生、経済学部経営学科の学生などが同一授業に混在しているという特殊事情がさらに悪影響を与えている可能性もある。また、静粛な授業環境を担保する適切な教室の確保も不可欠である。全学的にも私語が大きな問題となっており、大学全体の取り組みと歩調を合わせつつ、学部としても折に触れ、学生への自覚を促したい。

４－３　今後の対応

5 スケールの定型的な質問項目からは平均的な傾向、非定型の自由記述欄からは良い点・悪い点の両極端の意見が収集できた。自由記述欄の肯定的意見では、わかりやすい説明や話し方、見やすいパワーポイント資料、静かな環境の維持があり、否定的意見では授業の量が多い、スピードが早い、板書やプレゼンのしかたが悪い、授業環境（人数・教室）が悪いなどが多かった。これらの意見は、教員が授業改善をしていくためのヒントになる。

理想的なのは、学生が自ら積極的に授業に取り組み、教員もモチベーションの高い学生を相手に教育の質を高め、その結果高い総合評価を得るというパターンであろう。経営学部では、2007 年度すべての講義科目と基礎演習をアンケート調査科目にしているので、早めに対策を立てつつ、完成年度に向け理想的なパターンに近づけていきたい。

2006 年度項目別平均値および 2005 年度との比較（経営学部）

項　目		2006			2005		
		度数	平均値	SD	度数	平均値	SD
Ⅰ	この授業へのあなたの取り組み方について…				2006 年度新設学部のため、2005 年度データなし		
Ⅰ1	授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	2,545	4.69	0.63			
Ⅰ2	この授業に積極的に参加した	2,544	3.86	1.04			
Ⅰ3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,546	2.87	1.09			
Ⅰ4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,544	2.88	1.13			
Ⅰ5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	2,533	2.93	1.11			
Ⅰ6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5：3 時間以上、4：2-3 時間、3：1-2 時間、2：1 時間未満、1：0 時間）	2,539	1.82	0.99			
Ⅱ	この授業の進め方は…						
Ⅱ1	聞きやすい話し方だった	2,545	3.66	1.19			
Ⅱ2	各回の授業内容の量が適切だった	2,543	3.57	1.12			
Ⅱ3	各回の授業のねらいは明確だった	2,543	3.69	1.09			
Ⅱ4	各回の授業内容は明確だった	2,533	3.68	1.08			
Ⅱ5	十分な静粛性が保たれた	2,541	3.12	1.31			
Ⅱ6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,528	3.44	1.16			
Ⅱ7	板書のしかたが適切だった	2,505	3.15	1.15			
Ⅱ8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	2,532	3.64	1.17			
Ⅱ9	教員は授業の準備を周到に行っていた	2,531	4.06	0.97			
Ⅲ	この授業の内容は…						
Ⅲ1	新しい考え方・発想に触れた	2,539	3.71	1.05			
Ⅲ2	基本的知識が得られた	2,542	3.85	1.03			
Ⅲ3	テーマが現代的な意味を持っていた	2,539	3.82	1.02			
Ⅲ4	最新の学問成果に触れた	2,535	3.43	1.03			
Ⅳ	総合的にみて、この授業は…						
Ⅳ1	わかりやすい授業だった	2,543	3.60	1.18			
Ⅳ2	授業全体の目標が明確だった	2,543	3.65	1.09			
Ⅳ3	学問的興味をかきたてられた	2,539	3.47	1.16			
Ⅳ4	この授業を受けて満足した	2,542	3.52	1.18			

注）　平均値は、最小値＝1、最大値＝5 の 5 選択肢の平均。　SD＝標準偏差。
　　経営学部は 2006 年度に設置されたので、2005 年度との比較分析なし。

５－７　観光学部

１．集計データからみられる結果のまとめ

観光学部の「学生による授業評価アンケート」の結果は、文系他学部に較べると、突出した特徴は見られないが、総じて低めの評価になっている。ただし、学年が上がるにつれて各評価項目の評点平均は明らかに上昇しているが、学部毎にサンプルとなる学生の学年構成比率が異なるため、単純な学部間比較をすることは意味をなさない。

観光は、他学部に較べて、3, 4 年次生のサンプルが少ないため、やや低めの評価になっていると考えられる。

項目Ⅰ「この授業へのあなたの取り組み方について」は、Ⅰ1 出席率、Ⅰ2 積極的な参加、Ⅰ3 履修にあたっての準備、Ⅰ6 授業の予習・復習などが有意に向上している。学生がより意欲的に授業に参加し、勉学に取り組んでいることを示していると思われるが、その要因については、経年的な分析を踏まえ慎重に解釈する必要があるだろう。

学生が授業に意欲的になった反面、項目Ⅱ「この授業の進め方は、・・」については、Ⅱ2 授業内容の量の適切さ、Ⅱ3「授業のねらいの明確さ」、Ⅱ4「授業内容の明確さ」の評価が前年より低くなった。学生が授業に熱心に取り組む傾向が見られるのに対し、授業の進め方に関する工夫がそれに追いついていないということだろう。

項目Ⅲ「この授業の内容は・・」についても、有意な項目は、Ⅲ2「基本的知識が得られた」で、前年に対してマイナスになっている。

項目Ⅳ「総合的に見て、この授業は・・」については、項目ⅡとⅢに示された授業をする側に対する総合評価的なものであると考えられるため、Ⅳ2「わかりやすい授業だった」、Ⅳ2「この授業を受けて満足した」などの項目において、有意な差がマイナスの方向に出た。

今回の結果は、総じて、学生が意欲的に授業に取り組んだのに、授業内容がそれに応えられていないことを明確に示しており、それぞれの科目で改善に取り組むことが必要であると考えられる。

項目Ⅴ「学部等による設問」においては、Ⅴ2「授業中の飲食・私語について」とⅤ3「新座キャンパスで学ぶことへの満足度」に関して、有意な差が出た。Ⅴ2 については、否定的な意見を持つ学生が増えているが、一般的には、新座キャンパスでの授業は比較的静かであると評価されているので、特に心配することはないだろう。

Ⅴ3 については、大きくプラスの評価を受けた。2006 年度からキャンパスがリニューアルされ、以前とは見違えるほど、施設も充実し、景観・環境的にも大きく向上したと感じているが、このことがアンケートにも素直に反映していると考えられる。

２．担当教員からの所見票に対するまとめ

２－１「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

科目毎に所見は、かなり異なっているが、代表的な意見について以下に挙げた。

＜代表的な意見＞

１）授業の進め方については、特に否定的な意見はなく、好意的な評価が多い。

２）学生は良く授業に取り組んでいたが、予習・復習に充てる時間が少なかった。

３）レジュメに加えてパワーポイントを使って理解に努めているのが評価された。
４）出席率が最後まで落ちなかった。学生の熱心さを感じた。
５）大教室における授業では、個別の学生のニーズに対応していくことが難しいと感じた。
６）知りたいことは質問せよと言っているが、質問があまりない。
７）学生のノートをとる能力が、著しく低下していると思う。
８）今後の授業展開に大いに参考になったので、生かしていきたい。
９）板書については、教室の都合上、現実的ではない場合があり、質問が不適切。

２－２「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

＜代表的な意見＞

１）映像・写真などをビジュアルに提示することを心がけており、その効果が評価された。
２）パワーポイントの提示が短いとの指摘がある。使い方を工夫したい。
３）フィールドワークを行ったが好評だった。授業枠とは別に時間が取れるといい。
４）他人に迷惑をかけるような私語・飲食などはなかったと考えていたが、実際には不快感を持った履修者もいたようだ。
５）多くのことを学習してもらおうと欲張りすぎた面もあり、反省している。
６）理論と現場の生の声のバランスに気を配ったつもりだが、それが評価された。
７）ゲストスピーカーの講義に対する評価は大変高く、制度として大変良い。

２－３「改善に向けた今後の方針」のまとめ

多くの教員が学生からの指摘を前向きにとらえ改善の方針を示している。また、教員側だけではなく、学生側にも努力してもらいたいとする意見も数多く認められた。以下に、代表的な意見を挙げる。

１）TA を付けて欲しい。
２）声が小さい、聞き取りにくい発音を改善したい。
３）予習・復習を促すようにしたい。
４）観光学部の学生にとって意味のある授業を心がけたい。
５）映像資料、レジュメ、板書などをバランスよく活用したい。

３．学生からの意見（自由記述）の集約

３－１「肯定的評価として多い意見の集約」

学生が肯定的に評価した代表的な項目を以下に挙げる。これらは、担当教員の熱意や授業の工夫が評価されたものと考えられる。

１）先生が厳しく注意したため私語が少なく、静粛性が保たれた。
２）新しい考え方に触れ、世界が広がった
３）パワーポイントばかりでなく、レジュメを毎回作成してくれた。
４）ゲストスピーカーの講義が特に興味深かった。

５）パワーポイントで写真や図が、分かりやすく提示された。
６）先生の実務的な経験から、リアリティのある解説を聞けた。

３－２「否定的評価として多い意見の集約」

学生が否定的に評価したのは、話し方やレジュメや資料配付、板書の文字などの技術的な面が多いが、教員に対する個人攻撃や中傷のようなものも含まれており、学生に対して、守るべきマナーがあることをしっかりと伝える必要性を強く感じている。以下に代表的な項目を挙げる。

１）話し方が単調すぎて内容を理解しにくかった。分かりやすい説明を望む。
２）重要なことは板書して欲しい。
３）授業名、シラバスの内容と違う授業だった。
４）パワーポイントの進みが早く、書く時間がなかった。
５）周りに受講態度の悪い学生が多くいたこと。
６）先生の声が小さくて聞き取りにくかった。
７）先生が遅刻してくる。

４．今後の授業改善に向けた課題の提示

一般的な意味での授業改善は、3-2「否定的評価として多い意見の集約」に示した項目に対して、2-3「改善に向けた今後の方針」を実行することである。具体的に指摘されており、努力をすれば改善効果は大きいと考えられる。

これらとは別に、アンケートから読み取れることを改善に生かすとすれば、まず、学生が授業に積極的に参加するようになっているので、より高度な観光学に内容に触れて満足感が得られるように授業の工夫をしていくことが必要であろう。また、高度化する授業をしっかり理解するには、学生も予習・復習に時間を取り、分からないことがあれば質問をするなど、授業を受ける基本的心構えを持って欲しいと思う。いずれかの機会にこの点について、学生に話をすることも必要だろう。

2006年度項目別平均値および2005年度との比較（観光学部）

	項　目	2006			2005			有意
		度数	平均値	SD	度数	平均値	SD	水準
Ⅰ	この授業へのあなたの取り組み方について…							
Ⅰ1	授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	3,761	4.49	0.81	3,755	4.39	0.89	**
Ⅰ2	この授業に積極的に参加した	3,763	3.66	1.02	3,748	3.59	1.08	**
Ⅰ3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3,758	2.76	1.04	3,749	2.69	1.06	**
Ⅰ4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3,752	2.80	1.13	3,752	2.78	1.15	
Ⅰ5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	3,742	3.26	1.06	3,738	3.24	1.08	
Ⅰ6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5：3時間以上、4：2-3時間、3：1-2時間、2：1時間未満、1：0時間）	3,759	1.58	0.90	3,750	1.54	0.87	*
Ⅱ	この授業の進め方は…							
Ⅱ1	聞きやすい話し方だった	3,759	3.52	1.21	3,753	3.57	1.19	
Ⅱ2	各回の授業内容の量が適切だった	3,757	3.76	1.00	3,749	3.83	0.96	**
Ⅱ3	各回の授業のねらいは明確だった	3,758	3.69	1.08	3,751	3.75	1.07	**
Ⅱ4	各回の授業内容は明確だった	3,751	3.68	1.09	3,742	3.75	1.07	**
Ⅱ5	十分な静粛性が保たれた	3,751	3.66	1.14	3,748	3.58	1.13	**
Ⅱ6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3,742	3.64	1.10	3,742	3.69	1.04	
Ⅱ7	板書のしかたが適切だった	3,738	3.07	1.12	3,725	3.07	1.11	
Ⅱ8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	3,732	3.52	1.26	3,715	3.45	1.26	*
Ⅱ9	教員は授業の準備を周到に行っていた	3,746	3.96	0.97	3,739	4.03	0.91	**
Ⅲ	この授業の内容は…							
Ⅲ1	新しい考え方・発想に触れた	3,760	3.77	0.99	3,752	3.79	1.03	
Ⅲ2	基本的知識が得られた	3,758	3.79	0.99	3,752	3.84	0.99	*
Ⅲ3	テーマが現代的な意味を持っていた	3,753	3.89	0.96	3,749	3.89	0.99	
Ⅲ4	最新の学問成果に触れた	3,747	3.43	0.99	3,747	3.45	1.04	
Ⅳ	総合的にみて、この授業は…							
Ⅳ1	わかりやすい授業だった	3,754	3.51	1.20	3,751	3.59	1.17	**
Ⅳ2	授業全体の目標が明確だった	3,754	3.61	1.09	3,751	3.66	1.08	
Ⅳ3	学問的興味をかきたてられた	3,756	3.44	1.15	3,751	3.49	1.18	
Ⅳ4	この授業を受けて満足した	3,753	3.54	1.17	3,751	3.60	1.16	*
Ⅴ	学部等による設問							
Ⅴ1	わたしの成績は、観光学部の中で良いほうだ	2,989	2.78	1.03	3,112	2.81	1.04	
Ⅴ2	わたしは、授業中に、飲食や私語をすることを好ましくないと思う	3,024	3.85	0.99	3,159	3.92	0.96	*
Ⅴ3	わたしは、新座キャンパスで学ぶことに満足している	3,021	3.84	1.14	3,160	3.60	1.24	**
Ⅴ4	わたしは、旅行することが好きだ	3,028	4.52	0.77	3,157	4.50	0.80	
Ⅴ5	わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した	3,022	3.31	1.15	3,155	3.37	1.22	
Ⅴ6	わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた	3,018	3.14	1.19	3,153	3.16	1.25	
Ⅴ7	わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた	3,008	3.23	1.20	3,141	3.28	1.26	

注）平均値は、最小値＝1、最大値＝5の5選択肢の平均。　SD＝標準偏差。
有意水準：*は p<.05、**は p<.01。無印の場合、二つの年度の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

５－８　コミュニティ福祉学部

１．集計データから見られる結果のまとめ

学年の度数に関しては、4 年生が少ない（8.77%）という結果は、昨年、一昨年と同様であった。コミ福の学生の多くが、3 年次までに卒業必要単位をほぼ取得している状況にあり、就職活動、卒業研究に力点をおいているものと思われる。ただ 4 年間の総括的な学びの期間としての４年次をどう意識的に設定していくのかが学部の学修体系としての検討が必要であると考える。

学外者が少ないという結果については、キャンパスの立地条件も関わっているが、低いといえよう。この結果は、昨年、一昨年と変わっておらず、Ｆキャンパスなどで、コミ福の授業をさらに宣伝していく必要がある。

「授業への取り組みの姿勢」は、これまで同様、出席率はよく（4.50）、授業にも積極的に参加している（3.67）が、予習復習に当てた時間（1.58）、授業への準備に関しても十分とはいえない（2.83）状況であった。学生側の授業への取り組みに関するこれらの項目すべてが昨年に比べて上がっており、熱意と具体的な学びの姿勢を評価することができる。こうした学生の熱心さに応え、さらに意欲を引き出していく教員側の働きかけ、授業改善が求められている。

「授業の進め方」に関しては、「十分な静粛性が保たれた」は、3.57 で立教大学の平均値を示しているが、昨年、一昨年と比べると年々低下している。この点に関して、学部としてもＦＤの重点課題として位置づけて取り組くむことになっている。

一方、教員は「授業の準備を周到に行っていた」（4.08）となっており、高い評価となっている。板書のしかた（3.16）以外では、各回の授業内容の量、授業のねらい、視聴覚教材当の使用の適確さなどは、3.57～3.85 といった数値となっており、おおむね肯定的な評価を得ている。しかし「授業の進め方」の 9 項目のうち、昨年比で 3 項目が低下し、5 項目で上昇するという状況となっており、教員側の努力が見られる。

新しい考え方・発想に触れた（3.94）、基本的な知識が得られた（3.94）など、授業内容に関しては、全体的に高い評価を得ている。一方、最新の学問成果に触れたという項目に関しては、3.62 となっており、コミュニティ福祉学における最新の学問成果の中身について、学生がどのような内容をそのように捉えているのかを把握することも必要であろう。と同時に教員の側がそうした学生の学問ニーズにどう応えていくのかも考える必要があろう。

総合的にみた授業の評価は、3.74 と比較的高い数値を示している。コミ福の授業評価は、いずれの項目においても、立教大学全体のなかで比較的高いグループに位置しているといえる。Ⅱ．授業の進め方、Ⅲ．授業内容、Ⅳ．総合評価は、最も高い評価グループにある。この評価は、授業自体が学生と教員が共同で創る内容が少なくないことが反映していると

いえよう。学生の要望を直接受け取りやすい関係を教員と学生が形成してきていることも大きな影響を与えているのではなかろうか。

全体としての評価は、比較的高いところで固定化しつつあるといえよう。安定しているという面とともに、それは一方で頭打ちの状況にあるという評価もできるであろう。

２．担当教員からの所見票に対するまとめ

２－１　「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

・全体に出席率はよく、一定の静粛を保つための努力はされているが、教員間の差がかなりあることも事実である。

・受講者数による授業評価のちがいもある。その点では授業規模に応じた授業のあり方の工夫がいることに、どのように教員が工夫をしていくのかが問われている。

・学生の授業への熱意をリアクションペーパーなどで感じるといった評価があるとともに、私語について十分対応できなかったという意見が少なくない。この点に関して、非常勤の先生方が注意することにためらいを感じられているように思う。

・受講生と教室の広さがミスマッチという意見が少なくなかった。

２－２　「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

・自由記述は、かなり積極的な学生が記述していることもあり、全体として高い評価や励ましに近い評価が書かれている。

・板書の読みにくさについては、授業評価でも相対的には低い状況があったが、自由記述でもその点を指摘する内容が多かった。これは大学教員が板書のトレーニングを受けていない現実の反映でもある。努力によって改善することはできる内容である。

・授業方法の希望として、視覚に訴える方法を求める声も多いが、聴くことから学ぶという点での学び方が培われていない学生の実態がある。その状況にどのように対応するのかが教員側に問われている。

・同じ授業でも、学生の評価や要望には開きがある。学生の要望をできるだけ取り入れることも工夫をしていきたいといった教員側の誠実な姿勢を感じることが多い。

２－３　「改善に向けた今後の方針」のまとめ

・板書のていねいさを心がける必要がある。

・パワーポイント、ビデオ等の視覚教材を授業のなかにどのように組み込んでいくのかの工夫が必要である。

・受講者数、教室規模の制約もあるが、学生同士、学生と教員との議論ができる授業展開を考え、努力する必要がある。

・教室の器材のレベルが悪いことも条件面での改善を求められている。

・授業方法に関する研究をどのように教員側でおこなっていくことができるか、大きな課題である。

３．学生からの意見（自由記述）の集約

３－１　「肯定的評価としての多い意見集約」

・教員の授業に向かう積極的な姿勢が評価されている。
・視覚や資料などに配慮され、説明がされていること。
・わかりやすい授業が多かった。
・話し方がとても聴きやすいという評価も多かった。

３－２　「否定的評価としての多い意見集約」

・板書の雑さについては改善を求められている。
・私語について、放置されていることもある。

４．今後の授業改善に向けた課題の提示

・資料の使い方・視覚機器の活用方法を授業目的との関係で明確に位置づけること。
・私語についての対応が必要である。
・基礎的な内容と発展的な内容の組み合わせ方の工夫。
・大規模授業での学生の授業参加を具体化するための方法の改善。
・参考文献・資料等の紹介を積極的に行うこと。

2006年度項目別平均値および2005年度との比較（コミュニティ福祉学部）

項　目		2006			2005			有意水準
		度数	平均値	SD	度数	平均値	SD	
Ⅰ	この授業へのあなたの取り組み方について…							
Ⅰ1	授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	4,608	4.50	0.75	3,967	4.42	0.82	**
Ⅰ2	この授業に積極的に参加した	4,609	3.67	1.00	3,967	3.67	1.00	
Ⅰ3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4,607	2.83	1.01	3,961	2.78	1.01	*
Ⅰ4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4,599	2.97	1.10	3,958	2.97	1.09	
Ⅰ5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	4,580	3.28	1.01	3,942	3.25	1.05	
Ⅰ6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5：3時間以上、4：2-3時間、3：1-2時間、2：1時間未満、1：0時間）	4,596	1.58	0.89	3,958	1.54	0.84	*
Ⅱ	この授業の進め方は…							
Ⅱ1	聞きやすい話し方だった	4,607	3.76	1.07	3,965	3.76	1.06	
Ⅱ2	各回の授業内容の量が適切だった	4,607	3.85	0.93	3,964	3.80	0.95	*
Ⅱ3	各回の授業のねらいは明確だった	4,599	3.82	0.98	3,961	3.86	0.95	
Ⅱ4	各回の授業内容は明確だった	4,600	3.84	0.97	3,956	3.86	0.95	
Ⅱ5	十分な静粛性が保たれた	4,589	3.57	1.18	3,960	3.65	1.13	**
Ⅱ6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4,594	3.77	0.97	3,958	3.74	1.01	
Ⅱ7	板書のしかたが適切だった	4,572	3.16	1.03	3,938	3.04	1.04	**
Ⅱ8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	4,579	3.70	1.09	3,947	3.69	1.11	
Ⅱ9	教員は授業の準備を周到に行っていた	4,598	4.08	0.87	3,947	4.06	0.91	
Ⅲ	この授業の内容は…							
Ⅲ1	新しい考え方・発想に触れた	4,604	3.94	0.94	3,965	3.99	0.91	*
Ⅲ2	基本的知識が得られた	4,601	3.94	0.90	3,964	3.97	0.88	
Ⅲ3	テーマが現代的な意味を持っていた	4,599	4.09	0.91	3,960	4.14	0.86	*
Ⅲ4	最新の学問成果に触れた	4,596	3.62	0.98	3,953	3.69	0.94	**
Ⅳ	総合的にみて、この授業は…							
Ⅳ1	わかりやすい授業だった	4,603	3.76	1.06	3,962	3.74	1.06	
Ⅳ2	授業全体の目標が明確だった	4,602	3.78	0.99	3,961	3.80	0.97	
Ⅳ3	学問的興味をかきたてられた	4,599	3.65	1.10	3,960	3.68	1.08	
Ⅳ4	この授業を受けて満足した	4,604	3.74	1.09	3,963	3.75	1.06	

注）平均値は、最小値＝1、最大値＝5の5選択肢の平均。　SD＝標準偏差。
有意水準：*は $p<.05$、**は $p<.01$。無印の場合、二つの年度の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

５－９　現代心理学部

１．集計結果から得られるまとめ

現代心理学部は、2007 年 4 月開設の新しい学部である。文学部心理学科をひきついだ心理学科は長い歴史を有するが、映像身体学科はまだ一年を過ぎたばかりなので、学部として、前年度以前との変化・動向を比較するのはむずかしい。

しかし、両学科の全体評価については、ある有意な差が見られ、多くの設問項目において、その評価は、心理学科が映像身体学科を上まわることになった。また、映像身体学科の評価においては、全学の平均評価を 0.5 ポイント（／5 ポイント）以上下まわる項目が、10 項目に達した。そこで、これは放置しがたいとの判断から、１年次配当の映像身体学科必修の「概説」科目各１クラス授業を、3 月末になって急遽２クラスに分ける措置を行った。集計結果をただちに授業形態に反映しえたのは幸いというべきであろう。評価の低かった項目については、その「意味」も含めて、今後継続的に点検してゆかなければならない。

１－１　学生自身の授業への意識・姿勢

学部全体、映像身体学科とも、出席率は全学平均を上まわっているが、授業参加の積極性、授業準備、授業の発展的学習の評価では、学部全体、映像身体学科とも、全学平均をやや下まわっている。傾向としては、全学の動向と同じであるが、出席はよいのに、授業への主体的な参加ができないことの原因は、授業形態、クラスサイズに大きく左右されよう。事実上の「マスプロ教育」と、「少人数教育」「面倒見のよい大学」などという印象的一般評価との「乖離」に、大学構成員として鈍感であってはならない。

１－２　授業の進め方

学部全体としての評価が、全学評価の平均を下まわっているが、心理学科と映像身体学科との有意な差がもっとも大きかったのは、学生から教員の「教授技術」を見るこの評価項目である。９項目のうち、実に７項目にわたって、心理学科より映像身体学科の評価平均の方が 0.5 ポイント以上下まわっていた。

映像身体学科の教員は「大学での授業」にはじめて関わる場合も多く、以上の差はその「経験の差」によるものだと見られることが多い。しかし、授業の「聞きやすさ」「分量」「ねらい」「授業内容の明確さ」「参考文献」「板書」「授業準備の周到さ」などの教育のメソッドと技術よりも、現場で活躍されている映像、演劇・ダンスのプロの教員の方々にとっては、むしろある「テーマ」をめぐって自由に語り、また実践するダイナミックな展開と、交流の濃密さこそ、重視されるべきものであろう。それは、あらかじめ切り取られ、数量化された質問と評価点によっては、計りがたいものである。担当教員と学生との間に、技術訓練や芸術追究において、ある「一体感」が醸成される時間があったかどうかが、まず問われなければならない。

１－３　授業内容の新しさ、現代性、先端性、平明性、目標設定、満足度

これらの中では「新しい発想に触れられた」という項目以外は、学部全体、映像身体学科とも、全学の評価平均値をやや下まわっている。映像身体学科だけを見ると、この

うち「基本的知識」「わかりやすさ」「授業全体の目標」の３項目において、心理学科評価平均を 0.5 ポイント以上下まわったものがあった。

これも、いわゆる「基礎的知識」が、芸術的創造の前提として不可欠なものか、また「わかりやすさ」「目標の明確さ」も、芸術制作やそれに関する講義において、まず問われなければならない問題かどうかの議論が必要である。受け手の学生の「芸術レベル」は、担当教員のそれと大きな径庭（へだたり）がある。直観や身体表現のもつ「非言語性」を育てることの難しさを無視することはできない。定められた「学生の授業評価項目」で、それが正しく測れるかどうか、それ自体がたえず問われなければならない。

２．担当教員からの所見

所見の数が少なかったので、まとめにくいが、大きく分ければ、「授業の話し声が小さい」「早口でよく聞き取れない」「マイクの調子が悪く聞き取れない」という技術的問題についての反省や条件整備を述べたもの、また、150 人を超える専門科目で、一部の学生の私語があり、それに対するルール作りの必要性が急務であることを述べた一般的意見、さらに、よい教科書が必要だという意見の反面で、「教科書的知識」をこわすことが急務であるとの意見が述べられているなど、学部専門科目の多様性がよくうかがわれるもの、などがあった。

３．学生からの意見

サンプルが少なく、特別な「傾向」は抽出しにくい。しかし、概して上記１に記した授業評価アンケートと重なる内容のものが多かった。肯定的評価としては、「興味が持てたこと」、否定的評価としては、これまでの「知の獲得技術」では追いつけない授業への困惑が多く見られた。

４．今後の授業改善に向けた課題

上記のように、授業改善にすでに活かしたこともあり、有効なアンケートであるとは思う。ただし、上に記したような映像身体学科固有の「知のあり方」は、従来の評価基準では計れないことも多い。その点を、とくに映像身体学科の場合、学科独自に、どうフィードバックすべきかは、今後の課題である。

2006 年度項目別平均値および 2005 年度との比較（現代心理学部）

項　目		2006			2005		
		度数	平均値	SD	度数	平均値	SD
Ⅰ	この授業へのあなたの取り組み方について…						
Ⅰ1	授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	1,094	4.66	0.70			
Ⅰ2	この授業に積極的に参加した	1,092	3.50	1.10			
Ⅰ3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	1,092	2.54	1.05			
Ⅰ4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	1,091	2.58	1.13			
Ⅰ5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	1,085	2.68	1.10			
Ⅰ6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5：3 時間以上、4：2-3 時間、3：1-2 時間、2：1 時間未満、1：0 時間）	1,088	1.61	0.85			
Ⅱ	この授業の進め方は…						
Ⅱ1	聞きやすい話し方だった	1,090	3.18	1.36			
Ⅱ2	各回の授業内容の量が適切だった	1,091	3.59	1.01			
Ⅱ3	各回の授業のねらいは明確だった	1,091	3.32	1.16			
Ⅱ4	各回の授業内容は明確だった	1,086	3.28	1.15			
Ⅱ5	十分な静粛性が保たれた	1,085	3.52	1.07	2006 年度新設学部のため、2005 年度データなし		
Ⅱ6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	1,087	3.28	1.16			
Ⅱ7	板書のしかたが適切だった	1,079	2.81	1.04			
Ⅱ8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	1,086	3.56	1.17			
Ⅱ9	教員は授業の準備を周到に行っていた	1,091	3.82	1.02			
Ⅲ	この授業の内容は…						
Ⅲ1	新しい考え方・発想に触れた	1,091	3.90	1.02			
Ⅲ2	基本的知識が得られた	1,091	3.43	1.08			
Ⅲ3	テーマが現代的な意味を持っていた	1,090	3.64	1.06			
Ⅲ4	最新の学問成果に触れた	1,088	3.28	1.08			
Ⅳ	総合的にみて、この授業は…						
Ⅳ1	わかりやすい授業だった	1,092	3.08	1.24			
Ⅳ2	授業全体の目標が明確だった	1,091	3.20	1.14			
Ⅳ3	学問的興味をかきたてられた	1,090	3.28	1.25			
Ⅳ4	この授業を受けて満足した	1,090	3.26	1.22			

注）　平均値は、最小値＝1、最大値＝5 の 5 選択肢の平均。　SD＝標準偏差。
　　現代心理学部は 2006 年度に設置されたので、2005 年度との比較分析なし。

５－１０　全学共通カリキュラム

１．集計データからみられる結果のまとめ

全学共通カリキュラム（以下全カリ）における授業評価アンケートの回答者数は 17,766 名で、学部増設に伴う学生数の増加の影響からか、昨年（16,104 名）より 1600 名ほど増加した。また、回収率は 46.72%であり、昨年（45.83%）より若干増加したが、全学平均値（46.86%）をわずかに下回るものであった。

全カリにおける、各項目平均値の 2005 年度の結果と比較すると、スコアが上昇している項目と下降している項目が混在している。しかし、いずれの項目も、2004 年度の結果からはスコアが改善されており、評価は頭打ちの状況であると解釈できる（大学教育開発・支援センター）。

学部間の比較では、全カリの学年分布が、全学の学年分布と傾向が大きく異なることを最初に述べておきたい（1：2：3：4 学年、全カリ vs．全学、49.20%：31.97%：11.87%：6.99% vs．35.42%：32.92%：22.63%：9.03%）。特に、1 学年の比率が約 50%であり、全カリの回答には 1 学年学生の評価が強く反映しているものと考えられる。以上のことをふまえて、各項目に関して、全カリと他学部との比較を試みる。授業への取り組みに関しては、昨年と同様に、出席率とシラバスの有効性に対して評価が高かったが、履修にあたっての準備、発展的な勉強の有無、予習復習への時間に対して、他学部の評価より低い傾向であった。このことは、全カリが学部専門科目と異なり、自分の専門外の授業を履修する機会が多いためであることや、演習系の授業をアンケート実施科目から除外していることが影響していると思われるが、学生に対して「教養を高める」という観点から学習する姿勢を促す必要性を感じる。授業の進め方に関しても、昨年と同様に、話し方、各回の量、ねらい・内容の明確さ、映像視覚教材の効果に対して、高い評価であったが、2004 年度よりはポイントが上昇しているものの、2005 年度および他学部と比較して静粛性が保たれていない傾向にあった。このことは、授業における履修規模別の結果からも明らかなように、履修人数に大きく作用されることであり、今後も学生の履修環境の改善に努めていきたい。また、全カリにおける「151～」のクラスの割合が 18.05%あり、全学の割合（7.88%）よりも多いことも影響していると思われたが、「151～」よりも「101～150」規模の方がスコアは低くなる傾向にあるので、履修人数だけの要因ではないようである。「151～」のうち 250 名以上のほとんどのクラスでは、TA がついているため、TA の有効性を示している結果かもしれない。

総合評価では、昨年度と同様に、授業のわかりやすさ、学問的興味の喚起、満足度において、上位に評価されていた。

履修グループ間の比較に関しては、下記 5、研究室ごとの総評に記述する。

学年間の比較では、昨年と同様に、全カリ特有の傾向はみられなかった。

２．担当教員からの所見票に対するまとめ

対象科目が膨大なため、下記 5、各研究室の総評に記述する。

３．学生からの意見（自由記述）の集約

2005 年度と同様に、「難しいテーマがわかりやすかった」「興味が持てた」「全カリでしか扱えないテーマでよかった」といった、専門学部では開講されていない科目開講への好意的な意見と、相反して、「内容が多すぎた」「専門的すぎた」「内容が浅すぎた」といった、全学部の学生を対象故の問題点を指摘する意見もあった。また、授業運営に対する指摘も賛否両論であることから、全カリ全体として集約して述べることは非常に困難である。しかし、本アンケート結果が、各担当者の授業改善への方向性を考える上で、大変貴重な資料になっていることは疑いがない。

４．今後の授業改善に向けた課題の提示

全カリ総合科目では、2006 年度にカリキュラム改革を行い、特に池袋キャンパスおいては、従来と比べて総合Ａを約 60 コマ減らし、スリムなカリキュラム編成としている。

このコマ数の減による全体的なクラスサイズの増加を抑制するために、web 登録対象科目の増加や履修上限単位数の減少などを実施したが、「教室の大きさ」と「受講者数の適正」の質問項目では、昨年度（旧カリキュラム）より評価を下げていることからも、授業環境の改善への対応としては、十分ではなかったものと思われる。さらに、大人数科目などに対する授業環境の改善が必要である。

また、履修規模による分析では、「151～」のクラスのカテゴリーをさらに分割して、「300～」や「500～」といった履修規模との比較や、web 登録方式の学生の反応を観察する上では、登録方法による比較も今後は必要であると考える。

５．各教育研究室からの総評

５－１　人文学教育研究室

人文学教育研究室が運営する『人間の探究』および『芸術・文化への招待』の 2 つのカテゴリーに関して、全体としては平均値に近く、妥当な評価と思われる。

大きく平均値から外れるのは、「テーマが現代的意味を持っていた」(III.3)と「最新の学問成果に触れた」(III.4)の 2 点である。両者とも『芸術・文化への招待』が最下位であり、『人間の探究』がそれに継ぐ。これは、両カテゴリーで扱う内容が古典中心であることに負うと考えられるが、本来、古典とは時代を超えて常に新たな意味を持つものである。現代の多様化した大学教育において古典の現代的意味を伝えること、さらには、この領域においても学問が常に進化していることを伝えることの責任を教員がより意識し、そのために従来以上の努力と創意工夫を重ねることが求められよう。

「教室の大きさ」および「受講者数が適切だった」の評価が『芸術・文化への招待』において目立って低いのは、このカテゴリーに大人数授業が多いことに起因すると考えられ、受講システムの改善が早急に求められる。

「映像視覚資料の効果的使用」の評価が『人間の探究』において低く、逆に『芸術・文化への招待』において高いのは、資料の使用頻度をそのまま反映していると考えられ、両カテゴリーの性格から当然の結果であろう。

５－２　社会科学教育研究室

社会科学教育研究室が運営するカテゴリー『社会への視点』について、まず授業態度に関する項目を比較したところ、出席率や積極的な参加、発展的学習、予習・復習と、ほとんどの項目において、他の科目群よりも低いという結果であった。これは近年の私語の増加などと合わせて、受講態度が相対的に低下していることを一端として示しているものと考えられる（ただし、得点の数値自体には例年に比べて大きな差はなかった）。

一方で、授業内容に関すると評価として、聞きやすい話し方や授業内容の量、板書の仕方、授業準備の周到さなどについての得点が低く、他の項目についても相対的には低いものが多く、また得点数値についても、昨年度に比べて低いものが多く見られた。内容自体が学生の持つ期待との乖離をやや生じていることが指摘される。この点に関しては、より学生が期待する内容について取り入れる機会を持つことが望まれる。

以上の傾向は、授業を受けた結果についても反映されており、「新しい考え方にふれた」、「わかりやすい授業だった」、「学問的興味をかきたてられた」、さらに「この授業を受けて満足した」という項目などにおいて相対的に見て評価が低く、それぞれの得点も低かった。

全体として、受講姿勢、授業内容、受講結果のうち、どの要因が評価に対して主要なものであるかについてはさらに分析が必要であると思われるが、それぞれが調和してはじめて一定の授業評価が得られると考えられるので、特に教員側としては授業準備などの対応がまず必要であろう。

例年、授業規模の大きさに合わせて問題となっていた静粛性については、回答者の規模にも関わらず、相対的には昨年ほど低くはなく、Web 登録などの効果が現われており、このように適切な対応が一定の効果をもたらす以上、学生側の責任はもちろんであるが、それだけに帰するのではなく、適切な対応をそれぞれに工夫することが必要であると考えられる。

５－３　自然科学教育研究室

自然科学教育研究室が運営するカテゴリー『自然の理解』の順位は、授業評価アンケート 24 項目中 1 位 15 項目、2 位 5 項目、3 位 3 項目、2 位 1 項目、5 位なし、というものであり、学生からは十分な評価を受けている。

ゆとり教育などの文部科学省の施政の結果、小・中・高等学校での算数・数学・理科の授業時間数が減少したことから学生の数学・理科の学力は低下しており、また立教などの私学ではその入試の制度などから、文系の多くの学生が中学と高校 1 年で数学や理科を学んで以来、この分野についてほとんど触れていないのが現状である。（実際に食塩の濃度のごく基本的な計算や、複数年度に関わる成長率の計算さえできない大学生が眼前に存在している現状は、大学全体の問題として真摯に受け止めなければならないことである。）

このような中で上に述べたような評価を得ていることは、理系の講義を受け持つ教員一人々々が、このような現状を意識してその中で苦しみながら、きわめて多くの労力を全カリに注ぎ込んだ結果であることは、強調しておかなければならない。

いろいろな授業観察してみればすぐに明らかなように、『講義の静粛性』は、「教員が授業の準備を十分にした上で、講義の狙いを明確にする」、「はっきりと話す」、「授業の内容に沿ってはっきりと板書をする、または映像教材を示す」などがどのようになされているかに極めて大きく依存する。理学部および全カリで講義を担当していただいている、理系の教員はこれらの点で「見本」となっていると言うことができる。

授業評価アンケートも 2007 年度で 4 年目を迎える。アンケートの結果は数年度を経て、データを見てみれば、明確な傾向を全カリのカテゴリーごと、学部ごと、担当教員一人ごと、科目ごとに持つことが良く分る。例えば同じ教員が同じ科目を担当したふたつの年度の結果を比較してみれば、それらはほとんど同じである。異なる点から見れば、単にアンケートを実施して担当教員や担当委員が総評を書くだけでは、年度ごとにほとんど同じデータに対して同じ総評を繰り返すことになり意味を持たない。

これらのアンケートのデータをもとに意図的に何かを変えようとするならば、そのデータの経年変化に対して不変なデータの傾向の底にある理由を見出すべき組織的に分析しなくてはならない。また、そのような分析の意欲があってこそ、分析に必要なアンケート項目というものが出てくるのではないだろうか。分析の結果としては、その分野では歴史的に当然のように設置されている科目が、内容量や難しさから変更した方が良いなどというような結論も、このようなアンケートの結果からは導き出されて当然であると思う。

「大学教育開発・支援センター」には、授業評価アンケートの有効な利用、適正な利用のためにも、より積極的総合的な分析を是非とも期待したい。

授業評価アンケートは、2006 年度までは 1 教員 1 科目の原則のもとで実施された。これは教員にとっても平等な実施の方法であり、またアンケートを記述する学生の負担を考えてもぎりぎり許される実施量であった思う。今年度からこの原則に沿わない方法が許されるようであるが、これは極めて危険な傾向である。大規模な講義や小規模な講義、兼任講師の方の担当される講義など特殊な環境にある科目にアンケートが集中したり、アンケートと無関係な教員が現れたり、一人で多くのアンケート科目を担当するような教員が出現することは、アンケートの結果がある意図を持って利用される恐れ高く、厳に戒めを持って避けなければならない。そのような実施の方法は、授業評価アンケートの結果の使用の目的を際限のないものとすることに直結する。そのためにも、faculty development のために有効に利用できる結論を導くために、アンケートの結果をより深く分析することが、授業評価アンケートの本来の目的を見失わずに継続するために是非とも必要であると考える。

小さなことであるが、アンケートに直接的に設問されている「シラバス」についてコメントしたい。「シラバスは受講に役に立った」という質問項目に対する回答の平均値は 3.28 であり、全体の中でも低い方である。現在のように厚くなってしまったシラバスが本当に必要なのか、学生に役に立っているのか、前年度の後期の講義が終了しない内に書く翌年度の後期のシラバスとはいったい何を意味するのか、などはこれらのアンケートを見ても早急に議論をして対応すべきこと、対応できることであると思う。関連部署には早急な考慮をお願いしたい。faculty development として大切なことである。

５－４　情報科学教育研究室

『情報』*のアンケート集計結果の授業の進め方において「映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった」と「教員は授業の準備を周到に行っていた」の２点および、授業内容として「テーマが現代的な意味をもっていた」という点に関しては、「そう思う」という肯定的な回答が昨年に引き続いて出ている。しかし、授業の内容として「新しい考え方・発想にふれた」、「基本的知識が得られた」、総合的判断として「わかりやすい授業だった」、「授業全体の目標が明確だった」、「最新の学問的成果に触れた」などの多数の項目に関しては、「どちらとも言えない」～「そう思う」の中間の回答となっており、「学問的興味がかきたてられた」の項目では「どちらとも言えない」という回答になっている。一方、授業への学生の取り組み方に関しては、「授業全体を通じての出席率」については、8 割程度以上出席しているが、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」については、あまりそうは思わないという否定的結果であり、「授業の予習復習に充てた時間」については、ほぼゼロ時間という回答であったのはさびしい。

アンケート対象となった『情報』科目群は、昨年度までの「情報」でなく、今年度から「総合 A」内グループの科目群として組み替えられている。（高校ではすでに教科「情報」が必修になっていることもあり、）一般教室の『情報』科目群の授業において、学生諸君の関心が、実用面だけでなく、学問として広い意味での「情報学」にも向くように取り組んでゆくことが今後の課題の１つである。

*ここでの『情報』とは、カテゴリー『社会への視点』『自然の理解』において開講されている情報関連の講義科目について述べている。

５－５　スポーツ人間科学教育研究室

スポーツ人間科学教育研究室が運営する『心身への着目』のカテゴリーであるが、2005 年度と同様に全般的な評価として他のカテゴリーよりも高い評価であったことは教員の努力によるものであろう。『心身への着目』は、他のカテゴリーに比べて相対的に得点が高かったが、Web 登録科目が増えたことによって、大人数科目が幾分解消されてはいるものの、依然として本研究室が担当する科目は受講学生が多い傾向にある。それにもかかわらず「授業全体を通じての出席率」、「この授業に積極的に参加した」、「わかりやすい授業だった」、「各回の授業のねらいは明確だった」など多くの質問について高い値を示していることは評価されてもいいのではないだろうか。しかし、細かくみていくと「十分な静粛性が保たれた」、「この授業の受講者数は適切だった」などの項目で低い評価となっていた。このことについては規模別に集計したデータからも大規模授業では静粛性が保たれにくく、全体的な評価も低いことが指摘されており、このカテゴリーの授業について Web 登録によって引き続き授業規模を抑えることを要望したい。その他にも授業以外での勉強について、つまり予習、復習などの課題提供は検討する必要があるだろう。

2006 年度項目別平均値および 2005 年度との比較（全学共通カリキュラム）

項　目		2006			2005			有意水準
		度数	平均値	SD	度数	平均値	SD	
Ⅰ	この授業へのあなたの取り組み方について…							
Ⅰ1	授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	17,695	4.53	0.77	16,047	4.48	0.81	**
Ⅰ2	この授業に積極的に参加した	17,700	3.66	1.05	16,052	3.61	1.10	**
Ⅰ3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	17,668	2.74	1.06	16,032	2.65	1.07	**
Ⅰ4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	17,644	2.76	1.13	16,020	2.69	1.15	**
Ⅰ5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	17,592	3.28	1.11	15,957	3.31	1.11	
Ⅰ6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5：3 時間以上、4：2-3 時間、3：1-2 時間、2：1 時間未満、1：0 時間）	17,644	1.52	0.88	16,020	1.45	0.82	**
Ⅱ	この授業の進め方は…							
Ⅱ1	聞きやすい話し方だった	17,699	3.77	1.12	16,047	3.80	1.11	*
Ⅱ2	各回の授業内容の量が適切だった	17,685	3.77	1.02	16,041	3.84	0.97	**
Ⅱ3	各回の授業のねらいは明確だった	17,676	3.74	1.04	16,026	3.81	1.01	**
Ⅱ4	各回の授業内容は明確だった	17,663	3.75	1.04	16,011	3.82	1.00	**
Ⅱ5	十分な静粛性が保たれた	17,630	3.37	1.27	16,002	3.50	1.23	**
Ⅱ6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	17,601	3.53	1.13	15,994	3.58	1.10	**
Ⅱ7	板書のしかたが適切だった	17,469	3.08	1.11	15,944	3.10	1.12	*
Ⅱ8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	17,551	3.64	1.22	15,931	3.58	1.25	**
Ⅱ9	教員は授業の準備を周到に行っていた	17,606	4.02	0.95	16,000	4.05	0.91	**
Ⅲ	この授業の内容は…							
Ⅲ1	新しい考え方・発想に触れた	17,678	3.90	0.99	16,021	3.89	1.00	
Ⅲ2	基本的知識が得られた	17,673	3.80	0.98	16,023	3.83	0.97	*
Ⅲ3	テーマが現代的な意味を持っていた	17,662	3.85	1.05	16,015	3.89	1.04	**
Ⅲ4	最新の学問成果に触れた	17,642	3.45	1.04	15,985	3.40	1.04	**
Ⅳ	総合的にみて、この授業は…							
Ⅳ1	わかりやすい授業だった	17,671	3.69	1.11	16,023	3.75	1.09	**
Ⅳ2	授業全体の目標が明確だった	17,666	3.69	1.05	16,011	3.75	1.02	**
Ⅳ3	学問的興味をかきたてられた	17,664	3.57	1.13	16,010	3.54	1.13	*
Ⅳ4	この授業を受けて満足した	17,656	3.65	1.13	16,011	3.66	1.12	
Ⅴ	学部等による設問							
Ⅴ1	この授業の教室の大きさは適切だった	16,536	3.92	1.17	14,707	4.05	1.08	**
Ⅴ2	この授業の受講者数は適切だった	16,437	3.67	1.21	14,601	3.79	1.13	**

注）　平均値は、最小値＝1、最大値＝5 の 5 選択肢の平均。　SD＝標準偏差。
有意水準：*は p<.05、**は p<.01。無印の場合、二つの年度の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

５－１１　学校・社会教育講座

１．集計データから見られる結果のまとめ

2005 年度のデータと比較して、Ⅱ5「十分な静粛性が保たれた」（4.16）を除き、すべての項目での評価が有意に上昇した。ただし、Ⅱ5 の項目でも５点満点であることを考えると頭打ちの数値であると考えられる。

また全学的な得点の頭打ち傾向と比較したとき、学校・社会教育講座の評価が１項目を除いてすべての項目の評価が上昇したことは、特筆すべき点である。

ほとんどの項目において、絶対的評価の水準は高く、おおむね目標達成していると考えられるが、Ⅰ6「授業の予習復習等に毎週あてた時間」（1.7、ちなみに 2：1 時間未満、1：0 時間）だけが絶対的評価が 3 点以下であり、学生に講義時間内での学習を促進するための課題の提出などの必要性が求められるだろう。

他学部の数値の比較では、Ⅳ総合評価の 4 項目において、すべて、最高得点を得ており、全学の中でも、トップ水準の授業満足度を得ている。

２．担当教員からの所見票に対するまとめ

２?１　「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

ほとんどの教員が学生の評価を正面から受け止めており、学生の評価を正当なものとしている。しかしながら限られたコマ数のなかで、「基礎的知識」に関する授業と、「最新の学問成果」あるいは「現代的意味」との間のジレンマに悩む教員もいる。この点は、上記アンケートにおける「授業内容の明確さ」・「授業内容量」などの問題と関連する点である。また「履修準備」をせず、さらに「予習・復習」をしない学生が多い点について、それを問題とする教員が多く見られるが、少数ではあるが、しっかりと講義を聴講すれば十分であるという教員もいる。また問題となる点の多くは受講生の多さからくる問題であり、「うしろの席の学生は授業に集中しているとは言いがたい」・「大教室で・・ホワイトボードで見づらいこと」といった記載もある。

２?２　「自由記述欄に対する担当教員の所見」のまとめ

学生の意見に対して、おおむね肯定的な所見を示しており、それらの意見を真摯に受け止めている。いる。しかしながら一部には「教員批判をする一方で高い自己評価をし、自己中心的な記述がある」あるいは「遅刻などのため講義の一部分のみを聞いて判断された」とする所見も存在する。また「自由記述欄への記入が少ない」ことへの不満を表明する記載もあった。

２?３　「改善に向けた今後の方針」のまとめ

それぞれのマイナス評価に対しては、その改善に向けて何らかの改善策を指向する意見が記載されている。特に「授業準備」・「予習・復習」に関する改善策についての記載が多く見られた。ただし大学への要望として、少人数クラスの要求が挙げられる。また一件であるが、映像視覚教材を充実されるために兼任講師に対しても「教材研究費」の支出を要望する意見が有った。

３．学生からの意見（自由記述）の集約

３?１　「肯定的評価として多い意見の集約」

前年度と同様、肯定的評価の多くは、「分かりやすい」、「興味・関心が持てた」、「今後、考えていきたい課題となった」といった意見である。

３?２　「否定的評価として多い意見の集約」

多くは上記の反対の評価であり、話が「分かりにくい」、あるいは板書の「字が読みにくい」、「板書が取りにくい」、「配布資料が分かりにくい」といった内容である。また少数ではあるが、講義においては、概説書などに書かれていない内容を展開して欲しいというような記述もあった。

４．今後の授業改善に向けた課題の提示

こうした授業評価アンケートを行うことにより、教員による授業改善が次第に進んでいると考える。視聴覚教材の利用、リアクションペーパーの採用などにより、学生にとっては理解しやすく、興味・関心を引く授業が増えている事はたしかであろう。また教員にとっては、こうしたアンケートにより学生の要求が如何なるところに在るかが分かり、またその授業内容の改善にもつながる訳である。

しかしながら「丁寧な授業を心がけたい」としながらも、一方では「話や板書の聴き取り、書き取りは、各自が工夫する事」それが「社会に出てから必要になる」との意見もある。同感できる部分である。分かりやすい授業は大切であるが、一方では、それ以前の問題がその背後に存在するようである。それは近年の学生の間に、時に見られることであるが、理解力、コミュニケーション能力、あるいはプレゼンテーション能力といってものが非常に低い学生が認められる点である。こうした問題は、「授業改善」以前の問題であり、こうした学生を対象としての何らかの授業、あるいは何らかの形での指導が必要ではないかと考える。

最後では有るが、以前程には兼任講師の先生の間において、こうしたアンケート調査に対する拒否反応を示すような記述が少なくなってきていると言えよう。アンケート調査が恒例化、あるいは多くの大学で一般化したためでもあろう。しかしながらアンケート項目についての疑問を記述した教員もいる。すなわち授業形式が講義形式かゼミ形式か、あるいは基礎的科目か、専門的科目といった点で、当然そのアンケート項目は異なってくるであろうし、そうした点を無視した形での一律のアンケート調査に対する疑問である。今後続けるにしても、特に兼任講師の方々に対しては、何らかの対応・説明が必要と考える。

2006 年度項目別平均値および 2005 年度との比較（学校・社会教育講座）

	項　目	2006			2005			有意
		度数	平均値	SD	度数	平均値	SD	水準
Ⅰ	この授業へのあなたの取り組み方について…							
Ⅰ1	授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	3,009	4.69	0.56	2,717	4.62	0.63	**
Ⅰ2	この授業に積極的に参加した	3,008	3.91	0.97	2,718	3.82	1.00	**
Ⅰ3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3,005	3.08	1.05	2,715	2.91	1.04	**
Ⅰ4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,998	3.05	1.12	2,716	2.96	1.13	**
Ⅰ5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	2,986	3.38	1.07	2,703	3.24	1.07	**
Ⅰ6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5：3 時間以上、4：2-3 時間、3：1-2 時間、2：1 時間未満、1：0 時間）	3,002	1.70	0.94	2,712	1.64	0.89	*
Ⅱ	この授業の進め方は…							
Ⅱ1	聞きやすい話し方だった	3,008	4.14	0.96	2,717	3.98	1.05	**
Ⅱ2	各回の授業内容の量が適切だった	3,008	4.06	0.94	2,719	3.91	0.96	**
Ⅱ3	各回の授業のねらいは明確だった	3,006	4.04	0.95	2,718	3.90	1.02	**
Ⅱ4	各回の授業内容は明確だった	3,002	4.07	0.94	2,715	3.92	1.01	**
Ⅱ5	十分な静粛性が保たれた	3,005	4.16	0.93	2,716	4.15	0.92	
Ⅱ6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3,004	3.96	0.94	2,713	3.79	0.99	**
Ⅱ7	板書のしかたが適切だった	2,995	3.43	1.11	2,710	3.25	1.12	**
Ⅱ8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	2,985	3.73	1.15	2,687	3.43	1.28	**
Ⅱ9	教員は授業の準備を周到に行っていた	3,004	4.25	0.85	2,713	4.13	0.88	**
Ⅲ	この授業の内容は…							
Ⅲ1	新しい考え方・発想に触れた	3,005	4.00	0.96	2,717	3.90	0.98	**
Ⅲ2	基本的知識が得られた	3,004	4.08	0.87	2,717	3.96	0.92	**
Ⅲ3	テーマが現代的な意味を持っていた	3,004	4.07	0.93	2,715	3.96	0.96	**
Ⅲ4	最新の学問成果に触れた	3,001	3.54	1.01	2,711	3.37	1.03	**
Ⅳ	総合的にみて、この授業は…							
Ⅳ1	わかりやすい授業だった	3,006	4.06	0.99	2,716	3.86	1.09	**
Ⅳ2	授業全体の目標が明確だった	3,005	4.00	0.98	2,716	3.86	1.02	**
Ⅳ3	学問的興味をかきたてられた	3,003	3.71	1.09	2,716	3.56	1.11	**
Ⅳ4	この授業を受けて満足した	3,000	3.93	1.04	2,714	3.76	1.09	**

注）平均値は、最小値＝1、最大値＝5 の 5 選択肢の平均。　SD＝標準偏差。
有意水準：*は p<.05、**は p<.01。無印の場合、二つの年度の平均値には、統計的に有意差がないことを示す。

６．「Ⅱ5『十分な静粛性が保たれた』」に関する詳細分析

2006年度と2004年度の授業評価アンケートの結果を比較すると、全学の集計データにおいては、23のアンケート設問項目中の22項目で平均値が上昇しており、ほとんどの項目で授業の改善がみられたといえる（表6、資料編p.88）。しかし、設問「Ⅱ5　十分な静粛性が保たれた」においては、2006年度の平均値が有意に低下し、授業の静粛性に関して課題があることが明らかになった（p.17参照）。このことから、設問Ⅱ5に関してより詳細な分析を行うべきであると判断し、分析結果をここにまとめた。

この項目の分析は、2005年度の授業評価アンケートについても実施された。それは、2006年10月に人権・ハラスメント対策センターから提言「授業中の私語について」が行われたことに端を発した。その提言を受け部長会は授業中の私語に関する協議を行い、総長は大学教育開発・支援センターに、授業中の私語に関する現状の調査を依頼した。

大学教育開発・支援センターは、「『授業中の私語』に関する本学の現状（報告）」を部長会に報告（2007年2月1日）し、同報告は総長から全教職員に電子メールで配布された（2007年2月7日全学一斉メール）。同報告の調査資料の一部として、2005年度に実施した授業評価アンケートの「Ⅱ5　十分な静粛性が保たれた」に関して分析を行った。

このように、本分析は、部長会で全学的な検討が行われている授業中の私語を改善するための有用な基礎的資料を得るという目的もある。

分析は、「授業規模」、「学部等」、「学年」により平均値にどのような差異があるかという視点で行った。授業規模は、回答者数によって、50 名以下、51～100 名、101～150 名、151 名以上の 4 群に分けた。

2006 年度の分析では、2005 年度の分析と同様に、全学部を通じて、静粛性と授業規模に強い関連があり、授業規模が大きいほど平均値が低いことが示された。これは、同じ教員が担当しても、授業規模が大きくなると静粛性を保つことが困難になることを示している。教員の授業技術の向上も当然必要であるが、それ以上に、静粛性を保つためには、授業規模を小さくすることが重要である点を全学的に認識する必要がある。

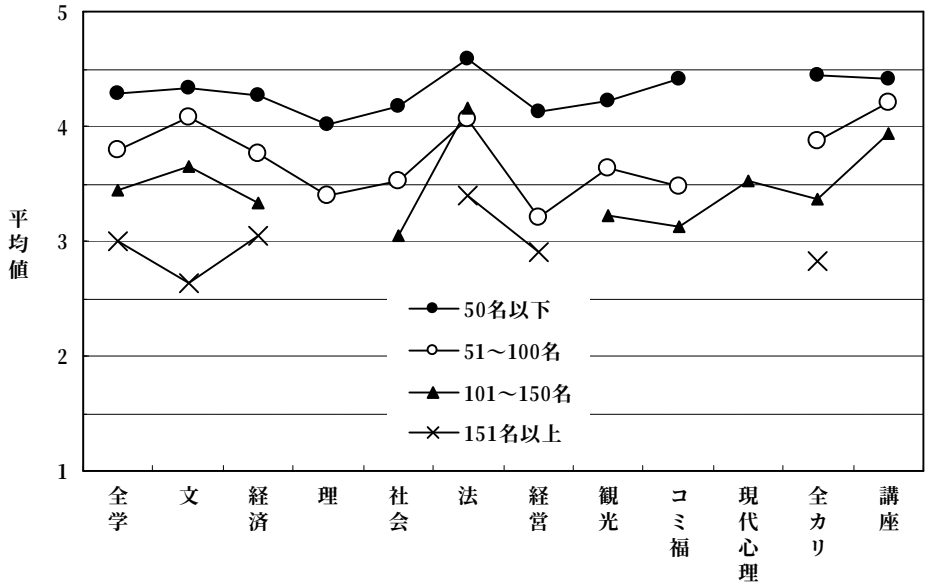
１）授業規模による差

授業規模の視点から結果をまとめた（図表5～7）。なお、授業数が4以下の場合は、授業の個性の影響が強いと判断して、分析の対象にしなかった（図表6、7の該当する平均値および授業数には印をつけて表示し、図表5にはプロットしていない）。

全学に関して、授業の規模が大きいほど平均値が低いことが明らかとなった。学部等別に見ても、ほぼ同様の傾向が明らかとなった。

授業規模による平均値の差という観点から見ると、文学部が一番大きく（2.64～4.33）、次に全学共通カリキュラム（2.83～4.44）となっている。法学部は、全体的に平均値が高く、授業規模が大きくなっても平均値が高いという特徴があった。このように、学部等による違いがあることが示された。

図表５　授業規模別の平均値



注）該当授業数が4以下の場合は図示していない。

図表６　授業規模別の平均値

授業規模	全学	学部等										
		文	経済	理	社会	法	経営	観光	コミ福	現代心理	全カリ	講座
50 名以下	4.28	4.33	4.27	4.01	4.18	4.58	4.12	4.23	4.42	－	4.44	4.41
51～100 名	3.79	4.08	3.77	3.40	3.52	4.06	3.20	3.64	3.47	－	3.88	4.21
101～150 名	3.44	3.65	3.33	2.78	3.05	4.16	3.25	3.23	3.12	3.53	3.37	3.93
151 名以上	3.01	2.64	3.04	3.48	2.69	3.39	2.91	3.41	3.25	3.45	2.83	3.73
全体	3.61	3.88	3.53	3.79	3.57	3.81	3.12	3.66	3.57	3.52	3.37	4.16

注）該当授業がない場合は－、該当授業数が1の場合は網掛け、2～4の場合は線で囲った。
授業数が4以下の場合は、分析の対象としていない。

図表７　授業規模別の授業数

授業規模	全学	学部等										
		文	経済	理	社会	法	経営	観光	コミ福	現代心理	全カリ	講座
50 名以下	575	129	47	93	74	15	5	39	47	－	89	37
51～100 名	267	45	31	13	38	25	11	18	18	－	51	17
101～150 名	128	18	18	1	16	12	3	7	11	7	28	7
151 名以上	83	5	11	1	1	13	6	3	4	1	37	1
合計	1,053	197	107	108	129	65	25	67	80	8	205	62

注）該当授業がない場合は－、該当授業数が1の場合は網掛け、2～4の場合は線で囲った。
授業数が4以下の場合は、分析の対象としていない。

２）学部等間の差

学部等の平均値は、授業規模や学年構成などの回答者の構成によって影響を受けるので、限定的な解釈しかできないことを最初に断っておく。相対的に、経営学部（3.12）、全学共通カリキュラム（3.37）は平均値が低く、学校・社会教育講座（4.16）、文学部（3.88）、法学部（3.81）、理学部（3.79）は高い。文学部と理学部は授業規模が小さいという要因が、学校・社会教育講座は資格取得という勉学目的が明確であるという要因が考えられる。

３）学年間の差

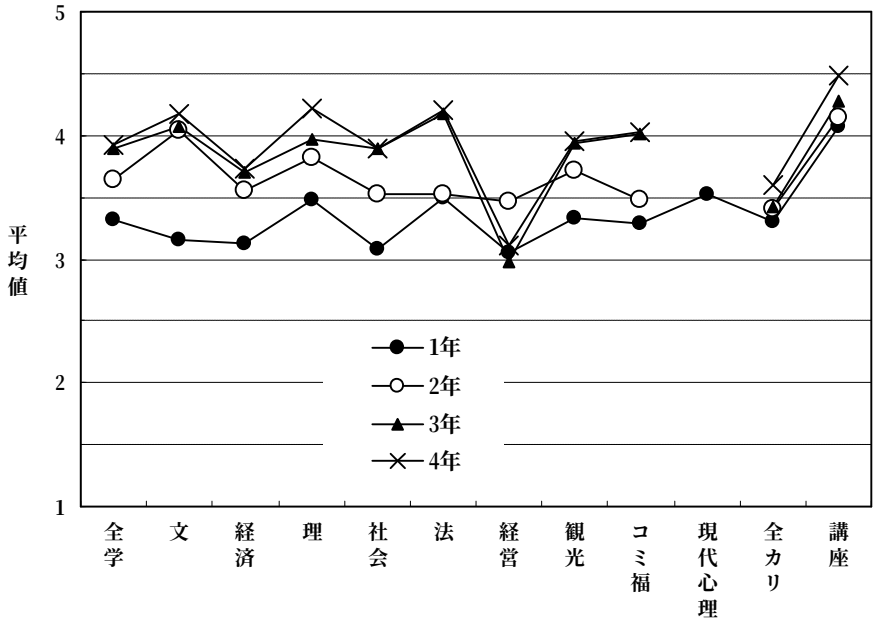
学年別の平均値を全学および学部等を横軸としてプロットした図表8としてまとめた。図表8のもとになる数値を図表9に、また学年別の回答者数を図表10にまとめた。

全学に関して、1年次から3年次までは学年の上昇に伴って平均値が顕著に上がったが、3年次から4年次では微増であった。学部等別に見ても同様の傾向であった。この学年間の平均値の違いは、大別して二つの理由で説明が可能であろう。一つは、学年によらず静粛性に関する評価基準は同じで、高学年になるに従ってより静かな授業に出席している。もう一つは、授業の静粛性は同じで、高学年になるに従って静粛性に関する評価基準が甘くなる。今回は、この二つの可能性を弁別する分析は行っていない。

新設学部の経営学部の場合は、1、3、4年次が2.98～3.05とほぼ同じであるという特殊な結果であったが、自学部の学生は1年次のみであり、2年次以上は全員他学部であるという特殊な条件であることに留意すべきであろう。

学年による平均値の上昇という観点からみると、文学部が3.15（1年次）～4.17（4年次）と1.0点以上であり、この上昇度合いは他学部等に比較して大きい（他学部等との有意差は検定していない）。

図表８　学年別の平均値



図表９　学年別の平均値

学年	全学	学部等										
		文	経済	理	社会	法	経営	観光	コミ福	現代心理	全カリ	講座
１年	3.32	3.15	3.13	3.47	3.08	3.50	3.05	3.33	3.29	3.52	3.30	4.07
２年	3.64	4.05	3.56	3.82	3.53	3.52	3.46	3.71	3.47		3.40	4.14
３年	3.89	4.07	3.70	3.97	3.89	4.17	2.98	3.93	4.01		3.42	4.28
４年	3.92	4.17	3.72	4.21	3.89	4.20	3.11	3.95	4.03		3.60	4.49
全体	3.61	3.88	3.53	3.79	3.57	3.81	3.12	3.66	3.57	3.52	3.37	4.16

注）現代心理の2年以上は回答数が1であったので除外した。

図表１０　学年別の回答者数

学年	全学	学部等										
		文	経済	理	社会	法	経営	観光	コミ福	現代心理	全カリ	講座
１年	23,224	1,906	1,497	1,081	1,659	1,717	1,785	1,252	1,559	1,067	8,504	1,197
２年	21,581	3,743	2,915	1,131	2,212	1,949	398	1,109	1,657	1	5,527	939
３年	14,833	2,610	2,162	903	2,095	2,268	202	1,062	865	1	2,052	613
４年	5,922	1,160	999	269	691	695	88	266	439	1	1,203	111
合計	65,560	9,419	7,573	3,384	6,657	6,629	2,473	3,689	4,520	1,070	17,286	2,860

注）表3（資料編p.86）の行と列を入れ替えて再録した。

４）他の項目との相関

項目間の相関係数は表21（資料編p.94）にまとめてある。「Ⅱ5　十分な静粛性が保たれた」との相関係数の最大値は、「Ⅱ4　各回の授業内容は明確だった」との0.363であり、項目ごとの相関係数の最大値としてはもっとも小さかった（表22、資料編p.95）。このことが端的に示すように、他の項目との相関は比較的弱いことが分かった。以下に相関係数が0.3以上の項目を、係数の降順で表示した。

.363　Ⅱ4　各回の授業内容は明確だった
.358　Ⅱ6　教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった
.344　Ⅱ3　各回の授業のねらいは明確だった
.342　Ⅳ2　授業全体の目標が明確だった
.330　Ⅳ4　この授業を受けて満足した
.327　Ⅱ2　各回の授業内容の量が適切だった
.321　Ⅱ1　聞きやすい話し方だった

.319　Ⅱ9　教員は授業の準備を周到に行っていた

.318　Ⅱ7　板書のしかたが適切だった

.314　Ⅳ1　わかりやすい授業だった

.302　Ⅲ2　基本的知識が得られた

７．集計データ（資料編）

本調査は、すべての科目ではなく、１教員１科目の原則で決定された科目について実施された。したがって、この集計データのを解釈する際に、全科目ではなく、上記の限定された科目に関するものであることを認識しておく必要がある。

調査実施において調査協力者の匿名性を守る必要性から、異なる科目に出席する同じ学生を一致させることができない。そこで、本分析において、度数あるいは人数として表記されている数値は、延べ人数である。

７－１　回答者に関する集計

表１　学内者・学外者の度数および割合（%）

	度数	割合
学内	66,988	99.25
学外	505	0.75
合計	67,493	100.00

表２　学年の度数および割合（%）

学年	度数	割合
１年	23,224	34.41
２年	21,581	31.98
３年	14,833	21.98
４年	5,922	8.77
不明	1,933	2.86
合計	67,493	100.00

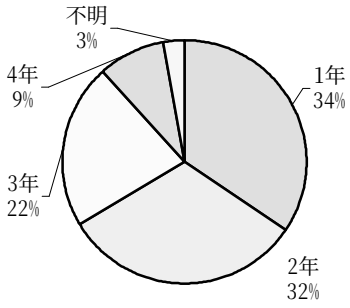


図１　学年の度数

表３　学部等別学年別の回答者数

科目開設学部等	１年	２年	３年	４年	合計
文	1,906	3,743	2,610	1,160	9,419
経済	1,497	2,915	2,162	999	7,573
理	1,081	1,131	903	269	3,384
社会	1,659	2,212	2,095	691	6,657
法	1,717	1,949	2,268	695	6,629
経営	1,785	398	202	88	2,473
観光	1,252	1,109	1,062	266	3,689
コミュニティ福祉	1,559	1,657	865	439	4,520
現代心理	1,067	1	1	1	1,070
全カリ	8,504	5,527	2,052	1,203	17,286
講座	1,197	939	613	111	2,860
合計	23,224	21,581	14,833	5,922	65,560

注）アンケートに答えた延べ人数（総数）は 67,493 人であるが、学年の記載がないなどの理由により、この表の合計はそれより少ない数値になっている。

表４　学部別回答者数に占める自学部学生比率（%）

科目開設学部	学生所属			
	自学部	他学部	合計	自学部学生比率(%)
文	8,943	406	9,349	95.7
経済	7,244	154	7,398	97.9
理	3,380	20	3,400	99.4
社会	6,313	283	6,596	95.7
法	6,489	94	6,583	98.6
経営	1,761	694	2,455	71.7
観光	2,995	630	3,625	82.6
コミュニティ福祉	4,268	164	4,432	96.3
現代心理	1,041	8	1,049	99.2

注）所属学部の記載がないなどの理由により、この表の数値は、表３の数値よりも少なくなっている。

表５　学部等別の回答者数、履修者数、および回答率（%）

科目開設学部等	2006 年度			2005 年度		
	履修者数	回答者数	回答/履修(%)	履修者数	回答者数	回答/履修(%)
文	17,357	9,740	56.12	16,863	9,154	54.28
経済	20,656	7,786	37.69	22,958	7,653	33.33
理	6,446	3,502	54.33	5,936	2,882	48.55
社会	15,400	6,858	44.53	15,633	6,383	40.83
法	20,413	6,787	33.25	21,049	6,977	33.15
経営	4,269	2,553	59.80	2006 年度新設学部		
観光	7,406	3,777	51.00	7,937	3,761	47.39
コミュニティ福祉	8,427	4,617	54.79	7,698	3,974	51.62
現代心理	1,527	1,096	71.77	2006 年度新設学部		
全カリ	38,025	17,766	46.72	35,139	16,104	45.83
講座	4,100	3,011	73.44	3,808	2,722	71.48
合計	144,116	67,493	46.86	137,021	59,610	43.50

注）回答者は、アンケート実施時に出席し、アンケートに回答した学生のことである。授業へは出席していたが、アンケートには回答しなかった学生も存在する可能性がある。したがって、回答者数の履修者数への比率は、出席率よりも低い数値になる可能性があることを指摘しておく。

７－２　項目内容と項目別平均値（全学）

表６　2004～2006 年度の項目別平均値とその変化（全学）

	項　　目	2004	変化 04→05	2005	変化 05→06	2006	変化 04→06
Ⅰ	この授業へのあなたの取り組み方について…						
Ⅰ1	授業全体を通じての出席率（5:90％以上、4:70-89％、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	4.37	?	4.41	?	4.49	?
Ⅰ2	この授業に積極的に参加した	3.58	?	3.60	?	3.67	?
Ⅰ3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2.65	?	2.72	?	2.80	?
Ⅰ4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2.72	?	2.81	?	2.85	?
Ⅰ5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	3.18	?	3.22	?	3.24	?
Ⅰ6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5：3 時間以上、4：2-3 時間、3：1-2 時間、2：1 時間未満、1：0 時間）	1.56	?	1.61	?	1.67	?
Ⅱ	この授業の進め方は…						
Ⅱ1	聞きやすい話し方だった	3.68	?	3.70	?	3.72	?
Ⅱ2	各回の授業内容の量が適切だった	3.72	?	3.77	**?**	3.74	?
Ⅱ3	各回の授業のねらいは明確だった	3.71	?	3.76	**?**	3.73	?
Ⅱ4	各回の授業内容は明確だった	3.73	?	3.77	**?**	3.75	?
Ⅱ5	十分な静粛性が保たれた	3.68	＝	3.68	**?**	3.61	**?**
Ⅱ6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3.55	?	3.61	＝	3.60	?
Ⅱ7	板書のしかたが適切だった	3.04	?	3.10	?	3.12	?
Ⅱ8	映像視覚教材（ビデオ、OHP、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	3.29	?	3.39	?	3.46	?
Ⅱ9	教員は授業の準備を周到に行っていた	3.98	?	4.01	＝	4.01	?
Ⅲ	この授業の内容は…						
Ⅲ1	新しい考え方・発想に触れた	3.74	?	3.81	?	3.82	?
Ⅲ2	基本的知識が得られた	3.80	?	3.83	＝	3.83	?
Ⅲ3	テーマが現代的な意味を持っていた	3.81	?	3.83	＝	3.83	?
Ⅲ4	最新の学問成果に触れた	3.35	?	3.40	?	3.43	?
Ⅳ	総合的にみて、この授業は…						
Ⅳ1	わかりやすい授業だった	3.61	?	3.65	＝	3.65	?
Ⅳ2	授業全体の目標が明確だった	3.65	?	3.71	**?**	3.69	?
Ⅳ3	学問的興味をかきたてられた	3.45	?	3.51	?	3.54	?
Ⅳ4	この授業を受けて満足した	3.56	?	3.62	＝	3.63	?

注）統計的有意に増加（?）、有意に減少（?）、有意差がない（＝）。強調するために? および＝を太字とした。

表７　2004～2006 年度項目別平均値（全学）

	項目	2006			2005			2004		
		度数	平均値	SD	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD
Ⅰ	この授業へのあなたの取り組み方について…									
Ⅰ1	授業全体を通じての出席率（5:90％以上，4:70-89％，3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	67,250	4.49	0.80	59,467	4.41	0.85	60,495	4.37	0.90
Ⅰ2	この授業に積極的に参加した	67,274	3.67	1.05	59,476	3.60	1.07	60,501	3.58	1.09
Ⅰ3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	67,205	2.80	1.06	59,407	2.72	1.06	60,449	2.65	1.04
Ⅰ4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	67,105	2.85	1.12	59,359	2.81	1.13	60,375	2.72	1.11
Ⅰ5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	66,898	3.24	1.09	59,152	3.22	1.08	60,190	3.18	1.08
Ⅰ6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5：3 時間以上，4：2-3 時間，3：1-2 時間，2：1 時間未満，1：0 時間）	67,106	1.67	0.95	59,361	1.61	0.89	60,388	1.56	0.84
Ⅱ	この授業の進め方は…									
Ⅱ1	聞きやすい話し方だった	67,257	3.72	1.14	59,460	3.70	1.15	60,498	3.68	1.16
Ⅱ2	各回の授業内容の量が適切だった	67,212	3.74	1.03	59,438	3.77	1.01	60,448	3.72	1.02
Ⅱ3	各回の授業のねらいは明確だった	67,157	3.73	1.04	59,403	3.76	1.03	60,404	3.71	1.04
Ⅱ4	各回の授業内容は明確だった	67,079	3.75	1.04	59,324	3.77	1.03	60,335	3.73	1.05
Ⅱ5	十分な静粛性が保たれた	67,017	3.61	1.21	59,327	3.68	1.18	60,342	3.68	1.20
Ⅱ6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	66,961	3.60	1.10	59,277	3.61	1.09	60,296	3.55	1.12
Ⅱ7	板書のしかたが適切だった	66,659	3.12	1.12	59,094	3.10	1.13	60,061	3.04	1.13
Ⅱ8	映像視覚教材（ビデオ，OHP，パワーポイントなど）の使用が効果的だった	66,512	3.46	1.23	58,824	3.39	1.26	59,776	3.29	1.29
Ⅱ9	教員は授業の準備を周到に行っていた	66,967	4.01	0.95	59,243	4.01	0.93	60,261	3.98	0.94
Ⅲ	この授業の内容は…									
Ⅲ1	新しい考え方・発想に触れた	67,174	3.82	1.00	59,389	3.81	1.01	60,424	3.74	1.02
Ⅲ2	基本的知識が得られた	67,162	3.83	0.97	59,387	3.83	0.97	60,422	3.80	0.98
Ⅲ3	テーマが現代的な意味を持っていた	67,119	3.83	1.03	59,351	3.83	1.04	60,385	3.81	1.04
Ⅲ4	最新の学問成果に触れた	67,029	3.43	1.03	59,258	3.40	1.04	60,319	3.35	1.04
Ⅳ	総合的にみて，この授業は…									
Ⅳ1	わかりやすい授業だった	67,152	3.65	1.14	59,370	3.65	1.13	60,409	3.61	1.15
Ⅳ2	授業全体の目標が明確だった	67,140	3.69	1.05	59,353	3.71	1.04	60,400	3.65	1.04
Ⅳ3	学問的興味をかきたてられた	67,118	3.54	1.13	59,353	3.51	1.13	60,395	3.45	1.14
Ⅳ4	この授業を受けて満足した	67,113	3.63	1.13	59,349	3.62	1.13	60,394	3.56	1.15

注）平均値は、最小値＝1、最大値＝5 の 5 選択肢の平均。　SD＝標準偏差。

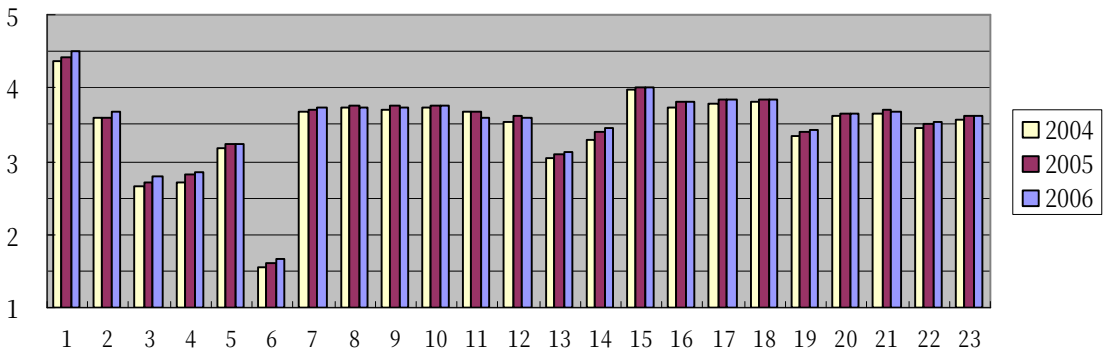


図２　各項目の平均値

表８～１１、１３～２０の読み方

- 各表の群（学部・授業規模・学年）は、平均値の低いものから昇順に並べた。
- 同じサブグループに平均値が示されている群どうしには、有意な差がなく、異なるサブグループにある群どうしには、有意な差がある。
- 差は相対的なものなので、群の並び順だけでなく、平均値が 3（選択肢としては「どちらともいえない」を超えているかどうかなどの数値の水準に関する検討も必要である。
- 分散分析および多重比較で用いた有意水準は、 P < .05 である。

【例１】

IV1 わかりやすい授業だった

学年	度数	互いに統計的に差の無いサブグループ			
		1	2	3	4
1	16,567	3.45			
2	20,328		3.59		
3	16,402			3.70	
4	5,280				3.92
	↑ *回答者数*	↑ *平均値*	↑ *平均値*	↑ *平均値*	↑ *平均値*

⇒この場合、どの学年の間にも統計的な差があり、学年があがるほど平均値が高いことが示されている。

【例２】

IV1 わかりやすい授業だった

授業規模	度数	互いに統計的に差の無いサブグループ		
		1	2	3
151 名以下	14,976	3.57		
51～100 名	17,797	3.58	3.58	
101～150 名	14,693		3.61	
50 名以下	12,943			3.72

⇒この場合、51～100 名規模の授業は、サブグループ１と２の両方に含まれている。
つまり 51～100 名規模の授業は、151 名以上規模の授業とも 101～150 名規模の授業とも差がないが、151 名以上規模の授業は 101～150 名規模の授業よりも平均値が有意に低いことが示されている。

７－３　「Ⅳ．総合評価」の平均値の学部間の比較

表８　Ⅳ1「わかりやすい授業だった」に関する、学部別の平均値と一要因の分散分析の結果

学部	度数	互いに統計的に差のないサブグループ						
		1	2	3	4	5	6	7
現代心理	1,092	3.08						
理	3,477		3.47					
観光	3,754		3.51	3.51				
経済	7,737		3.54	3.54	3.54			
法	6,743			3.58	3.58			
経営	2,543				3.60			
社会	6,823				3.62	3.62		
全カリ	17,671					3.69	3.69	
文	9,703						3.75	
コミ福	4,603						3.76	
講座	3,006							4.06

表９　Ⅳ2「授業全体の目標が明確だった」に関する、学部別の平均値と一要因の分散分析の結果

学部	度数	互いに統計的に差のないサブグループ					
		1	2	3	4	5	6
現代心理	1,091	3.20					
理	3,477		3.58				
経済	7,735		3.60	3.60			
観光	3,754		3.61	3.61			
経営	2,543		3.65	3.65	3.65		
法	6,735			3.67	3.67		
全カリ	17,666				3.69		
社会	6,826				3.69		
文	9,706					3.77	
コミ福	4,602					3.78	
講座	3,005						4.00

表１０　Ⅳ3「学問的興味をかきたてられた」に関する、学部別の平均値と一要因の分散分析の結果

学部	度数	互いに統計的に差のないサブグループ						
		1	2	3	4	5	6	7
現代心理	1,090	3.28						
経済	7,731		3.38					
理	3,474		3.40	3.40				
観光	3,756		3.44	3.44	3.44			
経営	2,539			3.47	3.47			
社会	6,823				3.50	3.50		
法	6,740				3.51	3.51		
全カリ	17,664					3.57	3.57	
コミ福	4,599						3.65	3.65
文	9,699							3.66
講座	3,003							3.71

表１１　Ⅳ4「この授業を受けて満足した」に関する、学部別の平均値と一要因の分散分析の結果

学部	度数	互いに統計的に差のないサブグループ						
		1	2	3	4	5	6	7
現代心理	1,090	3.26						
理	3,475		3.49					
経済	7,730		3.52	3.52				
経営	2,542		3.52	3.52	3.52			
観光	3,753		3.54	3.54	3.54			
法	6,741			3.58	3.58	3.58		
社会	6,822				3.60	3.60		
全カリ	17,656					3.65		
文	9,700						3.74	
コミ福	4,604						3.74	
講座	3,000							3.93

７－４　「Ⅳ．総合評価」の平均値の授業規模による比較

資料の読み方は、p.90 を参照のこと。

表１２　各群の科目数

授業規模	50 名以下	51～100 名	101～150 名	151 名以上	合計
科目数	575	267	128	83	1,053

表１３　Ⅳ1「わかりやすい授業だった」に関する、授業規模別の平均値と一要因の分散分析の結果

授業規模	度数	互いに統計的に差のないサブグループ		
		1	2	3
101～150 名	15,639	3.60		
151 名以上	17,932	3.61		
51～100 名	18,891		3.65	
50 名以下	14,690			3.75

表１４　Ⅳ2「授業全体の目標が明確だった」に関する、授業規模別の平均値と一要因の分散分析の結果

授業規模	度数	互いに統計的に差のないサブグループ		
		1	2	3
151 名以上	17,927	3.61		
101～150 名	15,640	3.64		
51～100 名	18,882		3.71	
50 名以下	14,691			3.81

表１５　Ⅳ3「学問的興味をかきたてられた」に関する、授業規模別の平均値と一要因の分散分析の結果

授業規模	度数	互いに統計的に差のないサブグループ		
		1	2	3
151 名以上	17,921	3.48		
101～150 名	15,628	3.49		
51～100 名	18,882		3.53	
50 名以下	14,687			3.67

表１６　Ⅳ4「この授業を受けて満足した」に関する、授業規模別の平均値と一要因の分散分析の結果

授業規模	度数	互いに統計的に差のないサブグループ			
		1	2	3	4
151 名以上	17,919	3.54			
101～150 名	15,630		3.58		
51～100 名	18,881			3.64	
50 名以下	14,683				3.77

７－５　「Ⅳ．総合評価」の平均値の学年間の比較

資料の読み方は、p.90 を参照のこと。

表１７　Ⅳ1「わかりやすい授業だった」に関する、学年別の平均値と一要因の分散分析の結果

学年	度数	互いに統計的に差のないサブグループ			
		1	2	3	4
1	23,138	3.48			
2	21,477		3.67		
3	14,777			3.77	
4	5,908				3.93

表１８　Ⅳ2「授業全体の目標が明確だった」に関する、学年別の平均値と一要因の分散分析の結果

学年	度数	互いに統計的に差のないサブグループ			
		1	2	3	4
1	23,128	3.51			
2	21,479		3.71		
3	14,774			3.83	
4	5,907				3.95

表１９　Ⅳ3「学問的興味をかきたてられた」に関する、学年別の平均値と一要因の分散分析の結果

学年	度数	互いに統計的に差のないサブグループ			
		1	2	3	4
1	23,118	3.41			
2	21,475		3.53		
3	14,773			3.64	
4	5,907				3.80

表２０　Ⅳ4「この授業を受けて満足した」に関する、学年別の平均値と一要因の分散分析の結果

学年	度数	互いに統計的に差のないサブグループ			
		1	2	3	4
1	23,116	3.45			
2	21,477		3.64		
3	14,771			3.76	
4	5,906				3.92

７－６　項目間の相関

資料の読み方

- 各項目どうしが、どの程度関連しているか、その関連の強さが示されている。
- 行と列の項目番号をみて、知りたい項目どうしがまじわるところの数字が、関連の強さを示す相関係数である。
- 数字の絶対値が大きいほど、関連は強く、数値がマイナスである場合は、どちらかが高い値であるほど、もう一方は低い値である傾向を示す。
- 一般的に、相関係数の絶対値によって、「0.20～0.40 は弱い相関」、「0.40～0.70 は比較的強い相関」、「0.70～1.00 は強い相関」と表現されている。本資料では、資料を読み取りやすくするため、便宜的に、絶対値 0.4 以上を太字で、0.6 以上を網掛けで表記した。
- 無相関の検定は、有意水準 p<.01 で行ったが、無相関はなく、すべての組み合わせで相関があった。
- なお、本分析に用いたデータの度数は、Ⅰ1～Ⅳ4 までのすべての項目に回答した 56,842 である。

表２１　項目間相関係数

		Ⅰ1	Ⅰ2	Ⅰ3	Ⅰ4	Ⅰ5	Ⅰ6	Ⅱ1	Ⅱ2	Ⅱ3	Ⅱ4	Ⅱ5	Ⅱ6	Ⅱ7	Ⅱ8	Ⅱ9	Ⅲ1	Ⅲ2	Ⅲ3	Ⅲ4	Ⅳ1	Ⅳ2	Ⅳ3	Ⅳ4
Ⅰ. 授業への準備状況・参加態度	Ⅰ1	—																						
	Ⅰ2	.411	—																					
	Ⅰ3	.194	.511	—																				
	Ⅰ4	.135	.461	.625	—																			
	Ⅰ5	.109	.341	.389	.445	—																		
	Ⅰ6	.047	.245	.406	.433	.227	—																	
Ⅱ. 教員の授業の進め方	Ⅱ1	.094	.354	.264	.318	.399	.122	—																
	Ⅱ2	.089	.332	.261	.309	.408	.103	.624	—															
	Ⅱ3	.099	.396	.301	.369	.440	.144	.623	.677	—														
	Ⅱ4	.093	.403	.308	.373	.444	.143	.642	.664	.838	—													
	Ⅱ5	.020	.192	.182	.220	.249	.129	.321	.327	.344	.363	—												
	Ⅱ6	.085	.306	.266	.330	.407	.155	.484	.503	.552	.574	.358	—											
	Ⅱ7	.054	.300	.310	.341	.373	.219	.509	.485	.513	.531	.318	.541	—										
	Ⅱ8	.089	.245	.208	.257	.315	.097	.374	.392	.418	.427	.155	.471	.408	—									
	Ⅱ9	.112	.324	.210	.277	.379	.079	.548	.541	.595	.606	.319	.550	.483	.514	—								
Ⅲ. 授業内容	Ⅲ1	.139	.401	.281	.391	.401	.150	.501	.493	.549	.552	.288	.462	.413	.392	.547	—							
	Ⅲ2	.140	.422	.327	.405	.424	.160	.520	.526	.612	.628	.302	.507	.457	.372	.549	.649	—						
	Ⅲ3	.102	.343	.257	.348	.366	.112	.450	.459	.529	.530	.243	.434	.376	.400	.501	.622	.615	—					
	Ⅲ4	.093	.359	.322	.411	.393	.189	.436	.438	.511	.513	.259	.447	.433	.402	.479	.626	.585	.696	—				
Ⅳ. 授業の総合評価	Ⅳ1	.082	.419	.332	.397	.447	.145	.706	.634	.697	.736	.314	.560	.565	.440	.589	.580	.648	.549	.551	—			
	Ⅳ2	.096	.410	.324	.400	.460	.162	.622	.609	.768	.759	.342	.566	.537	.433	.609	.591	.655	.566	.569	.784	—		
	Ⅳ3	.092	.444	.375	.498	.447	.210	.543	.535	.608	.624	.295	.504	.484	.404	.520	.646	.638	.571	.602	.703	.697	—	
	Ⅳ4	.116	.475	.365	.464	.484	.184	.634	.609	.677	.698	.330	.556	.534	.439	.591	.642	.668	.580	.584	.790	.753	.805	—

表２２　各項目の最大の相関係数とその設問項目

設問項目		最大の	最大の相関係数となる設問項目	
Ⅰ1	授業全体を通じての出席率(5:90%以上, 4:70-89%, 3:50-69%, 2:30-49%,	.411	Ⅰ2	この授業に積極的に参加した
Ⅰ2	この授業に積極的に参加した	.511	Ⅰ3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた
Ⅰ3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	.625	Ⅰ4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした
Ⅰ4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	.625	Ⅰ3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた
Ⅰ5	シラバス（履修要綱の講義内容）は受講に役立った	.484	Ⅳ4	この授業を受けて満足した
Ⅰ6	授業の予習復習等に毎週当てた時間（5：3時間以上，4：2-3時間，3：1-2	.433	Ⅰ4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした
Ⅱ1	聞きやすい話し方だった	.706	Ⅳ1	わかりやすい授業だった
Ⅱ2	各回の授業内容の量が適切だった	.677	Ⅱ3	各回の授業のねらいは明確だった
Ⅱ3	各回の授業のねらいは明確だった	.838	Ⅱ4	各回の授業内容は明確だった
Ⅱ4	各回の授業内容は明確だった	.838	Ⅱ3	各回の授業のねらいは明確だった
Ⅱ5	十分な静粛性が保たれた	.363	Ⅱ4	各回の授業内容は明確だった
Ⅱ6	教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	.574	Ⅱ4	各回の授業内容は明確だった
Ⅱ7	板書のしかたが適切だった	.565	Ⅳ1	わかりやすい授業だった
Ⅱ8	映像視覚教材（ビデオ，OHP，パワーポイントなど）の使用が効果的だった	.514	Ⅱ9	教員は授業の準備を周到に行っていた
Ⅱ9	教員は授業の準備を周到に行っていた	.609	Ⅳ2	授業全体の目標が明確だった
Ⅲ1	新しい考え方・発想に触れた	.649	Ⅲ2	基本的知識が得られた
Ⅲ2	基本的知識が得られた	.668	Ⅳ4	この授業を受けて満足した
Ⅲ3	テーマが現代的な意味を持っていた	.696	Ⅲ4	最新の学問成果に触れた
Ⅲ4	最新の学問成果に触れた	.696	Ⅲ3	テーマが現代的な意味を持っていた
Ⅳ1	わかりやすい授業だった	.790	Ⅳ4	この授業を受けて満足した
Ⅳ2	授業全体の目標が明確だった	.784	Ⅳ1	わかりやすい授業だった
Ⅳ3	学問的興味をかきたてられた	.805	Ⅳ4	この授業を受けて満足した
Ⅳ4	この授業を受けて満足した	.805	Ⅳ3	学問的興味をかきたてられた

７－７　「所見集」の設置場所

「所見集」は以下の図書館に設置する。

池袋本館および新座図書館：全科目
人文科学系図書館：文学部、全学共通カリキュラム
社会科学系図書館：経済・社会・法・経営学部、全学共通カリキュラム
自然科学系図書館：理学部、全学共通カリキュラム

2006年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

座　長	栗　田	和　明	（文学部）
	菅　沼	隆	（経済学部）
	木　田	祐　司	（理学部）
	石　川	淳	（経営学部）
	箕　口	雅　博	（現代心理学部）
	大　野	久	（学校・社会教育講座）

分析

大学教育開発･支援センター

副センター長	大　野	久	（学校・社会教育講座）
学術調査員	茂　垣	まどか	

2006年度「学生による授業評価アンケート」報告書

2007年11月発行

編集　立教大学2006年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

発行　立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋３－３４－１

TEL 03－3985－4624　FAX 03－3985－4615

http://www.rikkyo.ne.jp/grp/cdshe/

e-mail　cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

印刷　神谷印刷

〒115-0043 東京都北区神谷1-20-8

TEL 03－3912－2571　FAX 03－3927－3863